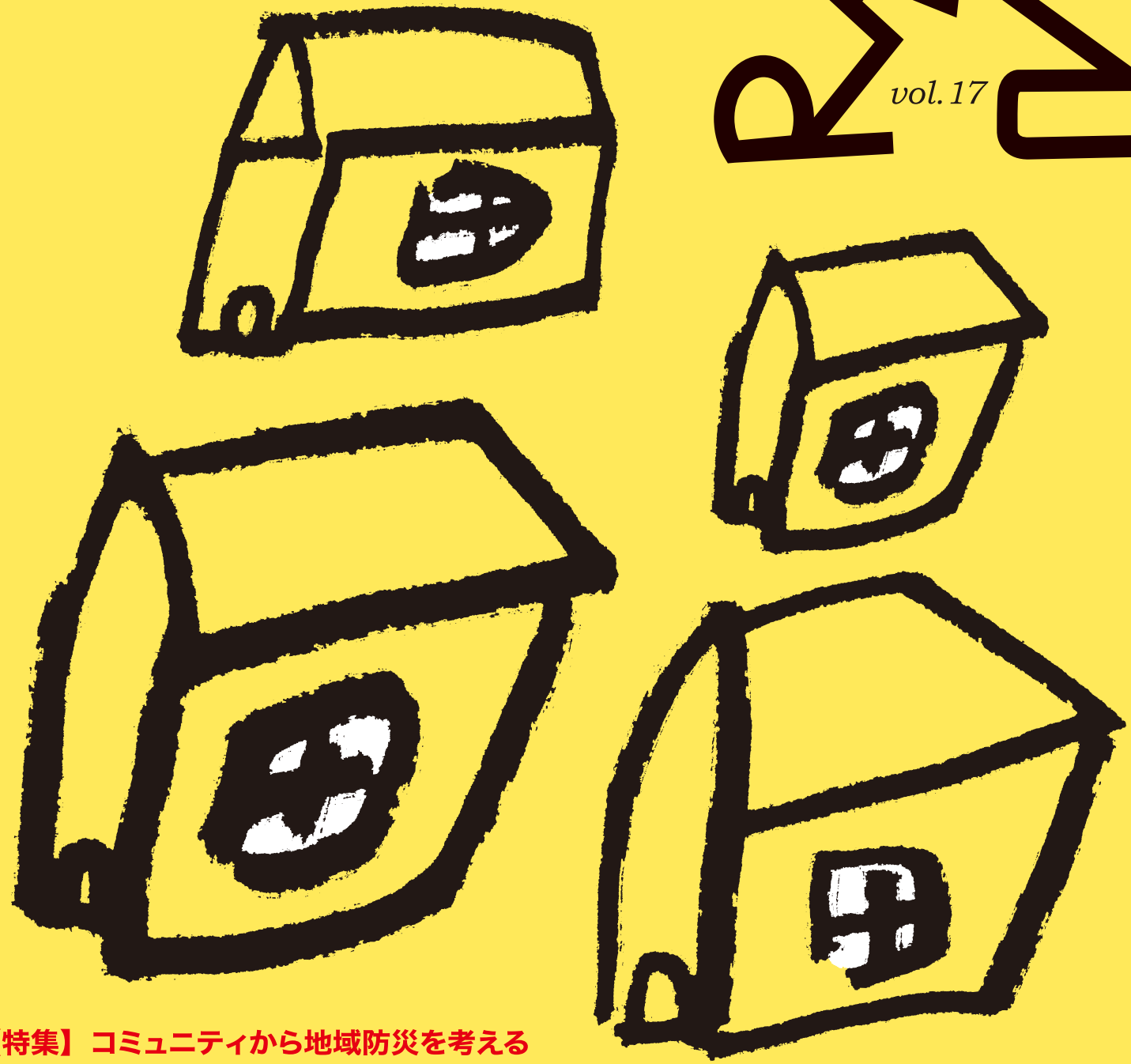
REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,
KANAGAWA UNIVERSITY

RADC

vol. 17



【特集】コミュニティから地域防災を考える

RAKU vol.17

目次

・特集　コミュニティから地域防災を考える・・・・・・・・・・・・・・　1
プロローグ　地域防災とコミュニティ　・・・・・・・・・・・　2
神奈川大学と地域・防災　今までの取り組み　・・・・・・　4
全国の先進事例調査研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
事例考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　14
六角橋地域の研究と考察　大学の地元で考える・・・・・　16
石田敏明先生インタビュー　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20
退官／田野耕平先生　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　25
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　26
・建築探訪・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　27
山口文象と町田市立博物館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　28
事務所訪問記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　35
・2020年度学生優秀作品紹介　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　39
修士論文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
修士論文 全作品リスト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
卒業設計・論文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　61
卒業研究 総評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　74
卒業研究 全作品リスト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　77
学部設計課題 優秀作品　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　79
学部設計課題 総評　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　98
・学外受賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　99
・研究室紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
・沿革・クレジット　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

特集
コミュニティから地域防災を考える

阪神淡路大震災から 26 年、東日本大震災から 10 年。20 世紀の終わりから今日まで、多くの大規模自然災害が断続的に日本列島を襲い続けてきた。被災や避難といった言葉が身近になり、平時からの防災意識を多かれ少なかれ誰もが持ち始めている。

たび重なる災害で注目されてきたのが『共助』だ。発災時・避難生活・復興さらに事前の防災とどの過程においても、自力や公的支援とともに“互いに助け合うこと”はもはや欠かせない。

ご近所や学校、商店街など身近な場で、それはどんな姿をしているだろう。今号の特集では、地域に存在するさまざまなコミュニティがその役割を果たすのではと考えた。世代も手法も異なる集合体が地縁やテーマ重視といった従来の概念を超えてつながるとき、生まれる新たなコミュニティが地域防災そしてまちづくりの担い手となる… 多くの先進事例にあたり、現場に足を運ぶことでたどり着いた考察を、ここにまとめた。

プロローグ

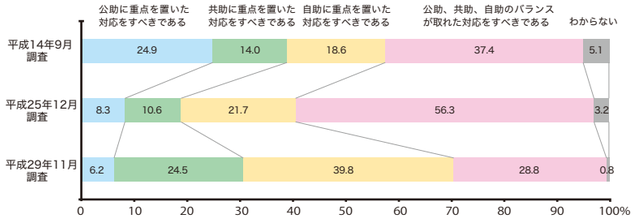
地域防災とコミュニティ

～ 増加する災害に共助で立ち向かうために ～

2011年3月11日に発生した東日本大震災から今年で10年。さまざまな地域が甚大な被害を受け、多くの自治体も迅速な対応が困難となる未曾有の災害であった。

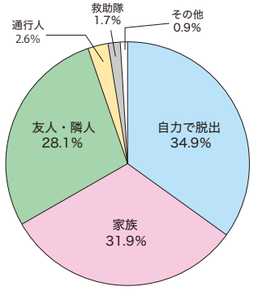
この経験から、地域住民が行政に頼りきりにならず主体的に防災意識を高めること、また発災以前からコミュニティを築いておくことの必要性が唱えられるようになっている。

資料3)　重点をおくべき防災対策(自助・共助・公助の調査時点別比較)

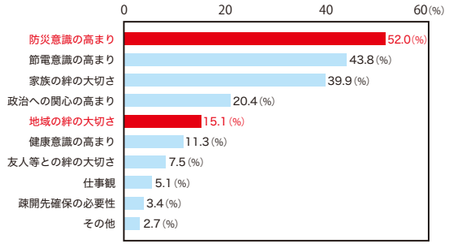


出典：内閣府政府広報室「防災に関する世論調査(平成14年9月調査・有効回答2,155人)、(平成25年12月調査・有効回答3,110人)、(平成29年11月調査・有効回答1,839人)」をもとに作成

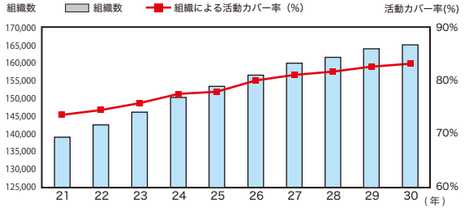
資料4)　阪神・淡路大震災における生き埋めや閉じ込められた際の救助主体等



出典：(社)日本火災学会(1996)「1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書」をもとに作成



資料1）国土交通省「国民意識調査」をもとに作成



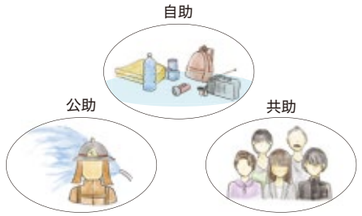
資料2）総務省消防庁資料をもとに作成

防災の三助　自助・公助・共助

防災の基本的な考え方に“自助・公助・共助”がある。

自助とは、日頃から防災マップやハザードマップで地域の避難場所や危険な場所を確認しておく、家具の固定や防災バッグの準備、保存・備蓄できる食料や水を準備しておくなど、災害時に自分の身を自分で守ることである。

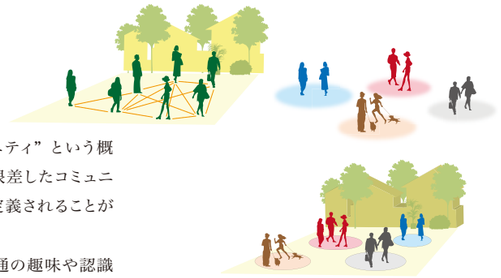
公助とは国や各都道府県、市町村、企業などからの支援を指す。具体的には災害発生前の防災マップや避難場所の提供、災害発生以降は広域避難場所や避難所・給水所の運営といった各支援が挙がる。



そして近年、より重要視されつつあるのが“共助”だ。（資料3）

共助とは災害が発生した際に地域の人同士で助け合うことを指す。阪神淡路大震災の際に友人・隣人といった共助によって救出された人は、助け出された人全体のおよそ3割に当たることが分かっている（資料4）。しかしそのためには、自治体が実施する防災訓練に積極的に参加したり、常日頃から地域の人とコミュニケーションを図ることが重要である。

地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティ



共助を行うためには、日頃から地域の住民とコミュニケーションをとることが大切になってくる。そのためのツールとしてコミュニティがある。

従来、コミュニティは地縁によって自然発生的に成立した基礎社会を指していた。同一の地域に居住して共通の社会観念・生活様式・伝統をもち、強い共同体意識を持った人たちの集まりで、“所属する”という概念はそこにはなかった。しかし最近は地縁の要素が薄れ、人々の集まりそのものを意味するようになり、所属するか否かも選べるものに変化した。このようなコミュニティは年々、所属者が減少を続けている。

さらに近年“テーマ型コミュニティ”という概念が登場し、昔ながらの地域に根差したコミュニティは“地縁型コミュニティ”と定義されることが多くなった。

テーマ型コミュニティとは、共通の趣味や認識を持つ人々の集合を指している。例として鉄道やグルメ、大学のサークル活動などがあり、バーチャルな空間でも多く形成されている。このコミュニティに所属する多くの人はさまざまな地域から来ており、住んでいる地域を共有していないことが多い。そのため、災害が起こった際にもお互いに助け合えず、地域で孤立してしまうと想定される。

これからのコミュニティの在り方とは

最近では、一つの地域内でテーマ型コミュニティを形成する動きが出てきた。

同じ地域内で共通の趣味や関心を持つ人と関わるこの新しいコミュニティは、既存の地縁型コミュニティと比べてより強固なつながりをもたらすことが期待される。

地域の防災活動は若者の参加を待っている

神奈川大学工学部建築学科
防災リスク研究室
荏本 孝久 教授

地縁型とテーマ型、2つのコミュニティの現状

個別に好きなテーマで集まって活動しようとなると、地域と連携をとることが難しくなる。地縁型コミュニティはかつて根強いものであったが、現在は限界がきており存続が難しくなってきていることも確かですね。高齢者の方たちは若者との交流を望んでおり、防災・減災など共同で活動してくれるような組織を探していると思います。

また地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティが分離したままでは、うまい防災にはつながりにくい。なぜなら、配給などは行政を通して地縁型コミュニティに配られるので、テーマ型コミュニティの集まりがそれから排除されてしまう可能性があり、そうすると何もできなくなってしまうので。2つのコミュニティのつながりが大切なんです。

地域防災と若者

まず、皆さんのような建築学生が地域の人と共同していろいろな作業をすること自体が、地域の人たちにとって非常に目新しいことですね。地域の防災活動を行っている人に若い人がほとんどいませんが、若い人と一緒に取り組んでいきたいという希望はあります。

そのためには、町内会など地域の人たちの交流に学生が参加していく必要があります。デザインコースの研究室でも気仙沼などたくさんの土地で活動をしているので、その方法論を理解すると白楽に落とし込む答えが見えてくるのではないかな。地域の人に防災の意識を持ってもらうことは必要。ただ、建築学生は防災を建築としてみることが多いが、地域の一般市民は防災を考える中でそのことは考えていない事が多いです。このギャップをどうマッチングさせれば良いのか、難しいなというところはありますね。

地域防災と神奈川大学

神奈川大学はグラウンドの方に避難所はあるが、横浜市が言っているような地域防災拠点のようなものではない。しかし火災など大きな災害が起きた時に、地域の人たちは大学に避難してくるであろう、そのため大学側は学生や教職員の災害時の食料・物資だけでなく地域の人たちの分も備蓄している。

ただ、物資の問題だけでなく常日頃から交流・情報の共有をして、災害時にうまく立ち回れるほうが良いのではないか？　と思い、地域との協力を取ろうとしている。しかしさまざまな要因によってうまくいっていません。

神奈川大学周辺の地縁コミュニティ

白楽地区は町並みが古くて密集している所が多いので、他の地域と比較すると地縁コミュニティは強いです。それでもコミュニティの長（町内会長）の意識の違いにより、温度差は大きいようです。

どこのコミュニティでも、大学生、高校生を含めて若い人達が活動に参加してもらえないという世代差が問題になっているので、世代間の交流が長期にわたってできるような取り組みが必要です。

足元から考える
～ 神奈川大学と地域の今 ～

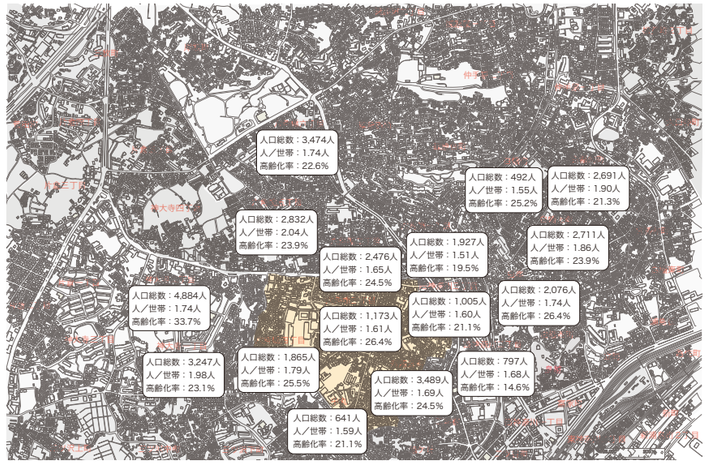
共助を土台とする地域防災において、従来の地縁型と若い世代が構成するテーマ型とが融合したコミュニティは新たな力になりそうだ。実情にさらに迫るべく、神奈川大学の所在地である横浜市神奈川区六角橋地域にも目を向けた。

神奈川大学が位置する六角橋地域

神奈川県横浜市神奈川区六角橋地域は、六角橋一丁目から六角橋六丁目まであり、神奈川大学は六角橋三丁目に位置する。

闇市起源の六角橋商店街をはじめとして、レトロな雰囲気を残すこのまちには長い間住み続けているお年寄りが多い。また大学があること、都心に通いやすい立地であることにより、単身者も多い。六角橋地域は老若男女が暮らすまちである。

この地域で、神奈川大学は災害時の広域避難場所に指定されている。住宅地内にキャンパスが位置しているため、多くの居住者が避難する拠点である。



『神奈川区町別世帯と人口、年齢別男女別人口』『神奈川区広域避難場所一覧』をもとに作成

六角橋と神奈川大学の“地縁”

神大生にとって、六角橋地域は最も関わりの大きな地域である。これまでも地域住民と学生はさまざまな活動やイベントを通して交流してきた。現在はコロナ禍で関係が希薄になっているが、過去には消防団や自治会に自ら参入する学生もいた。

今後、神大生の積極的参加・交流がさらに進めば、地縁型とテーマ型が連携するコミュニティが一定の役割を果たし得る地域防災活動にとって、新たな一助になるのではないか。

神大マルシェ
学生に自分のまちである神奈川区のものや人を知ってもらう活動。第３回マルシェでは、地産地消をテーマに区内の農家や障害者地域作業所が神奈川区の特産品や歴史を紹介した。

六神祭
地域の人々に学生をもっと身近に感じてもらうことを目的に、大学祭とは別に毎年8月横浜キャンパス内で開催するイベント。小学生から高齢者までさまざまな世代が参加し、舞踊や演奏等の発表会や交流会を行っている。

オレンジプロジェクト
『お年寄りに優しいまちづくり』を目指して2016年から実施している認知症啓発活動。学生がデザインしたランチョンマットや『みまもり協力店』認定シールを作成した。

建築学科の防災プロジェクト

神奈川大学建築学科では、いくつもの研究室が地域防災に関する研究や実践的プロジェクトに取り組んでいる。

山家京子研究室
鎌倉市大町コミュニティマップ作成プロジェクト 2008

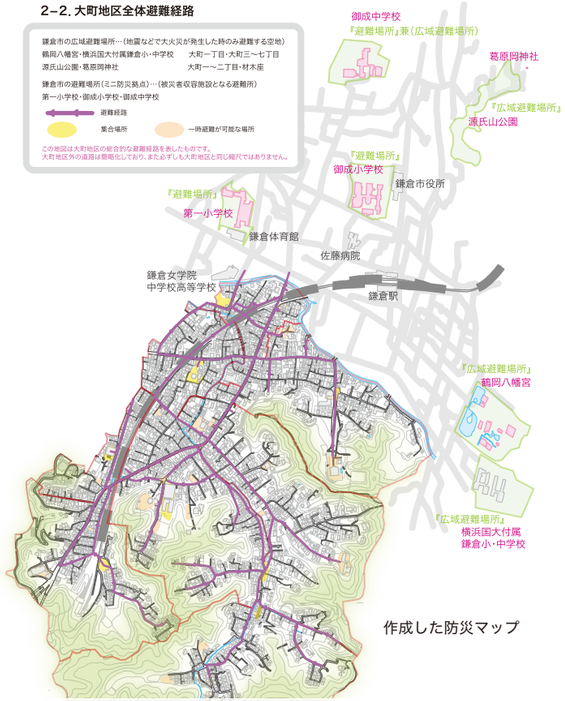
大町自治連合会と鎌倉市、そして神奈川大学が協同し行われたプロジェクト。住民同士の結びつきが安否確認や避難を円滑にすると考え、防災マップ作成ワークショップ（以下 WS）を開催した。その後はさまざまな角度から地域コミュニティの活性化に取り組んでいる。

防災マップ作成 WS
『大町地区で共有したい情報の地図』
WSでの作業や意見出し、まち歩きを繰り返して完成した。第一小学校への避難経路、危険な場所、災害時に役立つ道具などが記載されている。

VuTOまち歩きワークショップ
『映像と音で感じる地図』
大町の危険な箇所や危険に対応するための装置を映像と音で感じながら、まちを再発見できる活動。

ボードゲーム体験ワークショップ
『遊びながら地区の課題を共有する地図』
地形による制約から自治・町内会同士の情報共有について体験できるゲーム。他の自治会の人と防災について話し合うきっかけになる。

ご近所マップ体験ワークショップ
『ご近所で身近な情報を共有する地図』
生活の中で起こった身近な情報を共有する地図である。回覧板を使って、ご近所の様子や災害時に役立つ情報を書き込むことができる。



作成した防災マップ

曽我部研究室
大島みらいチーム　気仙沼大島のみらいを考える３日間

東日本大震災後、曽我部研究室は信州大学や神戸大学とともに、被災地である気仙沼大島の震災前の街の記憶を模型で復元する活動を行った。さらに支援活動や浸水マップ作成を行っていた関西学院大学総合政策学部チームとともに４大学で共同チームを結成し、気仙沼大島での活動を続けた。

現地での活動を通して住民との信頼関係を形成し、2012年秋より復興まちづくりに向けた住民集会『大島のみらいを考える会』を開始し、2016年３月までに計29回開催している。

そのうち、2013年９月に行われた『気仙沼大島のみらいを考える３日間』では、将来を担う地元の中学生と連携し、３チームに分かれて島の将来ビジョンを描く“体験型デザインワークショップ”を行い、島民の復興まちづくりへの関心や参加を促した。

曽我部研究室が関わったＡチームの実践内容
1日目のディスカッションでは「自分の家の近くからの景色がきれい」「通学路の途中に怖い噂のある長い階段がある」など、自分しか知らない場所の話が多く出た。
また「ここで何ができるだろう」「何があったらもっとよくなるだろう」といった、普段とは違った視点を持って島を歩き回った。
2日目は調査を元に、自分だけが知り、かつ大勢に知らせたい魅力的な場所を地図にプロットして発表の準備をした。

1日目／開会式

2日目／島歩きワーク

3日目／全体報告会

地域防災の今
～コミュニティに特化した先進事例を読み解く～

地域単位での防災活動は全国各地に広がっている。ここではコミュニティや住民参加を基本とする先進的な事例群に着目、４つのカテゴリーに分類しその手法や実践内容を俯瞰した。

住区・ご近所・集合住宅

街はスケールを異にする多様な“集まり”で成り立つ。学校区・隣近所・マンションなどそれぞれの場所性が、その防災活動にも反映されている。

洪水ハザードマップづくり

保護者に対し、救出資器材について説明が行われる

小学校を核とする多彩な取り組み

横浜市立太尾小学校　地域・学校・保護者連携協働（神奈川県横浜市）

横浜市港北区にある太尾小学校は、小学生だけではなく保護者や地域の住民たちが参加する学区防災訓練を行っている。

地域防災拠点訓練と授業参観を同時に行っている活動で、小学生は授業として、保護者は授業参観として防災訓練に子ども達と一緒に参加し、PTA も協力的に携わる。

訓練では、校庭に集合した約2000名の参加者による『太尾防災劇場』が開催される。防災劇場は消火器を使った初期消火の訓練、小学生と保護者のバケツリレー、サッカーゴールを倒壊家屋に見立ててジャッキ等を使う救出訓練やAEDの使い方講座を行った後、消防団が放水するという流れだ。

教室内での授業参観では、理科の授業に付随して地域の洪水ハザードマップを活用するなど、カリキュラムマネジメントとして横断的に取り組まれている。さらに小学生だけでなく保護者に向けて、救出班が救出資器材の説明をするといった活動もある。

これらの活動は地域防災拠点運営委員会・『お父さんたちの会』・PTA役員・保健厚生委員会・成人教育委員会・太尾小学校教職員が共同で作業する。これにより校内と同時に地域住民の防災の意識向上がはかられるしくみ。

防災授業はどの教員も工夫して行っている。それぞれの団体がコミュニケーションをしっかり取りつつ、教員も指揮する側として防災訓練に取り組むことで、地域がより一体となり自助・共助に対する意識が根づいていく。

隣近所で顔見知りを増やす『おとなり場』

神奈川県横浜市片倉町大丸町内会（神奈川県横浜市）

片倉町大丸町内会では防災時に安否を確認し、助け合う隣近所として『おとなり場』が組織されている。

『おとなり場』は通りを挟んだ15軒～20軒の向かい同士、隣同士でグループをつくるというもので、日常的に顔の見える関係を作り上げた。隣近所の小さな組単位で被災した際にお互いの様子を確認できる『おとなり場カード』も考案されている。これは最低限の個人情報を共有して、災害時に「助けが必要か必要でないか」の判断ができるものだ。

『おとなり場』と『おとなり場カード』で顔見知りを増やすことで、いざというときに住民同士が円滑に協力して助け合える関係性が構築されている。

おとなり場カード

通りを挟んでグループが形成される

マンションから発信するコミュニティ

グランフォーレ戸塚ヒルブリーズ管理組合・自治会（神奈川県横浜市）

分譲マンションであるグランフォーレ戸塚ヒルブリーズでは、居住者同士の交流に限らず、地域の住民とのつながりをもつくる活動が行われている。

約500mの間にソメイヨシノが咲き乱れ、花見の名所である横浜市戸塚の八幡山では、マンション自治会が『グランフォーレ桜祭り』を毎年開催する。この祭りには“地域参加型“の意識が根底にあり、マンション居住者だけでなくさまざまな地域住民が参加している。

地元・舞岡中学校のブラスバンド演奏や明治学院大学のチアリーディング、学生ボランティアによる模擬店、近隣商店街店長のパフォーマンスに加え、マンションの居住者有志による豚汁やカレー、綿菓子、生ビールの店なども出店する。マンション住民から地域の学生、地域住民にいたるまで多種多様な人々が交流する場が形成され、顔見知りの関係はマンション内を越えて地域へと広がっていく。

地域資源の活用

ここでは”地域資源”という、一見防災とは遠いものを生かした事例を紹介する。

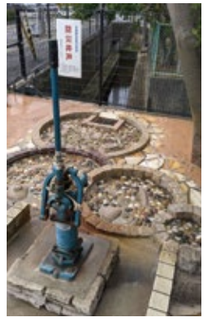
伝統的な井戸で災害時も水を確保

加古川グリーンシティ防災会（兵庫県加古川市加古川町）

加古川グリーンシティでは阪神淡路大震災以降さまざまな防災対策を行っている。
その一つとして、今では珍しい井戸と手押しポンプを小さな公園と共に作成、設置した。

平時はこの井戸で子供たちが遊び、災害時は断水によって水が確保できなくなった際に飲料水としての利用以外に生活水としての利用が見込まれている。生活水とは、料理やトイレなどに使う水のことであり、災害時はこの生活水確保が問題になることが多いため、この防災井戸によって解決をはかった。

加古川の名水についての看板


第二期防災井戸

第一期防災井戸

道に名をつけて街への意識を育む

六原まちづくり委員会（京都府京都市東山区）

東山区内に位置する六原学区は、明治の近代化以降、戦争で大きな被害を受けなかったため今でも歴史的な街がそのまま残っている。その学区内の、名前がなかった路地などに愛称をつけ約100枚の銘板を設置した。この愛称が浸透することで緊急時の通報や災害対策時の“場所の認識”が向上し初動対策としての効果が見込まれる。

さらに、町部長リーダー研修や住民へのアンケート調査でわかった袋路の２方向避難の確保のため、所有者に協力してもらい避難扉を設置したり、災害が発生した際に倒壊などの危険が想定される場所を専門家と共に歩き、近所の防災について家族や近所で話し合う機会も多くなっている。

この事例の特徴は道に名前をつける点である。このことで人々は道に愛着が湧き、袋路の改修や街歩きも行うことで、普段何気なく通り過ぎていく道や周辺の建物についても、災害時の避難経路について具体的に考えられるようになる。

銘板設置の様子
（写真提供：六原自治連合会HP）

設置完了
（写真提供：六原自治連合会HP）

ホタルと共に災害の記憶を受け継ぐ

ながさきホタルの会・伊良林小学校ホタルの会（長崎県長崎市伊良林地区）

1982年7月23日、未曾有の集中豪雨が長崎市を中心に襲い、死者・行方不明者299人に及ぶ長崎水害が発生した。長崎市立伊良林小学校の付近に位置する御手水川も鉄砲水が発生し、小学校に通う児童３名、保護者７名が亡くなった。昔のようにホタルが舞ってくれれば犠牲の魂も慰められるだろう…亡くなった人々を思い、慰霊することを目的に、小学生がホタルの幼虫を育てて川に還す活動が始まった。

川や環境の保全や、ホタルの飼育活動を通して自然や生命の尊さや関わり方を学ぶ中で、子どもたちは過去の水害の恐ろしさを考え防災に対する意識を向上させている。また児童だけでなく、PTAやOBの有志など多くの地域住民が参加することで縦のつながりが生まれ、33年間にも及ぶ長い活動となっている。

放置された竹林の伐採

ぽてっとライト

製作の様子

地元の竹で防災グッズづくり

あこうバンブーミクス（徳島県阿南市）

ここはかつて全国有数のタケノコの産地として全国的に有名な地域であったが、生産者の高齢化や後継者不足によって里山は荒れ果てた姿になってしまっていた。この現状を見た高校生が地域のNPO法人と共に対策を行うようになった。

あこうバンブーミクスは、徳島県立阿南高等学校が毎週の課題学習の時間に行っている活動だ。放置竹林を伐採し、その竹を使った防災ものづくりとしてさまざまな製品を作っている。『ぽてっとライト』は，倒れると自動的に点灯する防災懐中電灯である。

放置竹林の解消という地域課題と防災ものづくりを結びつけた個性あふれる事例。

さまざまな担い手

実際の地域防災を担っているのは立場も世代も多様なプレイヤーだ。そこでは専門的な知識や技術も駆使しつつ、楽しみも加えた実践的な取り組みが可能となる。

避難所運営ゲーム

学生団体による炊き出し訓練

大学をまちに開く

高知大学（高知県高知市）

高知大学は2006年に、課題解決に取り組みながらその成果を地域・国際社会に還元することを目指し防災推進センターを設立した。また東日本大震災の発生を踏まえ、地域支援計画検討WGを開始した。

このWGの主な目的は教職員、学生、大学生協、地域がフラットな立場で協働し、「おたがいさま」の関係を築こうとする所にある。南海トラフ地震での被害を具体的に想定し、キャンパスでの避難所運営想定や担い手作りを、学生団体、地域住民とワークショップを通じて行うことで事前防災とする。

大学の役割は受益者である住民、学生、教職員の応分負担を原則に、備蓄を実現できる仕組みを提供できることとし、実際に防災畳を500枚備蓄して大学のレジリエンス化に取り組んでいる（2021年7月現在、取り組みはコロナ禍により休止している）。

まちと学生の連携

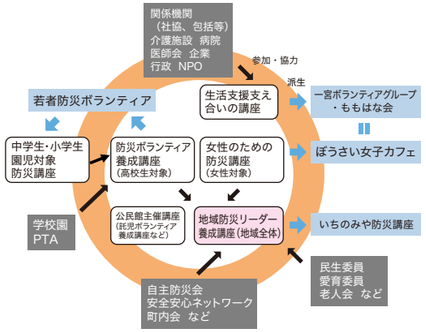
龍谷大学（京都府京都市）

2018年12月に実施された全学防火・防災訓練

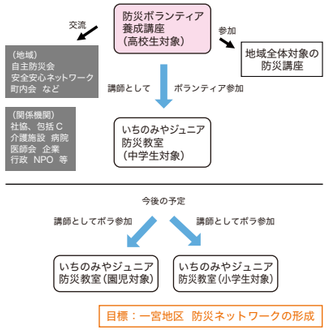
龍谷大学では学生自らが地域防災に関するユニークなプランを提供することを目指し、救命・防災の知識とスキルの習得のため、社会学部にて『社会共生実習（The First Aid)』を行っている。防火・防災だけでなくまちづくり的な視点をも持ち合わせていることが特徴だ。地域住民と一緒に地域課題について考えることで、互いの意識や情報を共有していく。

毎年11月には、授業を一斉に早めに切り上げての全学防火・防災訓練を実施している。大学のような大きな教育施設で全体訓練に取り組んでいる例は多くなく、意識の高さがうかがえる。また、実際の消防団を招いての避難方法訓練も取り組まれている。

● 連携の輪（ネットワーク）



● 若者を対象にした防災講座の流れ（R3年度）



ダイヤグラム提供：岡山市立一宮公民館

防災講座

公民館でつながりの輪を広げる

岡山市立一宮公民館（岡山県岡山市）

岡山市立一宮公民館では『地域応援人づくり講座』と題し、公民館と岡山市が連携した防災講座を中高生を対象に行っている。

実際に防災士資格を持つ講師を交えて、HUG（避難所運営ゲーム）やワークショップを踏まえ、災害時に必要な知識やスキルを学ぶ。さらには「高校生に災害時何ができるか」という一歩踏み込んだ提案を高校生自身に考えさせる。

地域、学校、さまざまな機関と横のつながりを深め、大人から若者まで多様なプレイヤーが連携の輪の楔となり、持続可能な地域防災ネットワークを構築している。

ジオラマを用いて検討する

制作したジオラマ

未来の防災リーダー育成

徳島市立津田中学校（徳島県徳島市）

徳島市立津田中学校防災倶楽部では、倶楽部活動として地域と一体となった防災活動を企画・運営している。これまでに防災座談会や地元保育園、小学校などでの出前授業を実施した。

中でも“南海トラフ巨大地震発生後の事前復興まちづくり案”をテーマとし、ジオラマを用いて実際のまちに防災提案を落とし込んでいく取り組みは高い評価を得ている（2021年7月現在、活動は休止している）。

画像提供：福岡市市民局地域防災課

IOTの活用

現代を生きる人々にとって欠かせないツールとなったスマートフォンやデジタルサイネージ。身近になったIOTは、防災においても十二分な活用が望まれる。

スマホでポケットに防災を

「ツナガル＋」福岡市・富士通九州システムズ

福岡市は、熊本地震で課題となった“災害時における指定外避難所の把握”などに対応できるよう（株）富士通九州システムズと共に防災アプリ『ツナガル＋』を開発した。このアプリの最大の魅力は平常時と非常時、その二面性にある。

平常時：地域の情報交換ツール

平常時は地域の情報交換の場として使用される。アプリ内では誰でもコミュニティを自由に作成することができ、参加者同志で容易に情報共有できる。

自治会や公民館サークルでの交流にも活用されるなどまちづくりの側面も併せ持つ。また、現在地の周辺情報を投稿し、参照することも可能だ。地域のイベントや新しくできたお店の情報、事故による交通規制などを写真つきで紹介、確認することができる。

緊急時：防災情報ツール

緊急時は災害時モードとして自動的に地域の防災情報アプリへと変化し、通知が配信される仕組みになっている。

大きく分けて４つの機能が組み込まれている。１つ目は避難所の表示と選択した避難所までのルート案内。２つ目は避難所内の電子掲示板として情報配信。３つ目は市からの支援情報の知らせ。最後は指定外の避難所から市に向けての情報発信機能だ。

やむを得ない理由で指定避難所へたどり着くことができない場合を想定し、利用者がアプリを通じて市に各種の要請を送れる点は、熊本地震で被災したリアルな経験から発想された。

福岡市web　https://www.city.fukuoka.lg.jp/shimin/t_bousai/tsunagaru_plus.html

実際のアプリ画面

全国の避難所検索や安否確認ができる

『全国避難所ガイド』1st Media Corporation

全国の自治体が定めた災害時の避難所や避難場所を約17万件収録し、現在地周辺の避難所を検索して道順をルート案内するナビゲーションアプリだ。避難所をはじめ、広域避難所・一時避難所・帰宅困難者一時滞在施設・津波避難施設などの避難所関連施設から、給水拠点、医療機関までデータとして収録されている。

安否情報を登録・確認することもできる。現在地及び避難所から登録ができ、Googleパーソンファインダー・災害用伝言板（web171）・J-anpi安否情報まとめて検索から情報の確認が行える。オフライン時でも、キャッシュされた避難所や地図が表示される仕組みも大きな特徴だろう。

すでにさまざまな自治体と提携を結んでおり、今後も情報は増えていくことが予想される。

全国避難所ガイドweb　http://www.hinanjyo.jp/

https://apps.apple.com/jp/app/id446063625?ign-mpt=uo%3D4（Iphoneの場合）
https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.hinanjyo.guide（Androidの場合）

映像メディアで意識を高める

『デジタルサイネージ防災』リコージャパン

デジタルサイネージという媒体を使い、防災を呼びかけ啓蒙する取り組みもある。

リコージャパンは企業や店舗などに課される安全配慮義務に基づき、オフィスや路面店など向けにデジタルサイネージで災害コンテンツを発信・提供している。普段から防災や安全情報もキャッチできるコミュニケーション手段として使用し、緊急時はそのまま災害情報が表示される。

災害時に取るべき行動や対処の方法を、平時から情報として伝えることで防災意識の向上を図るのが大きな目的だ。

画像提供：リコージャパン

実際の啓蒙画像

リコーデジタルサイネージ防災web
https://www.ricoh.co.jp/signage/special/disaster-prevention/

事例考察

共通する手法から課題まで
先達から学び考える

東日本大震災から10年という節目の年であることから、今号の特集では防災について取り上げた。

初めのうちは構造的に強い建築といったハード面ばかりに目がいってしまった。しかし、特集メンバー内で話し合っていくうちにハード面だけでなく、日常的な地域とのコミュニケーションといったソフト面が、防災活動における事前対応として重要であることを理解した。このソフト面で防災の事前対応である地縁型コミュニティの在り方について考え、発信すべきとして、各地の先進事例にあたることにした。

日本は災害大国であり、全国各地でそれぞれの状況を踏まえた防災活動が活発に行われている。多様な取り組みを精査し学ぶ中で、さまざまなことが見えてきた。

地域を生かす、主体的意識を育む

参考にすべき点として見られたのは、地域ごとの事情・状況や歴史を取り組みの前提とするスタンスである。

多くの地域で、耐震補強や耐火建築などハード面の防災対策、取り組みは昔から行われてきていた。しかし、実際にこのような対策ができる地域はごく限られ、それ以外の住宅密集地や木密地域ではハード面ではなくソフト面で対策していく必要がある。

例えば銘板設置の取り組みを行っている六原学区は、明治以降の建築が今でも現存しており、建築に直接的な対策を加えることは難しい。そのため銘板活動を通して地域の住民が自分の住んでいる町に関心を持つきっかけをつくっている。

主体的な防災への意識づくりにも力が入れられている。

どの活動もそれを広く伝え牽引した先駆者がいることで発展したと思われ、成功事例の大きな特徴の一つと考えられる。その一方で先駆者が抜けてしまうと活動がストップすることも想定される。持続的な活動は上からの指示で下が動くのではなく、活動に参加する人全員が自分で考えて行動することが肝要だ。このような考え方は災害時においても必要であり、そのための意識づくりは大きな意義があると同時に課題でもある。

担い手育成、活動周知は喫緊の課題

見えてきた課題もある。活動の継続と人材育成の難しさ、そして周知活動がそれだろう。

活動が長期にわたれば先駆者が抜けてしまうことは容易に予想される。そこで活動が止まってしまわないようそれぞれが自分で考えて行動することが大切になる。加えて昨今のコロナ過への対処のように時代の流れに随時対応する柔軟さが活動を長く継続させるだろう。

人材育成の課題は深刻である。少子高齢化による若い世代の防災活動への参加減少、それにともなう担い手不足、被災経験がない世代の防災意識や知識の不足がその主な原因として挙げられる。

よって、周知活動が大切になってくる。活動に参加しない地域住民への啓発や参加の勧誘、研修会開催、若い世代に向けてはインターネットを利用した発信などが重要である。

神奈川大学建築学科の防災研究と実践

そんな中、神奈川大学の建築学科でもハード面を含む防災対策の実践や研究が活発に行われている。

デザインコースの曽我部研究室では、東日本大震災が起きた2011年の6月からアーキエイドと協力して宮城県石巻市牡鹿半島の牧浜・竹浜・狐崎浜で被災した住民に聞き取りを行い、住民の要望や危険な場所を地図に落とし込み、さらに高台移転した際にどうなるのかを検討し提案した。

構造コースの荏本研究室では、有効な防災・減災対策に役立てるため、フィールドワークやコンピューターを用いた解析シミュレーションを行っている。地震によって引き

写真提供：京都市公式HP京都市情報館

起こされる建築被害などハード面のほか、地震被害予測方法や防災対策といったソフト面も研究している。

さらに荏本教授は地域住民と協働する防災活動にも取り組んでいる。『防災塾だるま』は2005年に設立された任意団体だ。地域の人たちとともに、当初は防災情報の共有化と人と人とのつながりの構築を大前提として活動、今日では学校防災及び地域防災のための協力講座といった活動を通じて、地域社会のまちづくりに貢献している。

六角橋地域を調査研究・考察する

どの先進事例も、それぞれの地域の人的条件や地理的条件を踏まえたうえでの防災活動として取り組まれており、他の地域で同様のことをしても解決につながる手法ではないと分かった。しかし共通していえるのはどの事例も地域の住民同士のつながりを大切にしていることで、その上で防災について日常的に皆で話し合い意識することの重要性も示されている。

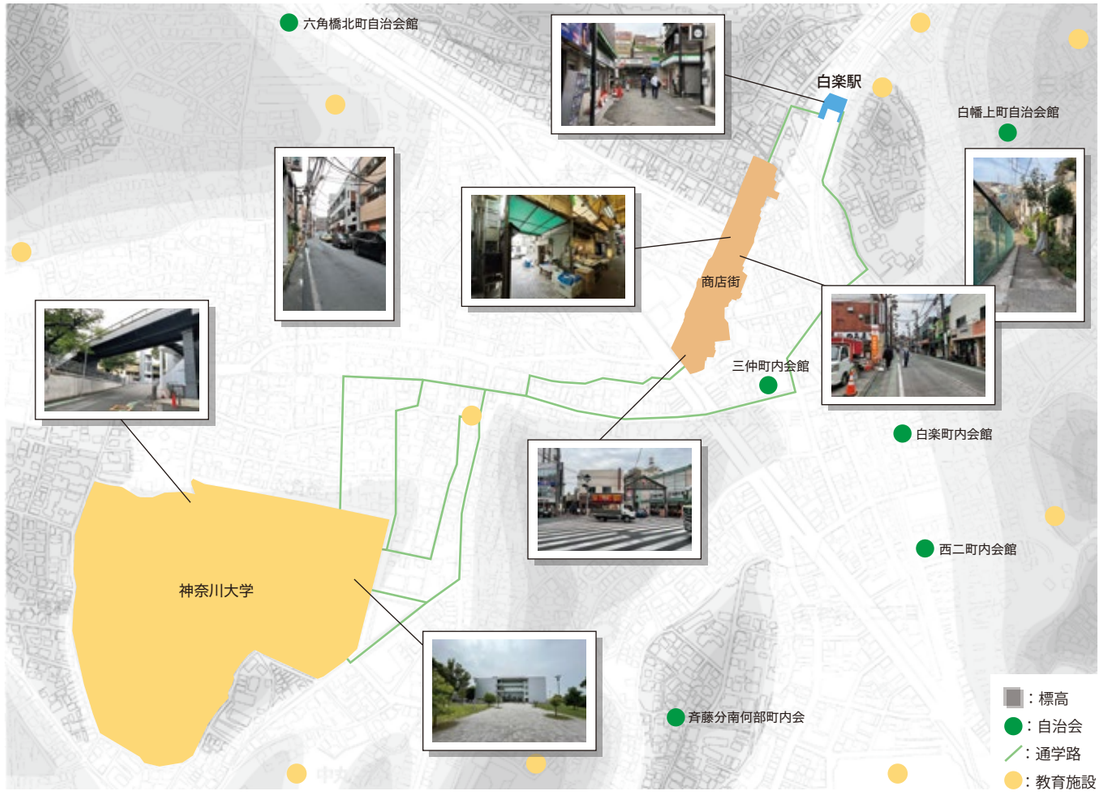
これを踏まえ、特集の後半では神奈川大学のキャンパスが位置する六角橋地域に関する調査研究を行った。人的・地理的条件も含めたコミュニティの現状調査から、今後の地域防災で重要な役割を果たすであろう、大学生を中心とした若い世代を核とする新たなコミュニティづくりの可能性までを考察した。

六角橋地域を研究・考察する

既存のコミュニティに学生が加わることで、災害時、迅速に多くの人が助かる未来を創造したい。神奈川大生に最も近しい六角橋地域を対象に、現地調査から先進事例の考察までを踏まえつつ、六角橋の地域防災においてどのようなコミュニティや対策が必要なのかを研究する。

現在の六角橋

現状の六角橋の地域拠点や地域資源を地図上にプロットすることで、災害想定を浮き彫りにしようと試みた。



六角橋の地域特性

密集した住宅地

勾配がある

道路幅員が狭い

教育施設が多く、子どもや学生が多い

人通りが多く狭い道で賑わう商店街

災害想定

①密集した住宅地　②傾斜地が多い　③教育施設が多い　④狭く入り組んだ道や袋小路　⑤大学生や単身者が多く住む

燃え移りやすい

③より、地域には避難場所が多い。しかし②や④のような地理的条件により、災害時に避難場所へ向かうのが容易ではないと想定される。高齢者が多く住む六角橋地域において、これは大きな課題ではないか。そして⑤の該当者は、情報難により避難場所や避難ルートを理解していない人が多く、避難難民になる恐れがある。

商店街でお話を聞く

六角橋商店街の防災活動や神奈川大学との関わりを、現地にてうかがった。

● 過去にあった火災

六角橋商店街は過去10回、火災の被害にあった。それでも何度も復活し現在も賑わい続けている。店が全焼してしまっても商売を続ける人がいるほど、愛着を持つ人が多い。

六角橋商店街専務理事
糸井 勇さん

● 学生に望むこと

六角橋商店街のキャッシュレス化のために、商店街のお年寄りの方々へデジタルツールの使い方などを教えてほしい。また、コロナ禍で六角橋商店街を知らない学生が増えてきている。積極的にイベントなどに参加して、もっと魅力を知ってほしい。

● 防災の取り組み

火災報知器

店舗外にある火災報知器は、火災発生時には通行人が押して消防に連絡することができる。昼間は商店街の私たち、夜間は地域住民というように、六角橋商店街や白楽地域を地域住民と連携して守って行けたら良い。

誰でも押せる火災報知器

災害時の担当

商店街のブロック毎の防火管理者（糸井さんなど3~4名）を中心に、避難誘導をする係、初期消火をする係のように、今後役割分担を決める予定。

町内会との防災訓練

春と秋の2回行われ、商店街にある3つの消火器を誰もが使用できるように訓練している。しかしいつも参加する人は同じで、学生などの若い世代はほとんどいない現状。

● 神奈川大学の学生との関わり

まち SHOKU

コロナ禍の現在での取り組みとして、商店街が六角橋連合町内会、地域ケアプラザなどと連携して600円の商品券を学生に配布し、学生の生活を支援した。

ドッキリヤミ市場

フリーマーケットやパフォーマンスなどで賑わう商店街のシンボルイベントで、使用するテントやライブ会場の設営を神大フェスタ実行委員が手伝ってくれる。それらの機材は神大フェスタの際に貸していて、設営方法を身につけた実行委員が活躍しているようだ。

ドッキリヤミ市場

神大フェスタ設営風景

まちSHOKUでの交流

●お話を聞いて

係決めをすることで一人一人の防災への意識を高めることができる。コミュニティに参加し所属意識を持つことは、地域への愛着にもつながりそう！

六角橋商店街の防災の試みがもっと地域住民に広まって欲しい…。学生や商店街、地域住民それぞれが互いを共助できる関係が良い！

六角橋のコミュニティ活動

六角橋にはさまざまな地域団体が存在し、個々でまちを活性化させる活動を行っている。その中でも多世代が参加している活動や学生が主体となっている事例を紹介する。

まち×学生プロジェクト

「まち×学生プロジェクト」（以下まちかけ）に実際に関わる六角橋地域ケアプラザの地域交流コーディネーター原島隆行さんにお話を伺った。

地域交流コーディネーター
原島 隆行さん

まちかけとは

今は大学の支援を受けながら大規模に行われているが、地域と関わりたい学生が町会とつながるために始めた学生主体の活動である。

まちかけでのイベントをきっかけとして、新しいプロジェクトがいくつか生まれている。それらに参加者をどんどん巻き込むことで、学生の交流人口を増やし継続的な関係性を築けるようにしている。

卒業してからは六角橋と関係を絶ってしまう学生もいるが、当時学生だった若者が出会えた縁を忘れず、将来六角橋の“まちの人”として戻ってきてもらうために、卒業した社会人の居場所を作る活動も行っている。

学生と住民の関係性

今はコロナ禍で学生と地域の関係が希薄になってきているが、過去には消防団や自治会に自ら参入する学生も数人いた。まちかけ始動当初は学生が地域に介入することをよく思わない人もいたが、活動での交流やコーディネーターの声掛けが奏功し、若者と共助し合うWINWINの関係を望む人が増えている。

地域住民に「あの神大生！」ではなく、「〇〇君！」と呼ばれるような顔なじみの関係性を築くことがとても大事。平常時に顔なじみになることで、災害時にお互いを心配しあえる存在となる。

課題

このように学生が入りやすいコミュニティは既に形成されつつあるが、このことを知らない神大生が多い。地域住民は主に回覧板や掲示板で情報共有を行っており、学生の目までは届きづらい。

地域に介入するのは勇気がいるかもしれないが、地域コミュニティを継続させる将来の担い手として、たくさんの学生にこの活動の楽しさを知ってほしい。

六角橋北町自治会

道の愛称プロジェクト2019

北町内の坂３つに愛称をつけ、銘板を設置した活動。

昔は商店が立ち並び、場所を説明する際に目印となるものがたくさんあったが、今のまちは特徴的な要素が少なくなっている。そこで児童や近隣住民からの公募で道の愛称が決められた。この活動が現在は六角橋地域全体に広がり、新たに４つの道に愛称がつけられている。

愛称を普及させるためのイベントが企画されたり、設置するプレートを小・中学生を巻き込んで作成したりと、まちの人が主体的に参入できる活動となっている。

防災ハロウィンウォーク

毎年秋、ハロウィンの仮装をした子ども達が『子ども110番の家』となっているお店や住宅を訪問。「いざという時にはよろしくお願いします」と挨拶をし、ご褒美にお菓子をもらう。

日頃から場所を知っておき、お互いに顔を合わせることで何かあった際にも躊躇なく助け合うことができる。さらに災害時に使用される公衆電話や消火装置の場所や使い方を教える機会となっており、身近なところから地域を知るきっかけとなっている。

公衆電話の場所を確認

消火器の使い方を教える

『子ども110番の家』安田商店を訪問

北町サポートクラブ

自治会の活動に少し興味はあるけどアパート住まいでハードルが高い、活動に少しだけ入ってみたい、という住民のための活動。登録制で北町域内に在住・在勤の成人が対象。

時間が空いた時に興味のある活動へ参加でき、自治会の行事で手が足りない時に声がかかって地域の祭りやイベントを手伝えるなど、気軽に地域活動に参加できる。

考察

～ 多世代が住むまちの地域防災で若い世代のコミュニティが果たす役割 ～

木密住宅地域や商店街を有していたり、長く横浜市電の終点として栄えた過去を持つため、六角橋地域は全国的に見ても地縁コミュニティの継続・発展や自らの手でまちづくりを行いたいという意識は高いと言える。

自治会と呼ばれる従来コミュニティの活動内容の不透明さなどに対して、多くの自治会が行政と連携しつつ発信し、まちに開く姿勢を見せている。北町自治会のように登録制のサポートクラブを用意し、自治会に入るきっかけづくりまで手掛けているものもある。

しかしながらそういった取り組みも個々にとどまり、町内会や自治会の垣根を超えた地縁コミュニティは少ない。そこで必要となるのがテーマ型コミュニティである。地域に属さず、広くさまざまな地域に展開できるテーマ型コミュニティは、分断されがちな地縁コミュニティ同士をつなぐ役目を果たすと言える。このテーマ型コミュニティの活動を、学生や若い世代が担えるのではないか。

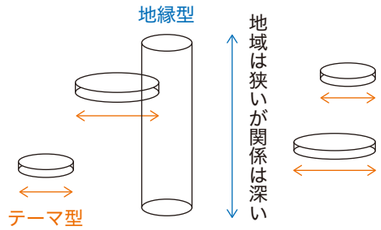
また、高齢者は回覧板や掲示板、若い世代はデジタルツールでの情報共有が主であり、双方の情報が上手く共有されず、せっかくのコミュニティ活動もあまり知られずまちに還元されていない。まちからは、昨今のコロナ禍で一度築いたコミュニティが引き継がれず希薄化が心配だとの声や、今後の世の中に対応していくために学生からデジタルツールの使い方を学びたいとの声も上がっている。役に立てることがあるのではないか。

六角橋は古くからのコミュニティがあると同時に、テーマ型コミュニティを構成し得る学生や若い世代の存在もある。多世代が暮らすなかで従来の地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティが上手く手を取り合い、双方の良さを取り入れながら今後より良いコミュニティ作りを目指すことのできる将来性がある。

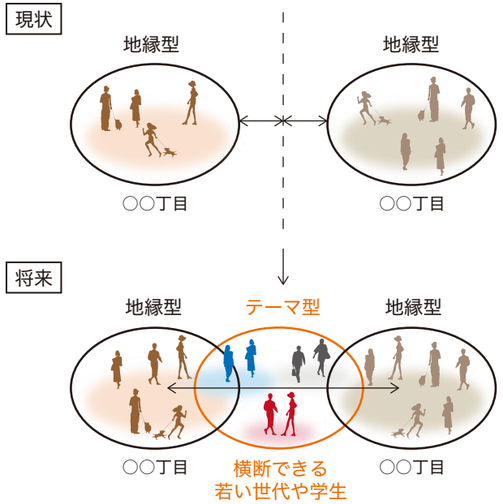
高齢化社会を迎え、地縁コミュニティやテーマ型コミュニティを通じた日常の多世代交流は、災害に代表される有事の際に大きな役割を果たす。コミュニティを継続・発展させつつ、互いにつながることがまちづくりにも良い影響を与えるだろう。

全国的な問題である若い世代のコミュニティへの帰属意識の薄さは、六角橋地域でも同様に見られる。避難所としての役割を持つ大学とそこに帰属する学生は、まちと顔の見える関係づくりを行っていくことが重要だ。今回の特集をきっかけに、私たちも自身が所属する地域でのコミュニティの存在や、全国での防災の取り組みを知った。分散化が叫ばれる昨今の情勢もあり、地縁・テーマ型共にコミュニティのあり方はまさに変化期にあると言えるだろう。

うまく情報を駆使し、多世代や地縁コミュニティ同士をつなぐ架け橋として、若い世代のテーマコミュニティは重要な役割を担う。大学にもさらなる活動や取り組みが期待されるだろう。東日本大震災から10年が経過し、防災の意識やそれに基づくコミュニティのあり方は大きく変化している。未来の防災を担う重要な世代という意識を持って、主体的に生活していきたい。



関係は浅いが地域に囚われず展開できる



石田敏明先生インタビュー

建築の機能と象徴性

～建築を学ぶ君たちへ～

谷川さんの住宅・内観

谷川さんの住宅・外観

石田敏明先生の神奈川大学ご退官にあたり、これまで向き合ってこられた建築への思いやお考え、そして学生へのメッセージをうかがった。

機能と象徴性は相反する建築のテーマ

――学生時代に影響を受けた建築家はおられますか。

興味を持っていたのは菊竹清訓さんと篠原一男さんですね。菊竹さんは思考や技術と表現的なことも含めてですね。学生時代はアーキグラムとかメタボリズムの影響があったと思います。

メタボリズムっていうのは日本初の国際的に評価が高い建築思想で、日本建築の木造伝統構法が示されていたんです。考え方自体は建築の新陳代謝で、今でいうサステナブルな建築につながっていく思想なので、評価できると思いますね。僕はそういったものに興味があって、また菊竹建築は九州・山陰も集中しているので、学生の頃はゼミ仲間たちと一緒によく菊竹さんの建築を見て回ったものです。夏休みの貧乏旅行で、神社の境内で野宿したのは今では良い思い出です。

対極的に位置付けられるのが篠原一男さんの建築で、「住宅は芸術である」と建築界にデビューされました。衝撃的で影響を受けましたね。篠原さんは社会の建築の技術とか産業に結びついた建築を否定してデビューした人だから、対極的ではあるけど魅力的だよね。

昨年の３月くらいに篠原さん設計の北軽井沢にある『谷川さんの住宅』を中井先生と曽我部先生と一緒に見る機会があって行ったら、やっぱりすごくよかったんですよ。機能とかそういうことで建築はつくられる側面があるんだけど、『谷川さんの住宅』は機能だけじゃなくて、建築、余白や空間の象徴性が示されていましたね。ただ、生活空間はちゃんと併設されていて、身体的スケールのとても居心地の良い空間でした。

建築は機能だけで出来ているわけじゃないから、機能と違うところで人の意識に関わってくるんですよ。僕はそれが建築のもう一つのテーマだと思います。

『浦崎の家』に見る場所性

――設計なさった『浦崎の家』は、先に場をつくり出してから機能を入れ込むという操作をされていたそうですが。

そうそう。あれは独立して最初に発表した作品で、場をどうつくるのかってことを意識していました。カルテジアングリッドっていう、ミースが広めた中心性を持たない水平に広がっていく均質空間なんだけれど、水平に広がっていく開いた均質な場をつくり、次に周囲の環境に合わせて機能とか場所のあり方が変容していくような場所を、装置を介入させることで仮設的な場の設えを考えました。どんどん変化していくような建築テーマを意識していました。

『浦崎の家』は、祖父母と従兄のための住宅なんだけど、祖母は、猫と一緒なんだけどさ、日向ぼっこや昼寝のために、場所を選んで生活していた。要するに機能主義のような決められたところで決められた生活をする必要はないんですよ。人間ってさ、ここはこういう場所だからここでこれをしなさいっていう空間の機能に拘束されないじゃないですか。寝たい時にどこでだって寝るしさ。いい風が入ってくるところに横になって日向ぼっこするとかさ、自然な行為だよね。

それが、自然と共にってとこでもあると思うんだけど、そういうルーズが人間の感性を刺激して、別にどこで何をしてもいいんだよっていう思いで、空間に枠組みを与えるのと同時に枠組みから逸脱するような仕組みで浦崎の家を考えていました。

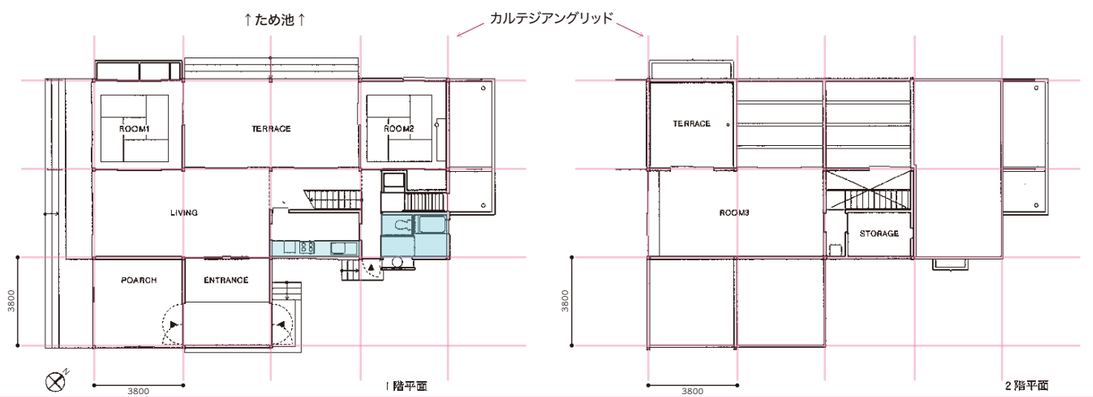
『浦崎の家』の北西には農業用の溜池があるんですよ。建て替える前の家は北西側にほとんどの水まわりがあって、溜池側には閉じたプランニングだったんです。それだと溜池の存在を、目では見てるんだろうけどちゃんと脳まで伝わってないっていうかね、日常的に意識されていなかった。幼い頃、たまに祖父母の家にいくと、僕はむしろ野鳥や魚がいる池の存在が気になっていた。風景として僕は池の方に開くべきだと思って、北西側に大きなテラスを設けました。

そうすると意識がそちらに向くわけですよ。つまり建築には場所や

浦崎の家（２階ROOM３から北東を見る）

浦崎の家（東側外観）

浦崎の家（１Ｆリビングから溜池を望む）



浦崎の家　平面図

水道橋駿河台・安藤広重

大橋あたけの夕立・安藤広重

北斎漫画-十二編《眼鏡を新調する三つ目入道、他》・葛飾北斎

北斎漫画-三編《雀踊り》・葛飾北斎

景色を意識させる力があると考えていて、場所を意識させるような建築のつくり方っていうのが『浦崎の家』のコンセプトだったんですね。

一般的には、建築って一度建てるとまず建物は移動できないじゃないですか。だからこそそこでどう周辺に開いていくのか、閉じていくのかとか、そういうことを常に考えていかないといけないと考えています。

建築は一品生産に近いから。場所性ばっかりじゃないと思うんだけど、場所との関係は外せないところじゃないかと思いますね。

建築と純粋芸術

――少し視点が変わりますが、石田先生は絵画や彫刻といったファインアートにも造詣が深い印象があります。建築を設計していく上で影響を受けたアーティストはいますか。

クリスト、ジェームズ・タレル、ミケランジェロとか、一人には絞れなくてたくさんいます。ゴッホもそうだし、シュールレアリストのデ・キリコやポール・デルボーもそうです。日本画だと葛飾北斎とか安藤広重、棟方志功とか版画系が多いかな。特定はできないけど、たくさんいます。

クリストやタレルはね、アートのやり方によって風景の価値を変えるとか、何気ない素材の扱い方や切り取り方で感性を揺さぶるんですよ。そういう見せ方に興味があるし影響を受けていると思います。

安藤広重は構図が卓越していて、葛飾北斎は瞬時に伝わってくる表現や、常にアグレッシブでチャレンジしている姿勢に心引かれます。彼は油絵も描いているからね。例えば北斎漫画っていうのがあるじゃない。ああいうのって２秒とか３秒でささっと即興で描いちゃうんだよ。棟方志功は超近眼だから、制作の時、版木とものすごい近い距離とスピードで、ノミで一心不乱に削ってるんですよ。狂気に近いっていうか、ものすごい執念と情熱を持って芸術に向き合っていることに感銘を受けるんだよね。本当にすごい。

20代の半ば頃、イタリアに行った時にミケランジェロの彫刻を見たんだけど、ミケランジェロがすごいのはね、石からノミ１つで切り出していくんだけど、その作品が仕上がってない途中過程の彫刻があるんです。石は無機物で固いイメージだけど、石から生命が生まれてくるような躍動感や神秘性や柔らかさが感じられて、その力ってすごいなって思うわけですよ。

石から生命は生まれないんだけどさ、表現の力によってあたかも生命が石から生まれてくるような表現ができてるのはすごく感動するよね。よく言われる“無から生を生み出す”ような、そういう力はすごいって印象を受けますね。

建築は芸術の一つではあるんだけど、絵とか音楽っていうのはすぐにできたりするじゃない。それに対して建築って時間がかかるし、ぱっと思いついても実作はできないわけですよ。授業の中で何回かしゃべっていると思うけど、設計は長距離走と短距離走をどちらもこなさなければいけない競技で結構、体力がいる。深く長く冷静に考えなきゃいけない部分と、情熱的にかつスピーディに考えることを同時に、あるいは併行してそれを自分の中で対応していかなきゃいけないので、結構大変な職業ですね。そういうとみんな敬遠するかもしれないけど、他の職業も一緒だと思う。建築の設計は、対極にあるものを同時に考えなくてはいけないところがあると思う。

多様な興味が建築につながる

――学生にメッセージを頂けますか。

やっぱり、ハングリーになれというかもっと自分の能力を信じて貪欲になった方がいいなと思う。

僕が伊東豊雄事務所に勤務していた時は、教えてもらうってよりむしろ学び取るっていうかさ、限られた時間と環境の中で何を学び取るかっていうことが重要でね。伊東さん自身はそんなに事細かく説明してくれる人じゃなくてね、学び取らないと何も残らないから、みんな必死で限られた時間の中で学びとろうとするわけですよ。

そうやって学び取ることで、当たり前だけど受け身のスタイルでやっていくより知識が身についてくるし、大切だと思います。また、目の前の課題に全力で取り組むことが重要で、次がまたあるって思うとそれの繰り返しで何も残らないんですよ。次は無いってくらいの思いでいろんなものにチャレンジしていくと、そこで得られるものが残ってくると思いますね。

君たちは自分が思う以上にもっと能力がある気がするんだけど、例えば就職にしてもさらっと決めてしまうというか。もうちょっと頑張って高みを目指して頑張ればいいのになとか、なんでそんな入りやすいところに入るのとか、もうちょっと自分を信じて高みを目指せばいいのにと思った学生がたくさんいましたね。見える世界が変わると思いますよ。

――僕達学生が建築を学んでいく上で、この先どういったことに注目して何を身につけていけばいいのでしょうか。

いろんなことに興味を持った方がいいと思います。どこかで建築につながってくると思うので。それに建築家は雑学が必要で、いろんな人と関わるなかでいろいろな事柄に対応しなきゃいけないので、知識は必要だと思います。

建築に限らず興味があることはどんどん吸収していくことが重要かな、いまはわからなくても吸収する時期だと思う。

――近年の学生は、自分が何に興味があるのかわからない人が多いイメージがあります。

自分の個性はわかりにくいかもしれないけど、最初は好きとか嫌いとかでいいんですよ。自分の思考をはっきり認識することが大事で、なんとなくじゃなくて僕はなんでこれが好きなんだろうっていう理由を分析することが重要かなと思います。

今の時代、昔と違って情報が溢れて生活も豊かだから、迷うかもしれないけど、少しでも「何か面白いかも」と思ったら関わっていけば良いんじゃないかな。焦る気持ちもわかるけど、そんなに思い詰める必要もないと思う。いまは何をやるにしても正しいと思ってやっていくしかないんじゃないかな。建築出身の、他分野で活躍する人はたくさんいるからね。

歳をとると臆病になって決断が鈍ることもあるから、若くて勢いがあるうちにうんと勉強して、実際に自分の足で建築を見に行って全身で建築を体感したり、旅行先の風景や地域性を肌で感じてみたりとか、人との出会いも興味に繋がる可能性があると思います。

2021年６月９日
石田敏明建築設計事務所にて

聞き手 半井雄汰、立田大喜　写真撮影 小澤美月

石田 敏明
Toshiaki Ishida

■経歴

1950年　広島県生まれ
1973年　広島工業大学工学部建築学科卒業
1973〜81年　伊東豊雄建築設計事務所
1982年　石田敏明建築設計事務所設立
1997年〜2016年　前橋工科大学工学部建築学科　教授
2016年〜　前橋工科大学　名誉教授
2016年〜21年　神奈川大学工学部建築学科　教授
2021年〜　神奈川大学工学研究所　客員教授
　　神奈川大学アジア研究センター　客員研究員
　　現在に至る

■受賞

1984年 SD Review「浦崎の家」
1985年 SD Review「茅ヶ崎の家」
1987年 住宅建築賞「茅ヶ崎の家」
1990年 SD Review「綱島の家」
1991年 SD Review 鹿島賞「Aプロジェクト」
1992年 住宅建築賞　金賞「綱島の家」
1993年 住宅建築賞　審査員特別賞「富士裾野の山荘」
1996年 日本建築家協会新人賞「NOSハウス」
　第12回吉岡賞「F4」
　第22回東京建築賞　優秀賞「SUZハウス」
　山形県平田町タウンセンター施設整備公開設計競技　佳作
1997年 日本建築士会連合会賞　優秀賞「有明フェリー長洲港ターミナル」
1998年 千葉ニュータウン印西東消防分署指名設計競技　一等
1999年 JCDデザイン賞’99　大賞「小鮒ネーム刺繍店」
　「長浜まちづくり建築設計競技　集会所部門」優秀賞
2006年 KOKUEIKAN PROJECT COMPETITION　TOP 10
2012年 平成24年群馬県商店街活性化事業コンペ
　LLPを活用した中心市街地再生（中心市街地空き店舗の学生活用LLP）「優秀賞」
2013年 平成25年群馬県商店街活性化事業コンペ
　「シェアフラット馬場川」空き店舗ビルまちなか居住事業「最優秀賞」
2015年 平成27年群馬県商店街活性化事業コンペ
　「Qハウス」Qのまち地の拠点整備事業「最優秀賞」

■著書

「まちを生きる家」単著／インデックス・コミュニケーションズ
「建築と私」高松 伸　監修　共著／京都大学学術出版会
「ぐんま建築ガイド」監修／上毛新聞社
「アジアのまち再生—社会遺産を力に」共著／鹿島出版会

長洲フェリーターミナル（模型）

シェアフラット馬場川（外観）

Aプロジェクト（模型）

O-HOUSE（内観）

O-HOUSE（外観）

シェアフラット馬場川（内観）

退官／田野耕平先生

石田研究室発足時から助手を務め、研究室運営から設計演習の授業まで建築学科を現場から牽引してきた田野先生に、ご退官にあたってお言葉をいただいた。

石田研究室が発足して半年経った2016年の10月に助手として着任して以後、4年半研究教育の現場に携わらせて頂きました。コロナ禍によって、最終年となる2020年度は思うような動きが出来なかったこともありますが、そうした予期せぬ状況への対応も含め、とても刺激的な時間となりました。

大学院修了後、着任するまでの10年ほどの間にも、複数の産学連携のプロジェクトに実務者として大学側のポジションから参加させてもらうこともありましたが、神奈川大学では、建築家緒形昭義の社会や人間への眼差しとそこから導き出される建築の分析を通して、建築の可能性や建築家の振る舞いへの知見を得たり、尾道の観光で賑わう中心エリア外の持続可能性について、三年の期間を掛けて丁寧な調査研究する機会を得ることができました。いずれも経済活動とは距離を置いたところで、調査研究に取り組むことができ、大変貴重な経験となりました。

研究室運営で意識していたこと

石田先生とは自分が修士の頃に師事した2年を合わせ6年半の時間を一緒に大学で過ごさせて頂きました。中でも石田先生が一貫してみんなにフラットに接する姿勢は、神奈川大学と前橋工科大学どちらの大学でも共通する和気藹々とした研究室独自の空気感のようなものを醸成していたのではないかと思いますし、自分も見習い意識してきたつもりです。

学生へのメッセージ

ゼミの他にも、設計演習の授業を担当させてもらっていたこともあり、一人一人の学生とコミュニケーションを取る機会も多く、毎年多くの個性に触れることができたのはとても刺激的な経験でした。学生自身は内部にいると分からないかもしれないが、多様さとそれを尊重する気風は神奈川大学建築学科の特徴だと思うので、そんな学校で学んだ集大成となる卒業・修士設計（論文）では、ありがちなテーマや解法に逃げ込んで器用にまとめることなど考えず、どんなに小さなことからでもいいので自分の興味関心から広げて、取り組むことを目指して欲しいです。

田野 耕平
Kohei Tano

■経歴

1979年 東京都生まれ
2002年 東京理科大学理工学部建築学科卒業
2005年 前橋工科大学大学院博士前期課程修了
2005年–2012年 空間研究所(Spatial Design Studio：SDS)
2012年–2015年 日本女子大学学術研究員
2012年 タノデザインラボ
2016年 神奈川大学特別助手
2017年 TDLアーキテクツに改称

編集後記

今回の特集は例年とは少し方向性を変え、防災という大きな枠だけで出発した。調査・考察を進めていく中、地縁コミュニティとの関係性、まちづくり的な側面に目を向けて行った。ソフト・ハードを横断することの難しさを改めて認識できたと共に、拙いながら、特集班としての意志を誌面化できていれば幸いである。作業下での緊急事態宣言発令で思うようにいかない部分もあったが、ハイブリッド体勢でうまく乗り切れたように思う。共に誌面を作成して頂いた二階さんはじめ、事例掲載を承諾してくださった多くの方々に感謝申し上げたい。
（井口翔太　P10-13、P19 担当／曽我部・吉岡研究室）

先進事例の掲載にあたり多くの活動の先駆者とお話する機会をいただいた。皆、過去の災害やこれからの災害といった様々な理由から活動をおこなっており、自分たちはまだまだ防災について知らない事ばかりなんだと改めて実感させられた。今回の活動を通じ特集ページを読んだ読者に今後何が出来るのか考えるきっかけを与えられれば幸いである。今回とりまとめという、慣れない立場になり、二階さん、メンバー全員に支えてもらえたことに感謝を申し上げたい。
（小澤美月　特集ページとりまとめ・P2-P3、P6-P9、P15-P16 担当／中井研究室）

防災という広いテーマで考察していくことはとても難しかったが、学生メンバーや二階さん、先生方と何度も話し合いを重ねることで、私たちの想いを載せた誌面作成を行うことができたと思う。今回調査をしていく中で、六角橋の方にお話を聞ける機会が数回あった。六角橋に生活し始めて約 5 年経つが、この地域の防災やコミュニティを全然知らなかったということを強く感じた。六角橋の活動や学生間で行った考察が多くの人の目に触れることを願っている。
（日下紗菜　P4-5、P16-19 担当／山家・上野研究室）

特集班での活動を通して、多くの方にお話を聞くことができ様々な知見を得られたことはとても有意義な経験になった。コミュニティ形成という目に見えないものを扱うことはとても困難で、紆余曲折し何度も考え直したが、振り返ると全ての過程がとても重要であったと思う。ご協力いただいた方々、先生方、二階さん、特集班のメンバー、全ての方に感謝申し上げたい。多くの方にこの特集を読んでいただき何か考えるきっかけになってもらえたら嬉しい。
（菅野麻衣子　P4-5、P16-19 担当／山家・上野研究室）

この特集班での活動を通して僕たちに以前より防災意識が芽生えて来ていることが何よりの成果だと思う。また今回させていただいた石田先生のインタビューの中で、去年までの教授としての石田敏明とはまた違った一面を発見することができて、建築家の後輩としてとても勉強になった。
（立田大喜　P8-9、P20-25 担当／六角研究室）

今回防災を特集するにあたって、幾度となく挫けては特集メンバーの仲間や、二階さんと限られた時間の中ミーティングを行い、より良いものにするために奮闘してきたことが強く印象に残っている。石田先生のインタビューでは、質問の構成の検討や、話をまとめる編集作業の練習、そして石田先生の人となりをよく知ることができた貴重な体験であった。
（半井雄汰　P6-7、P20-25 担当／六角研究室）

2021 年度 RAKU の編集をサポートしました。本年は東日本大震災後 10 年という節目の年に当たることから、«特集»は「防災」をテーマとしたいという学生たちの熱意によって組まれました。また«建築探訪»では、本学横浜キャンパスの設計者である RIA 旧代表の山口文象に着目したいという、これも学生たちの発案で、解体が予定される町田市立博物館の記憶を残したいという趣旨で企画されました。他の項目も含め、粗削りではありますが、本年も充実した内容となったのではないかと思います。本誌が、学生自身を含む読者の皆様にとって、防災や建築保存のあり方を考えるひとつの機会となれば幸いです。
（須崎文代　特別助教／内田・須崎研究室）

編集協力
二階さちえ（青空編集事務所）

建築探訪 1

山口文象と町田市立博物館

モダニズム建築家の設計思想の変容を辿る

髙田 晃、二見 陸、城所 真緒

東京都町田市に現存する町田市立博物館は1973年に山口文象の設計により建設された。
本博物館は2019年に閉館し、取り壊しが決まっており、新たな博物館が計画されている。
今回の［建築探訪］の企画では、本学横浜キャンパスの初期のキャンパス計画を手がけたことで縁のある、
山口の作品であることから、町田市立博物館を取り上げ、その特徴や文化的価値を探る。

撮影：髙田

山口 文象

YAMAGUCHI Bunzo

(1902〜1978)

1902　東京・浅草に生まれる
1915　東京高等工業学校附属職工徒弟学校木工科（現・東京工業大学付属科学技術高等学校）に入学
1918　清水組（現・清水建設）に入社
1920　建築家に憧れ、清水組を退職し建築家中條精一郎の紹介で逓信省経理局営繕課に製図工として就職
1923　「創宇社建築会」を結成して、新たな建築運動を展開し、近代建築運動に大きな影響を与える
1931　グロピウスのアトリエで働きつつ、ダム関係の調査、ベルリン在住の左翼系日本人たちと交流
1936　日本電力黒部川第二発電所と関連施設を設計し、建築家として確固たる地位を築く
1940　山口文象自邸、林芙美子邸（現・新宿区立林芙美子記念館）を設計
1953　協同設計組織として「RIA 建築綜合研究所」（現・株式会社アール・アイ・エー）を設立
1960　肺気腫で入院
1971　是の字寺を設計
1973　町田市郷土資料館（現・町田市立博物館）を設計
1978　死去

01 山口文象の略歴

1902（明治 35）年、浅草の宮大工の次男として生まれた山口文象は、16 歳で蔵前の徒弟学校を卒業後、清水組の定夫となる。しかし、18 歳で清水組を辞め、中條精一郎の紹介もあって逓信省経理局営繕課に雇われる。当時の逓信省営繕課には、岩本禄、山田守、吉田鉄郎といった若手気鋭の建築家たちが籍を置いており、山口は彼らを師と仰ぎ、必死に建築の知識・技術を吸収していった。

1923（大正 12）年、関東大震災による混乱が続く中、山口は製図工仲間とともに「創宇社建築会」を結成し、独自の建築運動を展開する。震災によ り壊滅的な被害を受けた東京において橋の復旧が急務となる中、山口は復興局橋梁課の仕事を得る。ここで、清洲橋や数寄屋橋など、数多くの橋 の設計に携わった。その後、竹中工務店の技師を経て、片岡・石本事務所の設計主任となる。ここで、西欧の建築運動を敏感に反映した斬新な作品を次々手掛けていく。当初は芸術至上主義的な傾向が強かった創宇社であったが、昭和初期の経済不安や社会思想に刺激され、急速に左翼的傾向を強めていった。こうした動きを嫌った石本との確執が生まれ、山口は石本事務所を辞職する。そして 1930（昭和 5）年、ドイツに渡った山口は、世界的建築家として名を博していた W. グロピウスの下で働き、インターナショナル・スタイルの建築に触れる。1932 年に帰国すると、多くの住宅作品とともに、日本歯科医学専門学校（1934）、黒部川第二発電所（1936）などを手掛け、建築家としての最盛期を迎える。戦中には海軍の軍需工場や宿舎などを多く手掛け、戦後も久ヶ原教会（1950）や関東学院グレセット記念講堂（1952）などの作品を発表した。

1953 年、山口は「RIA 建築綜合研究所」を設立し、集団で建築を設計するという新たな手法を試みる。そして、植田一豊、三輪正弘、近藤正一らとともに、多くの優れた建築作品を生み出していった。

（以上は一部変更の上 RAKU2011 より引用）

1930s［ 帰国後〜戦前期 ］

黒部川第二発電所（1936 年）

西竹一男爵邸（1935 年）

番町集合住宅（1936 年）

日本歯科医学専門学校附属病院（1934 年）

日本電力の技術者として現地視察を兼ね、ヨーロッパに渡航する。山口は同時にグロピウスのもとでモダニズムを学び、帰国後の日本においては気鋭のモダニズム建築家として活躍する。

1940s［ 戦時期 ］

山口文象自邸（1940 年）※外観は 1960 年頃の様子

戦時期に入ると、山口は自邸を建てた。「農村の建築遺産の中から、何か新しいものが掴めるんじゃないか、という漠然とした期待からこの家ができ上つた」（建築文化 1955.9）と語っているように民家風表現が採用される。

02 時代と設計作品の傾向

● 山口文象作品の傾向

山口文象の代表的作品を作品集「山口文象　人と作品」（1982 年 RIA 建築綜合研究所）の年代別の分類を参考に、下部にまとめた。それらの作品から意匠の傾向を見ていく。

1930 年代、山口がドイツから帰国した直後の作品では、黒部川第二発電所に代表されるように、グロピウスやコルビュジエなどの当時気鋭のモダニズム建築家の影響を強く受けたものが見られる。

その後戦時中は、軍の宿舎を中心に作品を作ったが、山口の本意ではないとされる。その頃の作品としては自邸があり、設計に際し、モダニズム的作風を一度停止し、「農村建築文化からのインスピレーションを得た」と語るなど表現の可能性を模索していた。

戦後、山口は RIA を設立し、組織的な設計活動を行う。組織の強みを生かしたとも言える大きなプロジェクトに取り組み、神奈川大学のキャンパス計画もそのひとつである。

そして、1970 年代に入ると、《是ノ字寺海龍院》を筆頭に、作風がそれまでのモダニズム的な外観とは異なるデザインになる。特に印象的なのはこれまでの陸屋根ではなく、屋根が強調されている部分だ。

山口は、帰国直後の作品に見られる、モダニズム建築のパイオニアとしての位置付けが一般的だ。戦時中に一度民家に関する関心を寄せながらも、戦後しばらくは、インターナショナルスタイルの流れを引き継ぐ、合理的・機能的と言える作風がみられる。一方、1970 年に入ってくると屋根を強調した作風なども生み出している。今回取り扱う《町田市立博物館》も、大屋根が外観を強く印象づける山口文象の晩年の作品である。そして神奈川大学講堂・三号館とは違う設計思想によって設計されたと考えられるため、山口の 1966 年の言説から考察してみたい。

● 山口文象の言説から見る作風の変化

「RIA として社会的な問題に進んでいきながらも、私個人としてのなにかをつくりだしたいという葛藤は、心のなかにいつもあります　何日もとじこもってひとつの作品をつくりだそうとする欲求と、しかし今はすでにその段階ではないという気持、この心の葛藤ですね」これは山口が『新建築』1966 年 3 月号で語った住宅に対する言説のなかの一部である。当時の日本では、人口増加から住宅を大量供給することが求められ、RIA は「ローコストハウス」と呼ぶシリーズを発表し、プレファブリケーションを前提としたデザインを展開していた。一方この言説から、RIA の一員として多くの住宅を手がける活動を有意義なものと理解しながらも、山口自身が作家として「ひとつの作品」を作り出したいという「葛藤」を抱えていたと推察される。

この言説をふまえると、1970 年代に起きる表現の傾向は、従来の RIA の組織として合理的・機能的な作品を作り出していた中で抱えた葛藤を乗り越え、山口文象の「ひとつの作品」を作りだす志向から生まれた作風の変化なのではないかとも考えられる。

1950s［ 戦後・RIA 初期 ］

神奈川大学三号館（1955 年）

朝鮮大学校（1959 年）

神奈川大学本館（1959 年）

新制作座文化センター（1964 年）

RIA 創設後「ローコストハウス」の設計に着手していたが、そんな中でも「神奈川大学総合計画」は大きな仕事として取り扱われた。合理的・機能的なモダニズムの意匠を継続する。

1970s［ 晩年・作風変化の時期 ］

是ノ字寺海龍院（1971 年）

千葉邸（1972 年）

三国邸（1972 年）

町田市立博物館（1973 年）

1970 年以降屋根が強調された意匠が特徴的である。晩年の作品は数少なく、町田市立博物館は山口文象の思想を読み解くうえで重要な作品と言える。

（写真いずれも「建築家山口文象人と作品」より引用。区分は本書を参考にした。）

03 町田市立博物館の建築概要

建物全景　撮影：城所

建築概要

監修：文化庁建造物課
設計：RIA 建築綜合研究所
　　山口文象
　　石村勇二・石田宏・狩野哲夫・
　　曽原厚之助（設備）・田中実（設備）
監理：町田市建築課・RIA 建築綜合研究所
施工：清水建設
構造規模：鉄筋 RC 造　地上2階　地下1階
工期：1972 年 10 月～1973 年 6 月
所在地：東京都町田市

配置図　S=1/2,000

出典：『新建築』（1974）

建設背景

町田市では大規模な宅地開発が進められるなか、市の中心部多摩丘陵帯に縄文・弥生時代の遺跡が数多く発掘された。そのうち竪穴式住居群が復元・保存され、「本町田遺跡公園」として 1971 年に開園した。町田市立博物館は遺跡からの出土品や民俗資料を保管・展示するための文化遺産保存事業の一環として、文化庁の指示の下、博物館施設が計画され、建設されたものだ。建物は土地の斜面の一部を削って建物全体をはめ込むような形で計画されている。東側前面道路側の外壁は花崗岩（稲田石）乱積層張りとして自然環境の融合が図られている。

配置図を見ると、南東側の隣接している敷地には「民家」と書かれている箇所がある。しかし、実際にはその場所は草木が生い茂っているだけで建物はない。

この場所に民家を移築して保存する計画があったのではないかと考えられる。また、遺跡公園と博物館、そして、民家の3つの要素により、その地域一帯を歴史を学ぶ場所にしようとしたのではないだろうか。

＼探訪レポート／
町田市立博物館の内部構成と素材

ー内部構成ー

○ **ホール**　エントランスから入って、まず足を踏み入れる部屋がホールである。入場者を最初に迎える場所であるため、天井が高く、開けた空間となっている。（図 1）

ホールに入って正面にある階段が壁で囲まれており、一つのオブジェのような空気を醸し出している。

○ **池**　中央に池を配した中庭があり、そこに面する部分には開口部が多く取られている。建物のファサードに窓が少ない分、ここで採光を確保している。

建物の外観と室内とでは見える窓の量が異なるので、建物自体の印象もだいぶ異なる。

○ **陳列室**　陳列室は、四隅を切り落とした八角形平面で2層分吹抜とした大空間と、正方形平面の小空間の2室が設けられている。

2 つの陳列室を使い分けるように、展示物や展示方法、企画に合わせて考えられていたのだろう。

ー素材、ディテールー

○ **外壁**　石という自然の素材を使用し、緑に囲まれた周辺環境との調和が図られている。（コンクリートパテ打放しに花崗岩乱積層張り）

屋根が赤茶色一色に対して、外壁が白色やクリーム色、薄橙色など、岩ごとに色が異なり、屋根とのコントラストや石の表情が綺麗である。

○ **屋根**　柔らかい素材を使用しているため、屋根の微妙なムクリや庇の曲線にも対応している。（アスファルト防水シングル仕上げ）

この建物の特徴である大屋根の絶妙な曲線の表現を実現できたのは、この素材の効果と言っても過言でないだろう。

撮影：高田

屋根　端が曲線を描いている

撮影：高田

外壁　花崗岩乱積層張りによる表現

撮影：城所

2 層分の吹き抜けによりの開放的な空間。中庭に面する窓から採光を確保している。

撮影：二見

階段　オブジェのような存在感を醸し出す階段の壁

エレメント

ー建物の印象的な部分ー

○ ホール　大屋根が西側の前面道路側にかけて大胆にかけられているため、ホールの奥に行けば行くほど天井が高くなる。

エントランスから入ってホールへ進むと奥の窓まで視線が抜けるので、開放感のある気持ちの良い空間という印象を受けた。

○みんなのトイレ　本竣工当時では大変珍しかったと言われる、身体障害者用のバリアフリーな「みんなのトイレ」がある。

今では当たり前に、多目的トイレをどこにでも見るようになったものの、当時は先進的だった「みんなのトイレ」が採用されたことからエレメントの計画にも注力されていたということがわかる。

煙突と大屋根
大屋根が水平方向を、煙突が垂直方向を強調している

ホールから池を介して事務室を見る
池側に窓が開いている

ー建物の使われ方の変遷ー

○展示内容の変化と開口部　当時「町田市郷土資料館」という名前で建てられ、主に遺跡からの出土品などを扱っていた。しかし、その2年後には「町田市立博物館」と改名され、出土品のみならず美術品も取り扱うようになった。それにより美術品などの展示物に直射日光が当たらないようにする必要が生じ、展示内容によっては、展示室の中の窓やトップライトを塞ぐようになった。

室内の用途変更により使われ方や形が変わったため、建築家の意図とは異なる表情となっていた。

○煙突　シンボルともいえる煙突は、当時は本来の煙突としての役割を果たしていたが、機能していない。

垂直方向に立ち上がる白い煙突が、水平方向に延びる建物の外観のアクセントになっており、全体の均衡を取っているように見える。

○池　中庭があり、竣工当時は水が張られていて池になっていたが、現在は固められており水が張られていない。

水が張られていた状態がどのようなものであったか、当時の写真などを今後も探していきたい。

外観　壁面のオブジェや外壁、煙突、屋根などの随所に造形へのこだわりがあらわれている

04 町田市立博物館を訪れて

町田市立博物館の意匠のルーツはどこにあるのか

山口文象の晩年の作品である、町田市立博物館を探訪した、3人の学生が、それぞれの関心から同館を取り巻く課題について考察した。

実際に博物館を訪れ近辺を歩いてみると、わずか数十メートルの場所にある本町田遺跡公園の竪穴式住居が目に入る。これは博物館の設計者に山口文象が選出された1971年に復元されたものだ。山口文象も設計の際に訪れた可能性は高いだろう。博物館のデザイン上強調された大屋根だけでなく入口の膨らみも竪穴式住居と似た印象を持っているように思え、デザインのルーツと考えることもできる。

また私たちは、竣工時の図面に、博物館の建物に隣接して「民家」という表記があることから、当敷地に民家の移築計画があったのではないかと推測した（p30参照）。

移築される予定であった民家に関する情報がが見つかれば、博物館のデザインのヒントが見つかるかもしれない。

町田市の薬師池公園には民家村がある。そこには博物館が開館した翌年・翌々年に、2棟の茅葺民家が移築されていた。私はこのうちの一つである、旧永井家住宅が博物館の横に移設される予定だった可能性があるのではないかと考えた。この民家が、多摩ニュータウンの計画地から移築されたという事実は、「宅地開発からの郷土資料の保護」という、博物館の当初の設立趣旨と合致する。また永井家住宅は、配置図の図面に記された計画地にすっぽり入る大きさだからだ。

もし、永井家住宅が移築されていたとすると、町田市立博物館の意匠は、その建物との調和を重視して決定された可能性も推測される。永井家住宅の特徴として、「開口の少ない壁面」が挙げられる。もしかすると、博物館の開口の少ない閉鎖的な意匠はこの民家からきているかもしれない。そして葺き下ろしの屋根の庇の突き出たデザインは、博物館の入口の部分と類似するように思える。大屋根を強調した外観も、ゆくゆくは横に茅葺の永井家住宅が並ぶことを考えそれとの調和性をもたせたデザインをしたのではないか。

この件について、町田市へ問い合わせをしたものの、当時の資料が無くわからないとの事であり、真相はわからないままだ。現状では憶測の域を出ず、引き続き調査を進めたい。

また、山口文象と民家の関係について、興味深い言説がある。山口文象は、1940年に自邸を設計した。その外観は一文字瓦を用いた、大屋根が印象的であるが、その内部は民芸調。いわゆる茅葺き屋根の農家のような骨太の木材を用いた意匠である。自邸の意匠について、1955年のインタビューでは、次のように答えている。「農村文化への再認識というような運動の影響もあって、農村の建築遺産の中から、何か新しいものが掴めるんじゃないか、という漠然とした期待からこの家ができ上つた」（建築文化 1955年）なお、山口文象は、この選択に確信をもてなかったことから、竣工後15年間本自邸を未発表にしていたとされる。しかしながら、山口文象が民家に対して、注目していたことは確実である。

建築家・建築評論家の佐々木宏氏山口が自邸に数奇屋の手法を用いず民家を選択した点に着目し、「木割にも通暁していた山口は、その形式化された限界をも知っていた。彼が結果的に選んだのは民家風の骨太のデザインであった。」と分析している。その選択はやはり様式に囚われないモダニストであると思う。町田市立博物館の設計に際し、民家とモダニズムに類似性を見出していたかもしれない。（髙田）

博物館竣工前に復元され、博物館と一体的に整備が行われた本町田遺跡公園には竪穴式住居2棟（縄文期・弥生期）が復元されている。

町田市の薬師池公園に保存されている旧永井家住宅は、多摩ニュータウン建設予定地に建っていた。葺き下ろしの屋根が博物館の入口を連想させる。

P30の配置図にあるように、当初はエントランス横から民家まで上がることのできる階段が計画されていた。位置から推測して、看板がはめ込まれた部分の擁壁の切り欠きはこの計画の名残と考えられる。

町田市立博物館と山口文象自邸との共通点

町田市立博物館が竣工した年、山口文象は自邸の大改修に着手した。1940 年に建てられ、民家風の意匠で注目を浴びた自邸は、その後拡張を繰り返していたが、山口文象が亡くなったためこの改修が事実上最後となった。御子息の話によれば、自邸の改修は未完に終わったという。

改修前と比べ、大きく変化した外観に驚く。そして本自邸と博物館には共通点がある。煙突、閉鎖的なファサードなどである。また、閉鎖的な外壁に刺さったコンクリート製のオブジェは博物館のものと同じデザインである。山口文象はモダニズムの建築思想を持っていた建築家であるが、晩年の作風を反映した町田市立博物館の彫塑的意匠は印象的だった。そこでの意匠は、山口が自邸にも使うほど気に入ったものだったのかもしれない。（城所）

壁面オブジェの比較

山口文象自邸の壁面のオブジェ（左）と町田市立博物館のもの（右）の比較

壁面に並べてつけられているオブジェは、閉鎖的で単調な壁面に変化を与えている。博物館のものは白くペイントされているが後の改修によるもので、当初は自邸と同じく無塗装であった。

撮影：高田

撮影：高田

町田市立博物館の保存を訴える取り組み

町田市立博物館は 2019 年に閉館し、同建築の機能は 2025 年開館予定の「国際工芸美術館」に移行することとなった。町田市は、機能移転の作業が終了し次第、博物館を速やかに解体し地権者に土地を返還する方針を掲げている。一方で、博物館の所在地である弥生ヶ丘地区の住民を中心に、建物を残そうとする動きが起きている。

博物館の閉館は 2013 年に市議会で決定された。その背景には、収蔵スペースが手狭になり且つ、交通の弁の悪さや、駐車場の狭さから来館者にとって不便であること、そして建物の老朽化を理由としている。具体的には、古くなった空調設備の交換や雨漏りの多発している屋根の補修の必要性等であるが、費用対効果から新たな場所へ新築した方が良いという結論からだろう。

そこで地域の住民は、博物館のある土地の潜在的価値を見出し、PR する活動をはじめた。ハイキング客が多く訪れることから、博物館裏の雑木林を整備し、コースを作ったり、縄文時代から人が暮らし続けてきた歴史のある町をアピールするため手製の観光マップなども作成している。竪穴式住居のある公園では、イベントの開催も行い、1000 人の来場者を集めるなど人が集まる町を作り上げた。そのように集客等の説得力を持った上で、博物館の建物を、来場者の休憩スペースなど来訪者のための建物に転用するよう提案している。

建物の存続問題から、地域の魅力を引き出す動きが生まれたことは、大変意義深い結果だと考えられる。さらに、町田市立博物館自体の価値が、建築学の観点から、貴重なものであると証明することができれば、博物館を取り巻く諸事情も変わってくるかもしれない。そのために微力を尽くすことができれば幸いである。（二見）

撮影：高田

山口文象自邸
屋根が強調され閉鎖的なファサードや煙突と屋根の開口の位置など、共通する要素が見られる。

山口文象自邸内観
入口から内部にかけて、屋根の形に沿って天井が広くなっていく構成もまた、町田市立博物館のエントランス部と同様。

撮影：竹本

今回の取材に協力いただいた、住民の方々

市民作成のガイドマップ

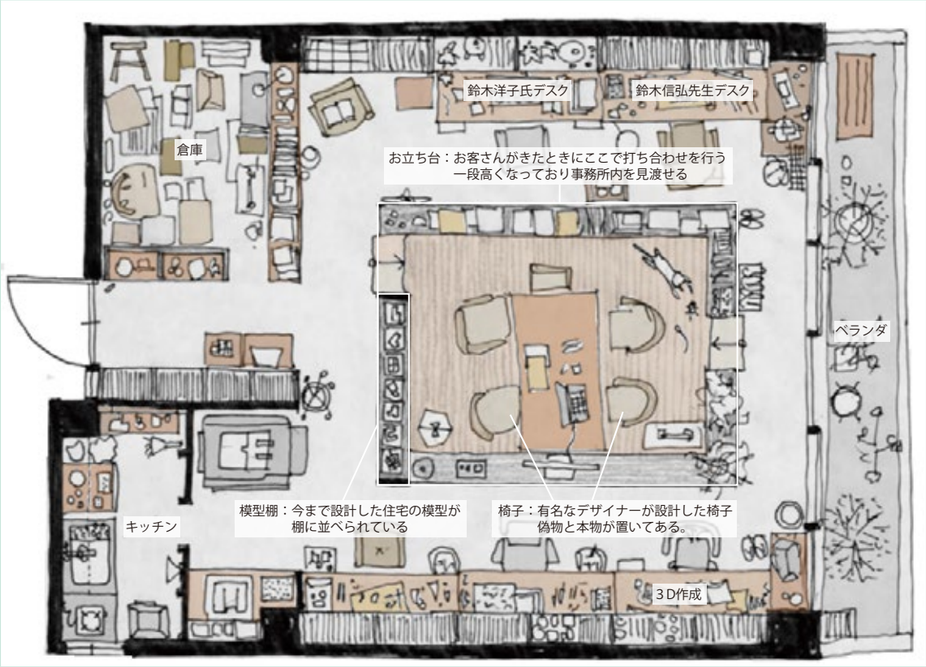
建築探訪 2

事務所訪問記

鈴木信弘先生 ー鈴木アトリエー級建築士事務所ー

三谷 隆介、楢原 杏奈、中澤 実那

今回『建築探訪』では活躍するOBOGを訪問し活動内容や経験談等のインタビューを行うことで、建築を学ぶ学生や卒業生の参考となるよう企画した。今回訪問したのは2022年度から神奈川大学に着任される鈴木信弘先生。建築家としては住宅を多く手掛け、著書『片づけの解剖図鑑』ではバックヤードやストックスペースの重要性を説いている。本取材では鈴木先生がアトリエ系設計事務所を目指すようになったきっかけや、コロナによる住宅建築の変化についてを伺うことでこれからの住宅建築のあり方を考える。



鈴木アトリエ平面スケッチ S=1/100（鈴木先生作）

簡易略歴：鈴木信弘

鈴木信弘先生と奥様で鈴木アトリエ取締役の鈴木洋子氏

神奈川大学工学部建築学科入学
学部時代は西和夫教授に師事。民家・集落実測ばかり行っていた。目測ができるようになった。

英国アストン大学へ交換留学
今留学するなら北欧！今後日本が目指す社会の実現がそこにある。

修士課程では白濱謙一教授に従事
白濱教授の研究室は学生との距離が近く午前中はずっとコーヒータイムだった。

修士課程修了後、東京工業大学研究生になる
志水英樹教授が神奈川大から東工大に移られる際に誘われたのでついていった。まちづくりや都市計画レベルの仕事をしていた。

その後、東京工業大学工学部建築学科計画第三講座助手
曽我部教授も同大学で助手だった頃で、中井教授は同大学の学部生だった。

学校法人岩崎学園 非常勤講師をへて
鈴木アトリエ一級建築士事務所設立
現在、神奈川大学建築学科非常勤講師
2022～　神奈川大学建築学科教授

著書：『片づけの解剖図鑑』

＜あらすじ＞

住宅を設計する上で空間を考えることは重要であるが、その空間を維持するためにバックヤードをしっかり設計することも重要であるということを話している。

インタビュー

ー住宅設計を目指すことになったきっかけはなんですか？

きっかけはルイス・カーンのフィッシャー邸を見学に行ったことです。東工大にいた時、志水教授（元神奈川大教授）が昔カーンの事務所に勤めていた経歴をもつ関係で、アメリカに視察に行くという話になったんです。この住宅は四角い建物が 45 度ずれてくっついているだけのプランでしたので、雑誌で見た時はあまり意識していなかったのですが、しかし実際に訪れたら素晴らしく素敵な住宅でした。外壁に木を使っていて 1960 年代に建っているのにとても綺麗で（見学当時は 1990 年代）それが不思議でした。気になって質問したら4年に

写真①　フィッシャー邸外観

一回張り替えていると言うんです。それに驚いてその材料はどうしてるのかと思っていたら、この住宅には基壇状になっている地下があってその地下の半分は外壁の板を加工してストックし、乾燥させておく部屋になっていて、もう片方は家事室でお手伝いさんが洗濯をするバックヤードになっていたんです。フィッシャー夫妻が生活をしている上階の空間

写真②　フィッシャー邸地下

はベンチに座ってると眺めが良くて、テレビなんかはなく暖炉の火で1日を過ごせるようになっていました。それにこの窓も非常に細かい設計が行われているので、窓を開けても虫は入ってこないしすごくよくできてるんです。それで人間のこういう居場所のある住宅っていいなと、空間って言ってもこういう居場所がなければ面白くないし、居場所を作るのは大事だなと思ったんです。カーンはこの住宅の設計に8年費やしていて暖炉の石積みも6回変えたっていうんです。そういうことを聞いてすごいと思ったのと同時に箱だけの部屋を作って格好いいと言ってもバックヤードやストックがしっかりないとすぐにものが溢れてこういうスマートな暮らしは成り立たないのだなと思いました。このようにして住宅設計を目指すようになりました。

写真③　フィッシャー邸リビング

ー事務所を創設してからはどのようにして仕事が増えていきましたか？

インターネットがあまり普及していない時代でしたが、私の事務所は割と早くから手作りのホームページを作って仕事の募集をしていました。ポツポツとインターネットの見れるような方からの問い合わせが来て、相談に乗って欲しいとか、うちは変形している土地だからハウスメーカーさんに断られたって諦め気味の人とか、傾斜地だからできませんと言われたとか、そういう困っている人からの依頼がくるようになり、かなり特徴のある依頼主が多くなりました。そうやって依頼主の話を聞きながら設計してこっちもやりたいことをぶつけていきながら１軒ずつ作っていくと完成した住宅をみた人がホームページからまた新しく来て、それを繰り返してだんだん仕事が増えていきました。

ー鈴木先生自身のポリシーはありますか？

ないです。そういうポリシーとか、こだわりとかいうものに翻弄されること自体が嫌で、日々を一生懸命に生きていたらなんとかなるかなと思ってきました。別に下を見る必要はないけど、上だけを目指しているのもどうかと思いますし、目の前に与えられた内容を真面目に考えてやっていれば、いつかいい道が開けると考えてやってきただけです。

ー建築を作ることはどういうことだと思いますか？

設計は機能を作っているわけではなく、空間を作っているわけでもないです。じゃあ、何を作っているのかと言ったら、人と人が出会う場所を作っているのだと思います。もっと広げて、モノと人が出会う場所も含めて「場所」をどう作るかを常に考えているのだと思います。ウィトルウィウスが建築とは用・強・美だと言っていますよね。用は機能、強は強度、美は美しさ。その通りですけど、あえて私が聞かれたら、建築とは人と人が出会う場所の作り方の作法だと言うのでしょうね。機能なんて時が経てば変わってしまうから全くあてにならないし、都心のオフィスビルだってコロナ禍でテレワークになったとたん、単に働くだけのオフィス空間が全く無用の長物だとわかった。オフィスの本質は実は働く空間ではなくオフィスに通う人と人が出会うロビーやエレベーター、食堂などの空間に価値があったことに気づいたはずです。大学の空間も同じですよね。

この考え方を当てはめると、住宅も人と人、つまり複数の人が一緒に暮らす場所を作っているのだと思います。暮らしというのも幅が広くて、住宅は寝に帰るだけという人もいれば、年中ホームパーティーをしている人もいるように、機能や必要な諸室に価値があるのではなく、移動、溜まりなどの場所の設計、干渉する場所をどう設計するかなんです。

ー印象に残っている作品はなんですか？

印象に残っているのは TUBO-SUBAKO ですかね。この住宅は予算から建てられる面積を逆算方式で考えたら、3 間 ×3 間の 2 層つまり 18 坪を基準に設計を始めました。当初参考にしたのは池辺陽とか増沢洵が設計した最小限住宅です。

写真④　TUBO-SUBAKO 内観

でも、お客様の要望を全部網羅すると廊下ができたり、部屋数は多いけど狭かったりして全くうまく入りませんでした。悩んでいた時に、3 間角の真ん中に 4 畳半くらいの部屋を 45 度振って置いてみたら周りに三角形の隙間ができてそこに部屋らしきスペースが取れそうだということに気づきました。動線の途中に部屋があれば、動線そのものを部屋にしてしまえると考えているうちに中心にプライバシー、周囲をパブリックのゾーンとして分けてみたら、サラッとできてしまったのです。最初は中央の部屋は平面をそのまま立ち上げたので筒状でしたが、圧迫感があったので、絞ったらスズメバチの巣のような形状に。最近はイメージが昇格して玉ネギって言われるようになりました。

裏話としては真ん中の部屋の壁を作るのに 4 ヶ月かかってしまったことがあります。飲み会で大工に「こういうの考えてんだけどさ、モルタルでやったらつまらないし」と話していたら「カヌーと同じですよこんなん！カヌーはリブを

写真⑤　TUBO-SUBAKO 工事風景

作ったら木を貼っていくだけだから、細い木を作れば簡単ですよ！」と言ってくれて「そうか～じゃあできるな～!」といって始めてみたら、大変だったんですよ。何でかというと、作ろうとしていた形は3次元の曲面だからカヌーとは全く異なるもので想像してた通りに進まないんですよね。無理だとわかって、円を 12 分割して板を貼っていくことにしました。だから縦に継ぎ目が入っています。こうして手のかかる方法になり 1 日 1 ㎡くらいしか進まない。もう 2 度と作ってくれないでしょうね。

ーコロナの流行によって住宅にはどのような変化があると思いますか？

昔の家って、土間があってそこに馬がいて、食料を貯蔵し、家の中で仕事もしていたんです。

だから本来の住宅の姿は職住近接している空間だったんですよね。でもそれは 19 世紀の産業革命で資本家たちが人間を労働者として扱うようになったことによって大きく変わるんです。資本家にとって労働者は生産性を下げないために、なるべく周りの人と関わらずに、工場と家の行き来をするだけの生活をして欲しいと考えていましたので、その流れの中でモダニズムの住宅プランが生まれました。子供部屋がきちんとあって、主寝室がなぜか一つ。夫婦は一緒に寝なきゃいけないみたいになり、リビングで団欒をするのが理想と言われ、あとは風呂と玄関とトイレがあってそれが住宅の全てという形に様変わりしてしまった。それが 100 年続いた。

でも昨年コロナ禍になり、家は食べて寝るだけの場所じゃないよなと気づきはじめたと思います。だからそう思う人が増えることで日本の住宅もよくなると思うし依頼される設計者も真剣に考え始める。この機会を逃さないようしたい。今まで私たちは住宅を所有するだけで中身が伴わないまま満足させられてきたが、1 年で飽きるような住宅はつまらないと思うし、みなさんが住宅の新たな価値観に気づいた 1 年であったと思いたいです。

編集後記

町田市立博物館の記事を企画した。山口文象の生涯は大変興味深く、取材を進めていくうちに建物に対して愛着を感じるようになった。建築保存に関して大切な心得は、知識からくるこの感覚なのではないかと感じた。(高田晃／建築探訪代表 P33-34 担当／内田・須崎研究室)

第一線で働かれている建築家の話を対面で直接お聞きする機会は大変貴重なもので非常に有意義な時間を過ごせた。中でもコロナ流行による住宅の変化の話は今後の住宅のあり方を考える上で非常に参考になる話だった。(三谷隆介／事務所訪問記まとめ役 /P35-37 担当／山家・上野研究室)

今回、町田市立博物館を探訪して、改めて設計者が思い描いていた利用のされ方と、実際に利用されている姿の相違を感じることができ、良い経験となった。(二見陸／ P28-29 担当／六角研究室)

事務所には、それぞれ特徴の異なる住宅模型が数え切れないほど並んでいた。それを見た時、鈴木先生のこの明るい人柄が多くの方々の心を開いているからこそ、一つ一つ住宅への想いを形にできているんだと思った。(楢原杏奈／P35-37 担当／曽我部・吉岡研究室)

町田市立博物館の建築概要についてのページを担当した。一人の建築家と一つの建物の歩みを調査してみて、人も建物も、時代や周りの環境、状況などにより思想や表現が変化するということを実感した。(城所真緒／ P30-P32 担当／山家・上野研究室)

建築士として働く鈴木先生の考えや思いを聞いたときに、建築士における人柄の重要性が見えた。人脈や、方向性の決め手となる作品との出会いなど、様々な要素で建築士が成り立つことがよく分かる貴重な機会であった。(中澤実那／ P35-37 担当／中井研究室)

付記

今回、町田市立博物館を取材するにあたりご協力いただいた古家秀紀様（神奈川大学 OB)、町田市、町田市立博物館、山口勝敏様（山口文象氏御子息）ほかご協力いただいた多くの皆様に御礼申し上げます。
また、事務所探訪記を執筆するにあたり、取材にご協力いただいた鈴木信弘様はじめ、鈴木アトリエ一級建築士事務所の皆様に御礼申し上げます。

本年 4 月、RIA 初期メンバーの一人であった、近藤正一氏がご逝去されました。
建築界におけるご活躍に敬意を表すとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

修士論文

渡辺 悠介
亀岡 貴彦
佐塚 将太
前田 沙希
向 咲重
下山 美月

●ディプロマ賞

渡辺 悠介
Yusuke WATANABE
中井研究室
NAKAI lab.

防災建築街区造成法下における建築事例の外形構成の変遷

Transition in external composition types in commercial housing buildings based on Disaster Prevention Building Blocks Construction Act

内田 こちらの研究をするにあたっての資料の選定方法を教えてください。

渡辺 参考文献のリストに記載されている800近くの事例から、住居の用途を含み、現状と整合が取れたものが100事例となったので、それらを研究資料としました。

曽我部 中層街路型で連窓によるものが旧法から継続して建てられている中、ボツ窓が連窓より長い期間に見られる理由はなんだと思いますか。

渡辺 単位室群で構成される平面なので、水平方向に連続する連窓よりボツ窓の方が戸境壁などと外壁の関係上、効率的なデザインだったからではないかと考えています。

1. 研究背景と目的

耐火建築促進法（以下、旧法）の後、1961 年に施行された防災建築街区造成法（以下、造成法、1969 年廃止）は、都市の不燃化に加えて都市空間の高度利用を目的とし、組合組織や街区全体の面的な開発手法などが導入された。

当時は高度経済成長や建設技術の向上がみられた時代でもあり、都市政策の過渡期であると同時に、都市建築の形式の転換期でもあった。造成法下では、旧法から継続して下層の非住居と上層の住居からなる住商併存建築（下駄履きアパート）が多く建てられたが、それらのなかには旧法下における防火帯建築と同様の帯状の街路型中層建築がみられる一方で、EV の普及に伴う高層化や工業化による新工法の導入等により、外形や立面の構成における様々な形式の展開や変遷がみられる。

そこで本研究では、造成法下で建てられた住商併存建築を対象とし、外形構成の類型を導き、各類型の年代的傾向から、造成法下における建築の外形構成の特徴と系譜を明らかにする。

2.ヴォリューム構成や建物高さ、立面構成

各事例には外形構成に様々な特徴がみられることから、全資料について道路境界に対する外壁の位置と、上層階のセットバックの有無などによる外形上のヴォリューム構成と建物高さ、および、比較的平滑な壁面に水平連窓やポツ窓が設けられた立面と、ユニットやパネル、サッシなどの要素の組合せによる立面による構成および付属要素について検討した。さらに、建物外形の特徴に関わる平面形状、ならびに接道条件についても整理した。

3. 外形構成類型

各事例の外形構成の特徴における共通性や相違点を調べるために、前章でみたヴォリューム、高さ、および立面構成の組合せが近い事例ごとに整理し、いくつかの外形構成類型を導いた。その結果、まず前章で述べた通り全体の約 8 割を占める街路型では、中層の事例が全体の半数以上を占めた。なかでも防火帯建築に最も近い構成といえる、RC 造の外壁面を主とした立面をもつもの (A1~3) がその 7 割強を占めた。また、このような街路型中層の類型が高層化した形式として (C) があげられる。

以上の街路型に対して、低層部の壁面は道路境界に沿いながらも、上層部の壁面が街路からセットバックし、上下層でヴォリュームの分節がみられるもの (D,E) がみられる。

4. 各類型の年代的傾向

前章で見出した各類型が建設された年代の傾向を検討するために、類型ごとの該当事例を竣工年別に整理した結果、各類型の年代的傾向がみられた。まず (A) は、前述のとおり 1950 年代の防火帯建築の時代から建てられていた。一方、(B) はいずれも短期間に集中してみられた。次に、中層の (A,B) が街路型のまま高層化したとみなし得る (C) のうち、(C1) は 60 年台後半を中心に、(C2) は 70 年代前半に集中してみられる。

以上の街路型に対して、セットバック型のうち、中層の (D) は、少数ながら 60 年代後半にみられる。一方、高層の (E) のうち、(E1) は、63 年の事例が最も古く、その後は少数ながら 70 年代初めまで、一方 (E2) は 69 年の事例に始まり、その後 70 年代を通して継続してみられることがわかった。

5. 各類型の関係と系譜

前章までの各類型の特徴と年代的傾向についての分析の結果から、類型間の差異をつくり出す契機として、(1) 立面やヴォリューム構成による上下層の分節、(2) 高層化、(3) 壁面系から要素系への立面構成の変化 (工法的には湿式から乾式への転換) といった 3 点が考えられる。そこで、X 軸を立面構成 (工法)、Y 軸をヴォリューム分節、Z 軸を高さの軸とし、原点に 1950 年代からの防火帯建築に近い街路型の継続とみなせる (A1,2) を位置づけ、そこから他の各類型との関係および年代的系譜を示した図を作成した。

6. 結

以上より、造成法下の建物の外形構成についての全体的な変化の方向性として、50 年代からの防火帯建築的な街路型中層建物を引き継いだ類型 (A1,2) から、いくつかの過渡的な類型を経た後、街区のほぼ全体を一体的に開発したセットバック型で要素系の立面構成をもつ高層建物 (E2) へと収束していくことを明らかにした。

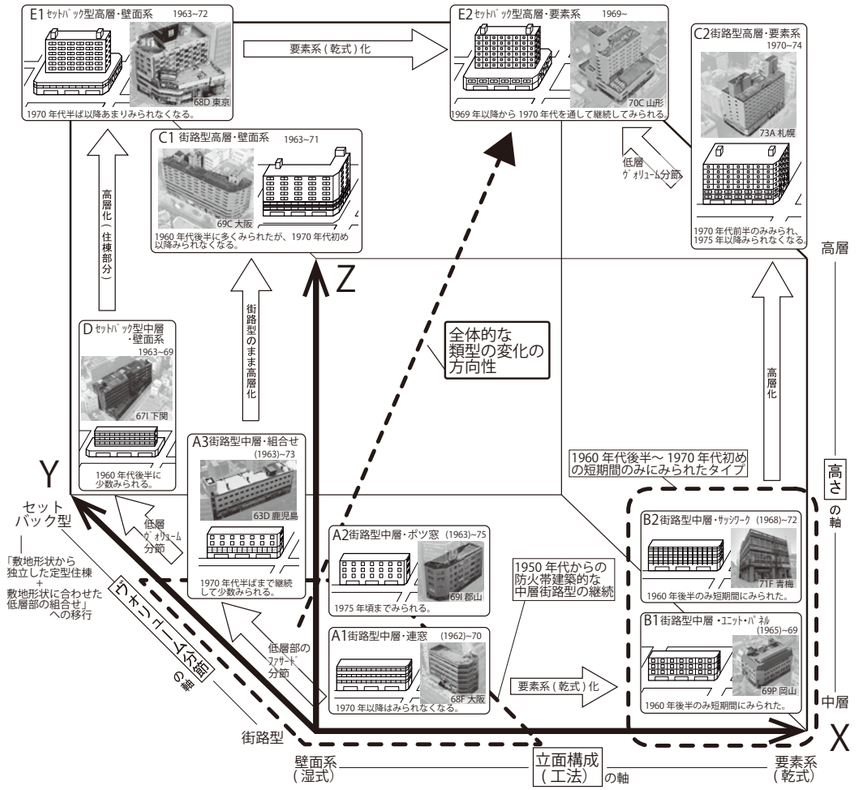


図　防災建築街区造成法下における建物の外形構成類型の関係と年代的系譜

● 優秀賞

亀岡 貴彦
Takahiko Kameoka

曽我部研究室
Sogabe lab.

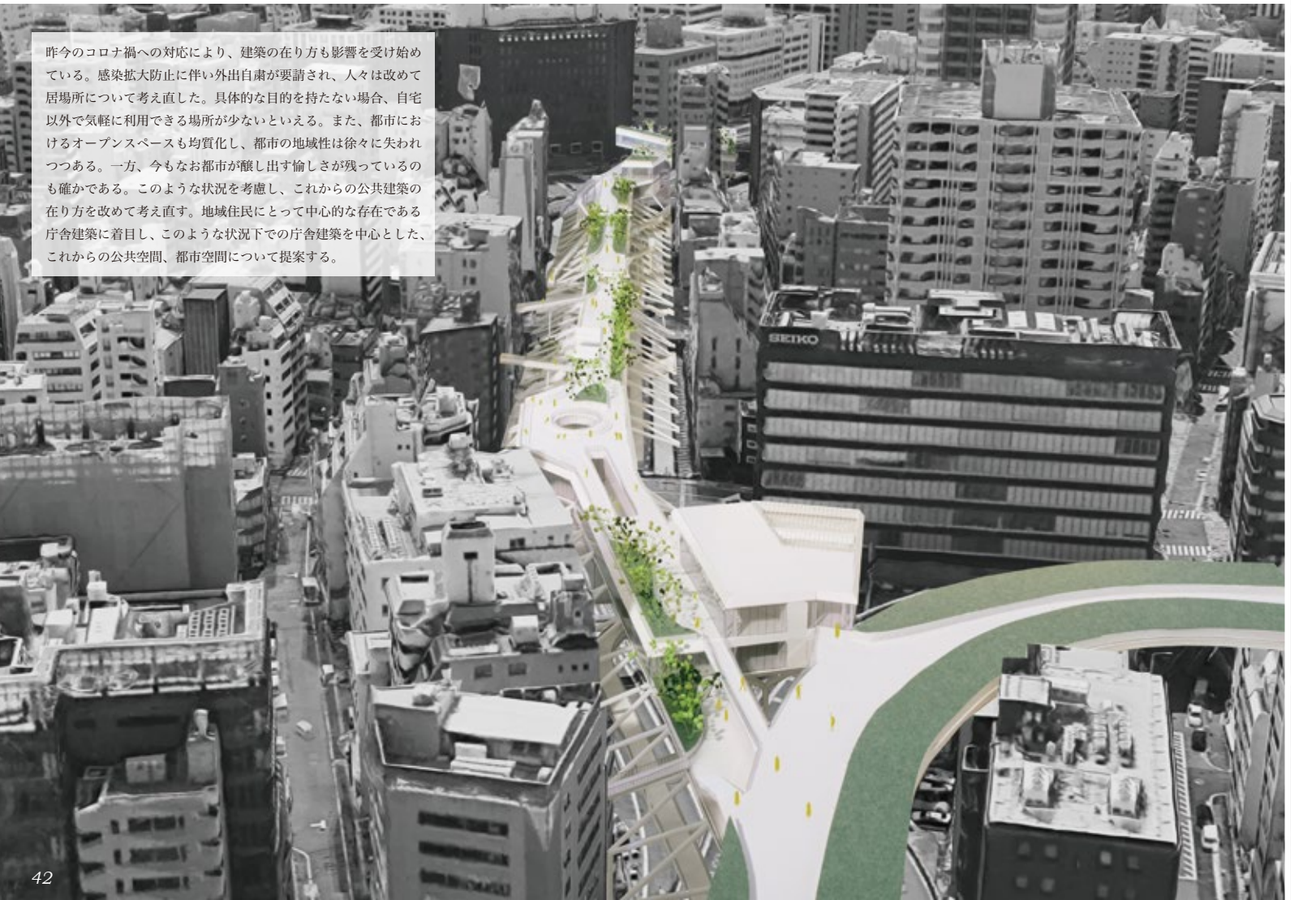
都市が醸し出す愉しさ
The engendering pleasure from a city

-批判的地域主義の考えを軸に
庁舎を中心とした公共空間の価値の再定義-
-Redefining the value of public space with a proposal of city hall based on the idea of critical regionalism-

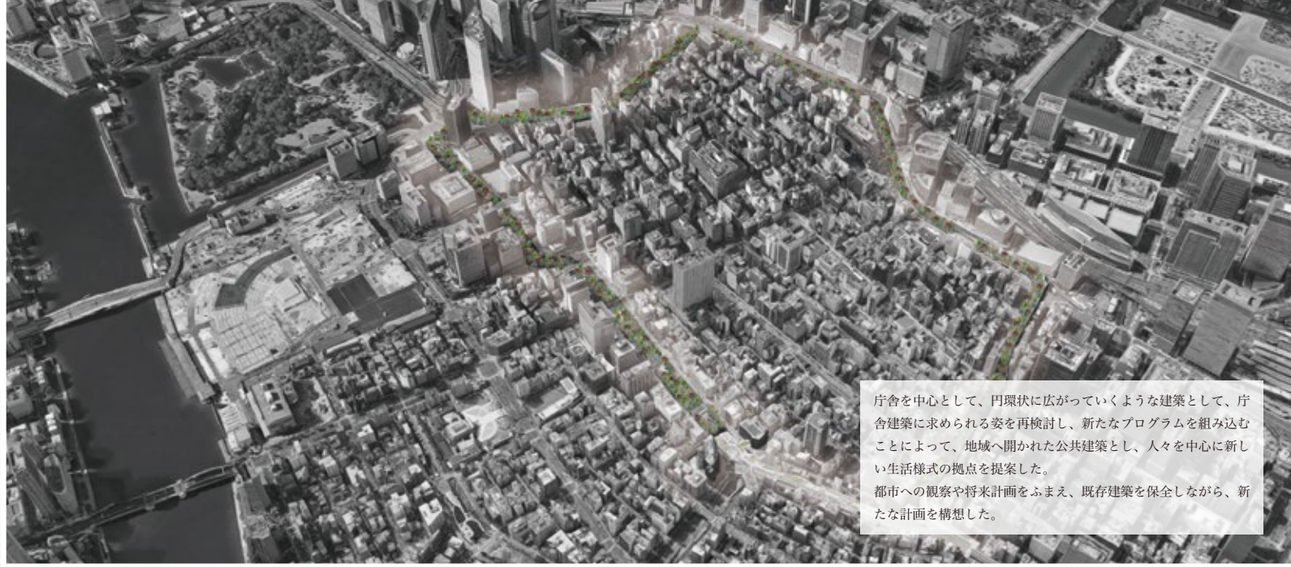
中井 どうして首都高上部という、都市の貴重なボイド空間に、このような大きなボリュームを配置したのですか。

山家 その質問に関連して、都市計画の観点からのボリューム操作についても教えてください。

亀岡 この計画は、面積が逼迫する既存庁舎の建築的価値を保持したまま、都市の限られたボイドに建物を壊すことなくチューブ状の建築で増築を行いました。また、周辺建物との高さ関係を配慮し、出来る限り建物高さを低く押さえ、新築部分の屋上を緑道として開放することにより、都市のボイドを近隣住人が散策できるように操作しました。

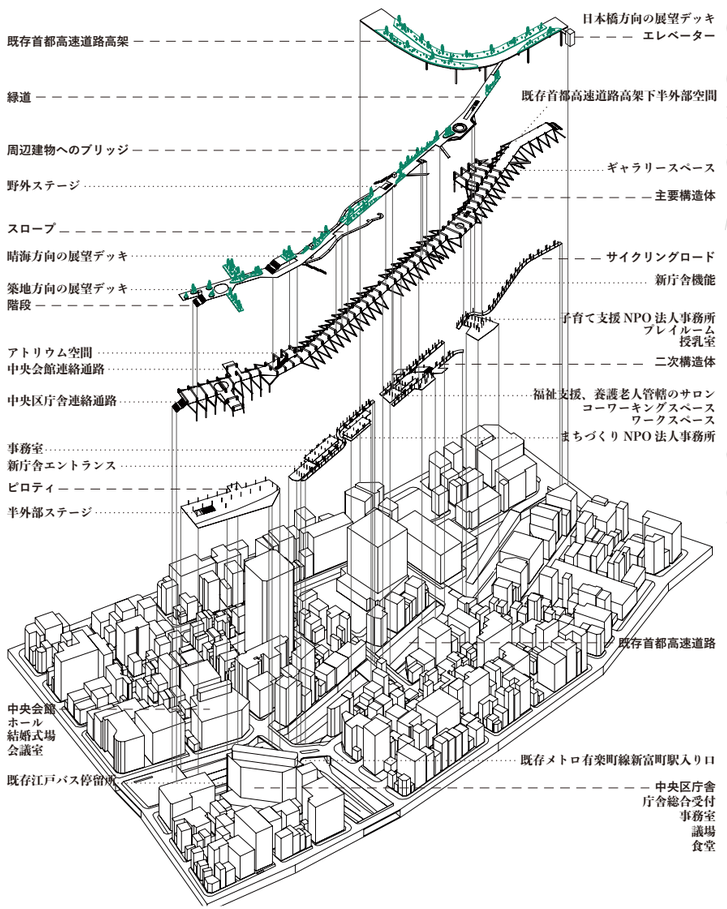


昨今のコロナ禍への対応により、建築の在り方も影響を受け始めている。感染拡大防止に伴い外出自粛が要請され、人々は改めて居場所について考え直した。具体的な目的を持たない場合、自宅以外で気軽に利用できる場所が少ないといえる。また、都市におけるオープンスペースも均質化し、都市の地域性は徐々に失われつつある。一方、今もなお都市が醸し出す愉しさが残っているのも確かである。このような状況を考慮し、これからの公共建築の在り方を改めて考え直す。地域住民にとって中心的な存在である庁舎建築に着目し、このような状況下での庁舎建築を中心とした、これからの公共空間、都市空間について提案する。

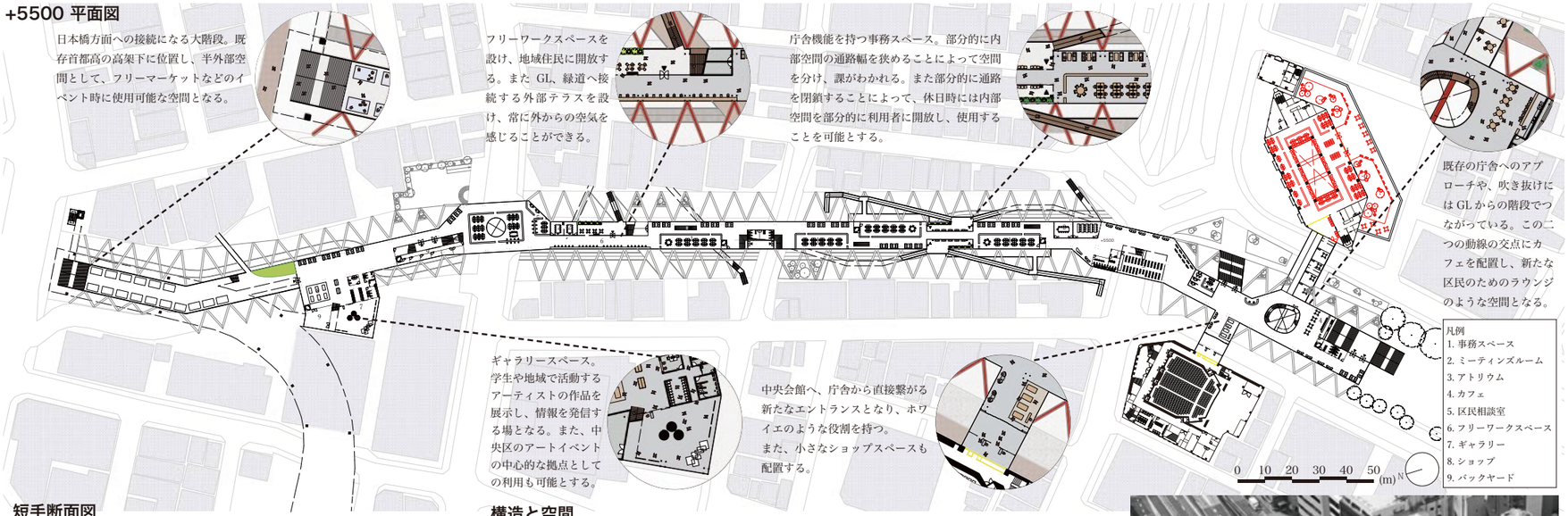


庁舎を中心として、円環状に広がっていくような建築として、庁舎建築に求められる姿を再検討し、新たなプログラムを組み込むことによって、地域へ開かれた公共建築とし、人々を中心に新しい生活様式の拠点を提案した。
都市への観察や将来計画をふまえ、既存建築を保全しながら、新たな計画を構想した。

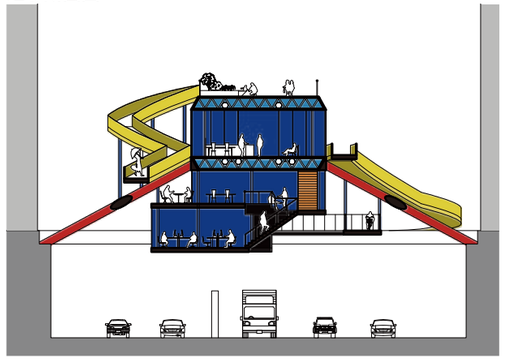
構成要素と建築用途



+5500 平面図

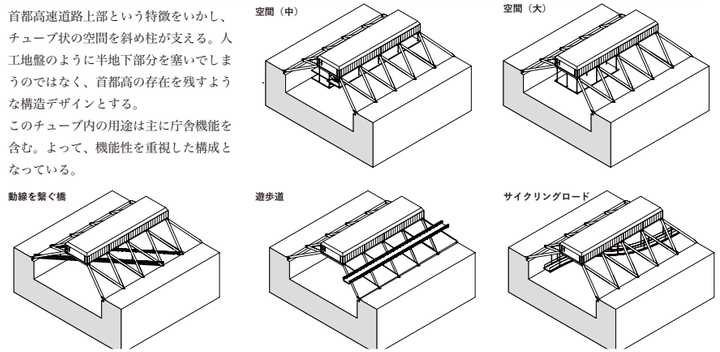


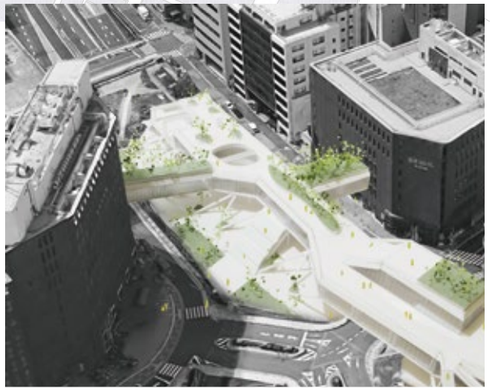
短手断面図



構造と空間

首都高速道路上部という特徴をいかし、チューブ状の空間を斜め柱が支える。人工地盤のように半地下部分を塞いでしまうのではなく、首都高の存在を残すような構造デザインとする。
このチューブ内の用途は主に庁舎機能を含む。よって、機能性を重視した構成となっている。





● 優秀賞

佐塚将太
Shota SAZUKA
曽我部研究室
SOGABE lab.

建築の内外の関係を再編する

The reediting of relationship between inside and outside of architecture

-連続的な境界をもつ持続可能な日常空間の提案-

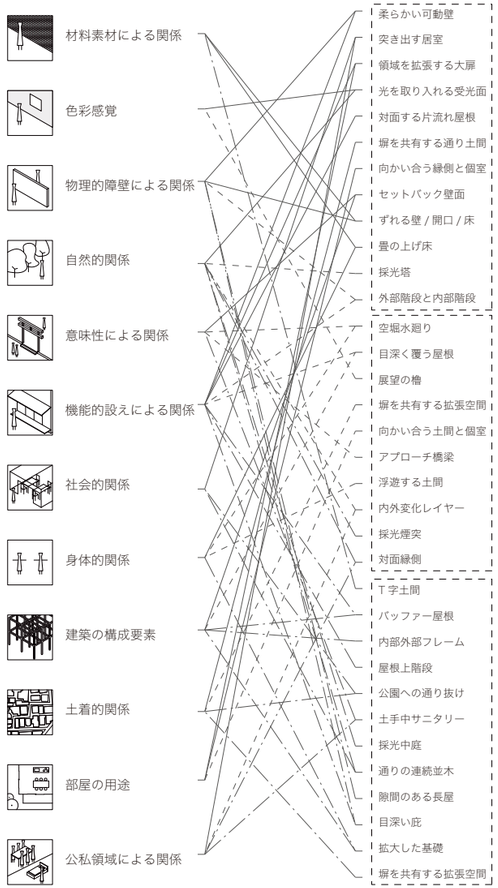
-Proposal for the sustainable daily space with continuous boundaries-

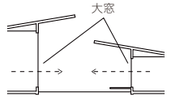
内田 店舗付きと専用住宅、集合住宅の 3 つのタイプがありますが、それぞれ 3 つのバージョンで作ったのかあるいは、内外の関係から 3 つのタイプを考えたのか、また 3 つが意味することはなんでしょうか。

佐塚 まず 3 つになった理由は、住宅の中でも店舗を持っている場合であったり、シェアを基本とした暮らしに変わっていったときに内外の関係がどのように変化していくのか自分で設計しながら確認しようと考えたためです。

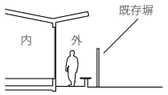
内田 その 3 つのものは、内外の空間の関係性が共通しているものなのかそれとも、異なったものとして考えているのかどちらですか。

佐塚 共通している部分もあるのですが、それぞれの敷地ごとの情報や周辺の状況を読み取った形を作っているのでそれぞれが異なった操作ができていると思います。

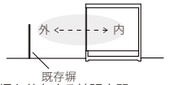




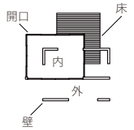
対面する片流れ屋根
敷地の内側に向かって屋根勾配を上げ、大きな開口を確保する。それを対面するように配置し、積極的に外部に開く。



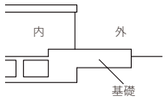
塀を共有する通り土間
敷地を隔てている既存の塀に隣接するように屋根をかけ、床面を土間仕上げとすることで、通り土間のような空間とする。



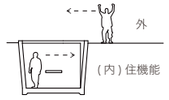
塀を共有する拡張空間
隣家の塀に対して大きな開口を配する。塀と大きな開口をもつ個室の間にある外部も一体的に利用する。



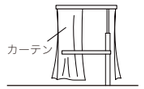
ずれる壁 / 開口 / 床
壁、開口、床がズレている構成。床は内部を拡張し、壁面は外部を内部に引き込むような位置づけとなる。



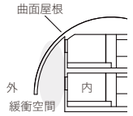
拡大した基礎
基礎を大きく作ることで、壁面に対して内と外を横断する。インテリアとして用いることで、人の居場所ともなる。



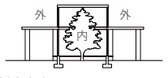
空堀水廻り
壁ではなく道路境界面を空堀し高さを変化させて、内外を分ける。堀の内部には水廻りの機能が収まる。



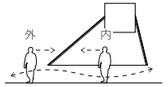
内外変化レイヤー
カーテンの開け閉めにより、外部空間の領域の大小を自由に変化させる。外部の多様な環境に対して対応できる。



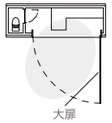
バッファー屋根
曲面の屋根の片側を伸ばし、壁面との間にバッファー空間を作る。プライバシーを守りながら、開口を開けることができる。



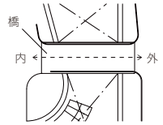
採光中庭
ピロティに採光を確保するためのアトリウムを設ける。内部は庭として利用し、大きな木が植えられている。



目深く覆う屋根
屋根が地面近くまで、四方に落ちる。通風を確保し、人の視線を遮るなど外部の環境を緩く仕切る。

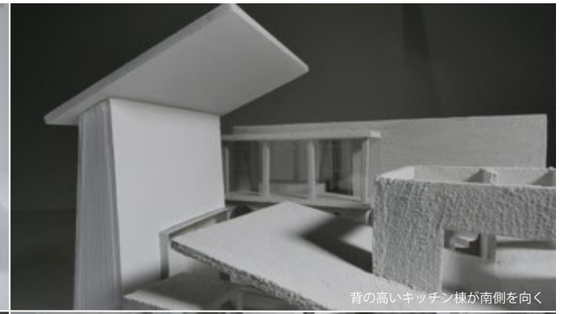


領域を拡張する大扉
扉が開閉すると同時に外部へ開く。扉は内部の機能を拡張すると同時に、外部の空間を仕切る。



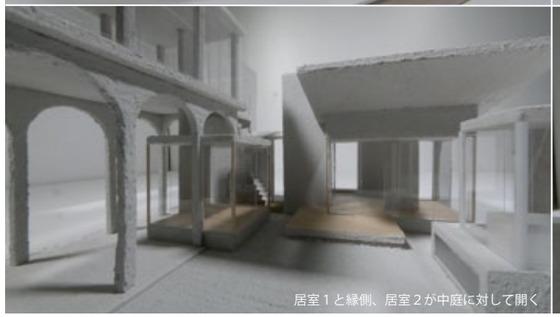
アプローチ橋梁
橋をわたる行為が内部から外部、外部から内部へと空間を連続的に繋げる。

壁と開口がずれることで、通り土間がうまれ位置指定道路まで続く


背の高いキッチン棟が南側を向く

アーチ状のピロティ空間が壁に対して突き出すことで、道路との新たな関係をつくる

道路面から中庭を見通せる

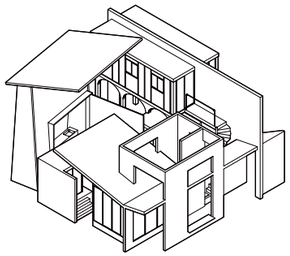

居室１と縁側、居室２が中庭に対して開く

商店壁に大きなボリュームが支えられている

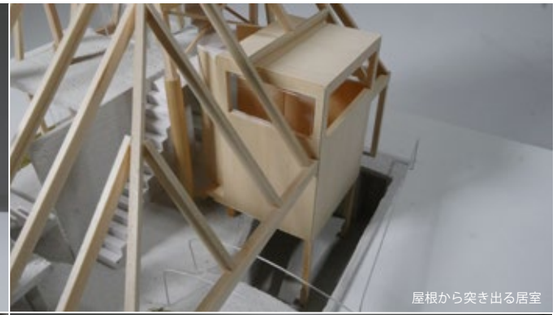
01. 商店壁の住宅

「椎名町 × 店舗併用住宅」

カフェを営む夫婦の住居である。椎名町駅から続く道路から枝分かれするように伸びる位置指定道路に面した場所に位置する。位置指定道路や周辺の商店街に対する建ち方や連続感を意識しつつ全体を計画した。



軸組


屋根から突き出る居室

居室 1 は隣家の塀や浮いてる土間スラブを含めた一体的な利用ができる

全面の道路から +1200 程の高さまで庇が落ちる

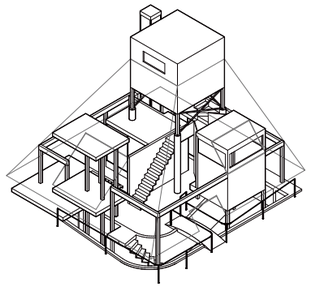
L 字の空堀空間はキッチンや風呂などの水回りのスペース、小さな橋がかかる

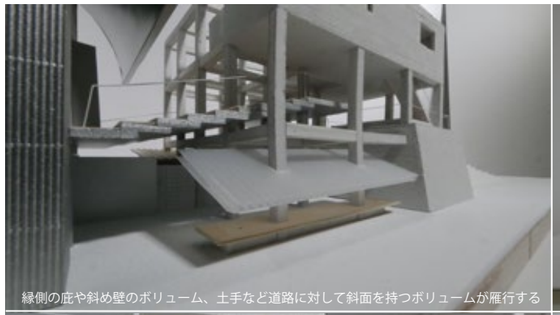
スラブの高さを変化させる

02. 目深屋根の住宅

「雑司ヶ谷 × 専用住宅」

夫婦と小学生の子供の 3 人家族の住居である。道路幅 2m 以下のとても狭い七曲りの一角に位置する。L 字状のお堀を敷地に沿って配置し、外部に対して程よい距離感を保ち、敷地内を積極的に外と関わりのある場所として位置付ける。

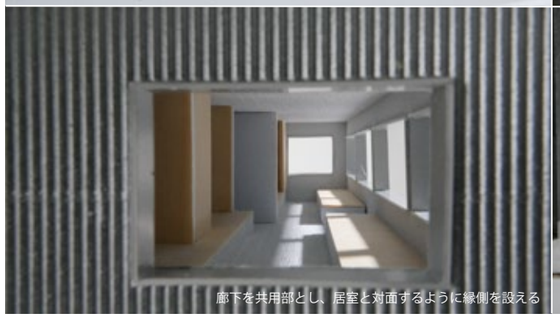



縁側の庇や斜め壁のボリューム、土手など道路に対して斜面を持つボリュームが雁行する

南側立面

光庭の周りに共有のサニタリースペースを配置する

RC 造のグリットに対してボリュームが突き出たり刺さったりし、様々な空間をつくる

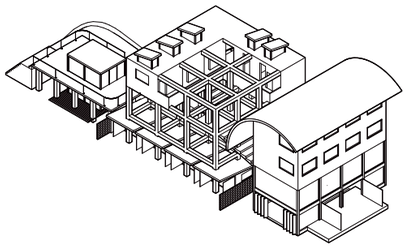

廊下を共用部とし、居室と対面するように縁側を設える

隣接する公園と連続的な関わりを持つエントランス

03. 都市を纏う集合住宅

「池袋 × 集合住宅」

大学に通う学生や、近隣のオフィスに勤める単身者が住む集合住宅である。大学と公園の間に位置し、大学生や会社員の通勤通学路として利用される道路に面する。中心の RC 造の骨組みに様々なボリュームが纏わり付く構成である。



● 優秀賞

前田沙希
Saki MAEDA
曽我部研究室
SOGABE lab.

緑の再考

Rethinking about living between local community and activity

-東アジアの暮らしから学ぶ-

-Learning from the living of East Asia-

中井 東アジアの暮らしを観察して設計した住宅にしては壁がちな印象ですが、振る舞いや自然環境に対しての配慮はどのように考えているのでしょうか。

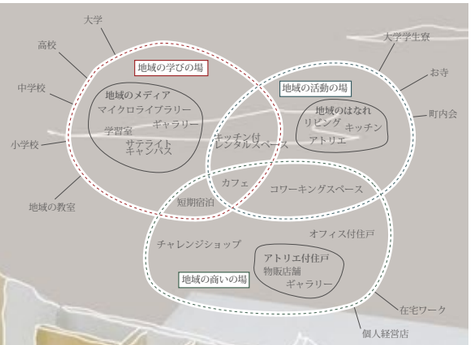
前田 同じ東アジアでも、文化的な背景や価値観は異なるので、そのままの様式で設計を行うのは難しいと考えました。開口の位置や設え、多様な空間の連続により、住戸の境界での活動が豊かになり、住環境の向上につながると思いました。

中井 ３つの建物を設計しているがその３つの建物の関係はどのようになっているのか。

前田 東アジアの暮らし方は自分の住戸だけが暮らしの場ではなく、他の人の家や空いているスペースも住まいとして見なしています。３つの建物を行き来することで生活が成り立つということを考えました。

多様な暮らし方を考える上で、東アジアの暮らしに着目し、住まいと地域の関わり方や、暮らしの環境的手法について分析を行った。住戸の縁を超えて空間の快適性や利便性、他者とのコミュニティを獲得する暮らし方が、昨今の社会情勢や住宅に対する価値観の変化に対応し得ると考えた。

敷地に生じる新たな空間が周辺の既存施設や活動と連動し、地域の学び、活動、商いなどの関係性を結び直すことで、これからの暮らしの可能性について提案を行った。



A. 地域の学びの場（新築）

大学のサテライトキャンパスやマイクロライブラリーなどを複合させた「地域メディア」と住居の新築である。神奈川大学 30 号館の向かいに位置している。

目的：同一目的を持つものが集まり地域との関わりを創出

機能：周辺の学校や店舗と連携しながら地域との接点を持つ「地域のメディア」、居住者の入れ替えサイクルや住まい方の多様化に対応した賃貸住宅３ 戸・シェアハウス４ 戸、多拠点居住や短期滞在の暮らし方に対応するための宿泊施設２戸

B. 地域の活動の場（新築）

地域の活動拠点としてキッチンやリビングを設えた「地域のはなれ」の新築である。前面道路は多くの人が利用する東白楽方面への道であり、近くには寺や町内会もある。

目的：学生や単身者の地域的な孤立の解消、高齢者など家の中で過ごしがちな人への外出のきっかけづくり

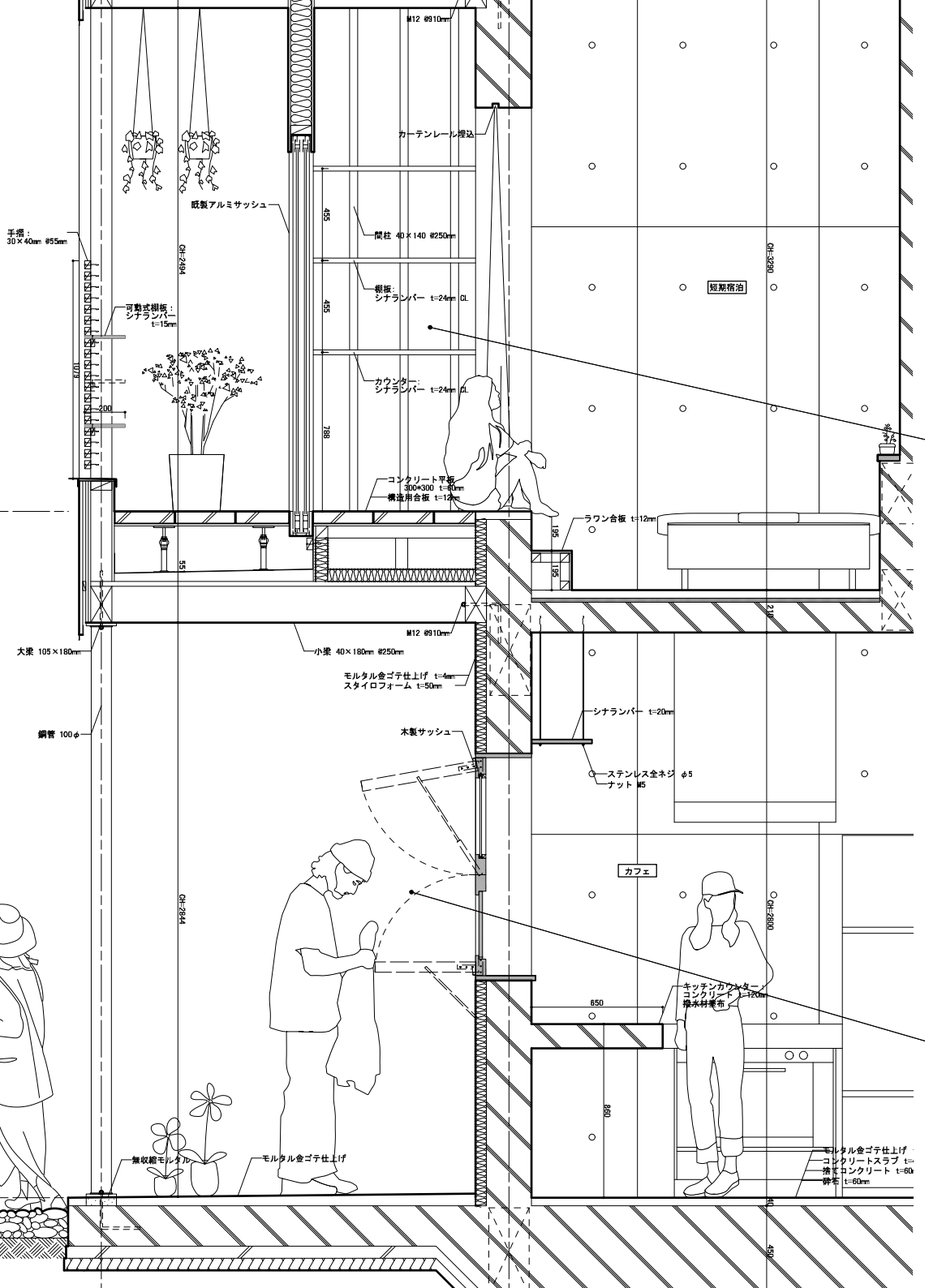
機能：気軽に立ち寄れる場所として地域に開いた「地域のはなれ」、地域と多様な距離感と場所をつくるアトリエやキッチン

C. 地域の商いの場（改修）

周辺の商いや既存の建物・地形を活かした改修計画である。美容院が近くにあり、東白楽方面へ下ると医院や食料品の店舗もある。

目的：職住一体の暮らし方やリモートワークなどの新しい働き方への対応

機能：実験的な商いや活動が行える「アトリエ付住戸」 共同アトリエ付シェアハウス５ 戸、地域に根差したオフィス付住戸１ 戸、地域の中で働く場所を選択できるコワーキングスペース



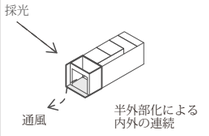
暮らしの環境的手法

東アジアの住宅や集合住宅を取り上げた論文や書籍を対象として、掲載された図面や写真をもとに分析を行った。環境的配慮がなされた空間を把握するために、東アジアの暮らしに見られる手法を抽出した。

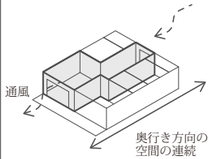
a. 平面構成

2 面開口による通風の確保や、気候や状況に応じて設えを変化させるなど、空間の幅の変化や分割の仕方などの平面的工夫が見られた。

a-7. 室の半外部化



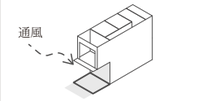
a-1.2 面開口



b. 断面構成

通風のための床下空間や地熱を利用した土間や、空間の高さ方向の操作による通風や採光の確保などの断面的工夫が見られた。

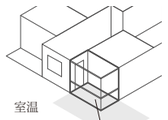
b-5. 入口のセットバック



c. 建築部位

空間を快適に保つための素材や設えなど建築部位の工夫が見られた。また、凹凸の壁面による外壁の増加や路地に延びる庇が住環境の向上を図るとともに、特徴的な外観をつくる。

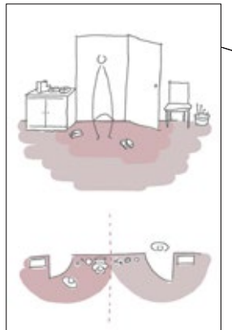
c-1. 熱を吸収する床材



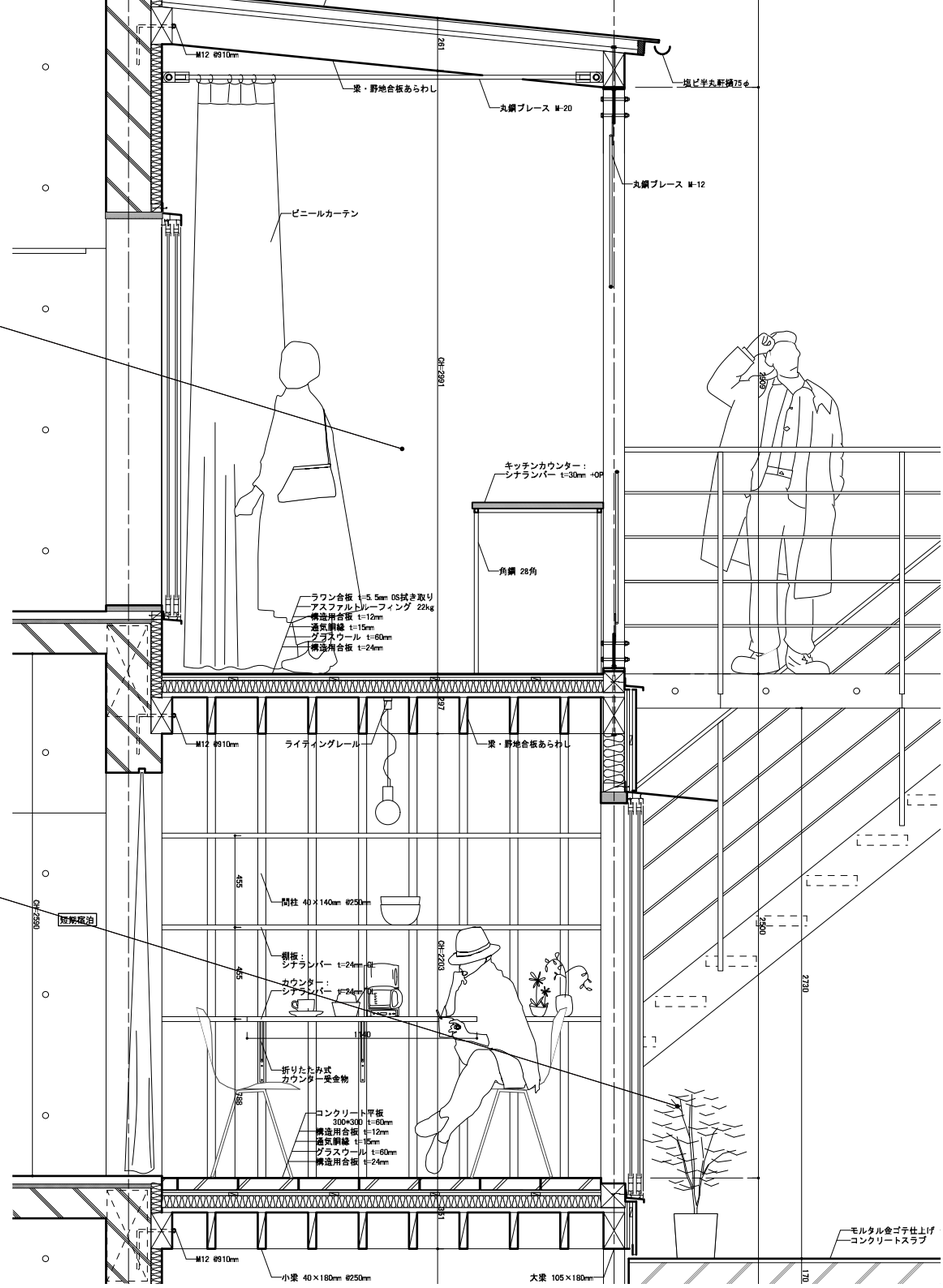
地域と住まいの関わり方

住まいは居住者自身の生活の場であると同時に、その地域に暮らす人たちの場でもある。

東アジアの国々では、習慣として親戚がよく集まり食事や宿泊をするため、リビングが居住者と居住者以外の中間の場となる。集合住宅においては、集会室のようなものはなく、近隣住民との集会や学習塾などをリビングで開くこともある。



玄関前やベランダに溢れ出る生活が地域との接点や表情をつくる。



● 優秀賞

向 咲重
Sakie MUKAI
中井研究室
NAKAI lab.

敷地びらきによる多様な住まい方を受け入れる郊外住宅地の再構築

Reconstruction of a suburban residential area accepting diverse living styles by opening private premises

-家びらきを行う住宅と周辺環境の関係-

-Spatial composition of relationship between house open to the town and surrounding environment-

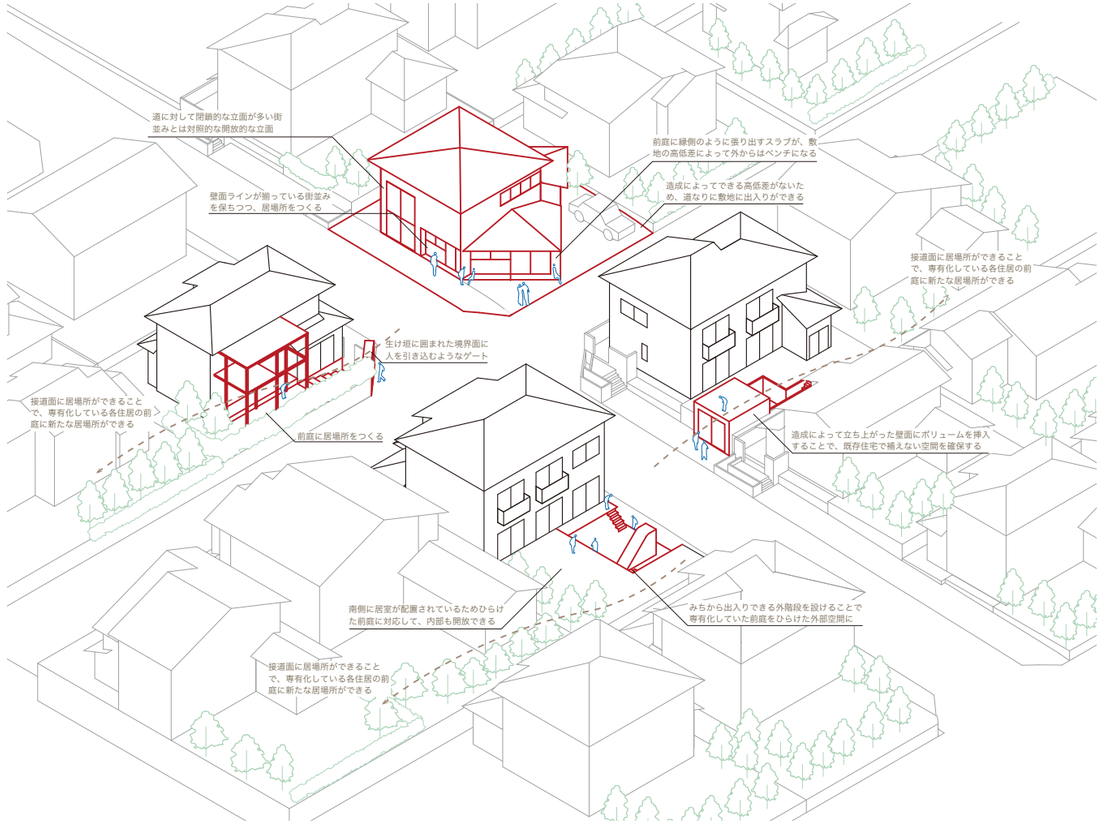
曽我部 十字路に面するようにして 4 つ敷地を選定しているが、これは仮の想定ですか。

向 そうです。実際には、この住宅地全体を対象に、各住宅が前面道路との新たな関係を持てるような、仕組みになっていけば良いと考えています。

石田 南北に通っている道に向ってひらいているものが多いが、これが東西側にも出てくると、もっと面白くなるかもしれません。

山家 プログラムに頼らず、建築で解こうとしたことに好感を持てます。

均質で閉鎖的な住宅が建ち並ぶ郊外住宅地の敷地境界の再編による敷地びらきと地域拠点となるひらかれた家による住宅地びらき



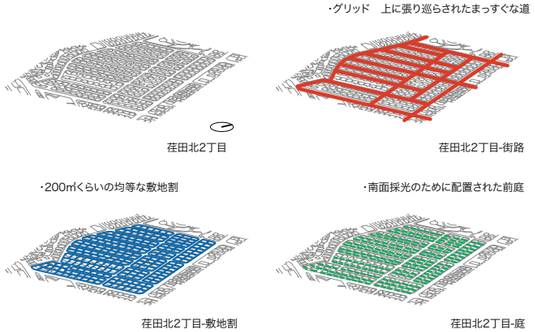
・コンセプト

コロナ禍の影響などから、在宅勤務やリモートワークなどが広がり、これからのワークスタイルやライフスタイルが大きく変化していくと想定される。また、対象敷地のような郊外住宅地は、今後の人口減少に伴い空き家や空地が増えることも想定される。
そこで、現在建ち並んでいる専用住宅の特色を生かしつつも、今後求められていくであろう地域とのつながりや共有できる空間の創出を可能とする、郊外ならではの家びらきと、新たな住宅地の在り方を提案する。

これから想定されるライフスタイル

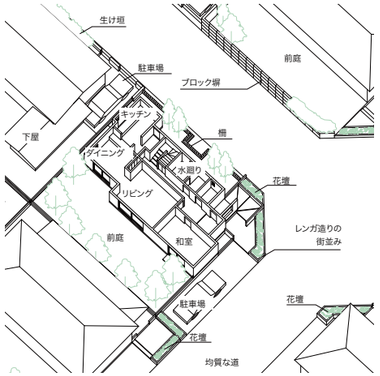
・まちのシステム

東急の開発によりグリッド状に作られた道、均質な街区割、南面採光のために配置された前庭などまちのつくりにシステムが見られた。



既存のまちのシステム

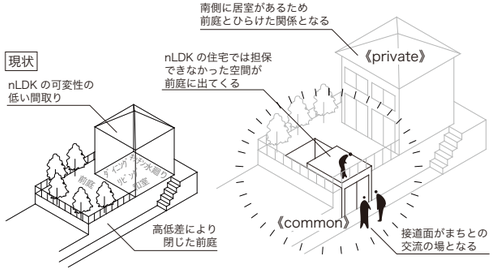
システム化されたまちのつくりは、敷地内・住宅内部のゾーニングにも影響し、北寄せの配置、南側の庭に面する居室、北側に水廻りという裏表のある構成となっている。敷地境界も街路から切り離された閉鎖的な構えをもつ。



住宅の周辺環境

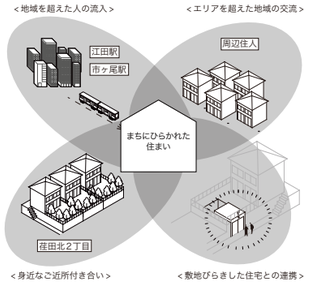
・設計手法

閉鎖的な印象を与えている、敷地境界の法面擁壁や塀を再編し、造成によってつくられた高低差を利用して、まちにひらかれた空間を創出する。



前庭へのアプローチ

前庭に創出された空間を有効に活用するため、地域ネットワークを形成するような地域拠点を計画する。



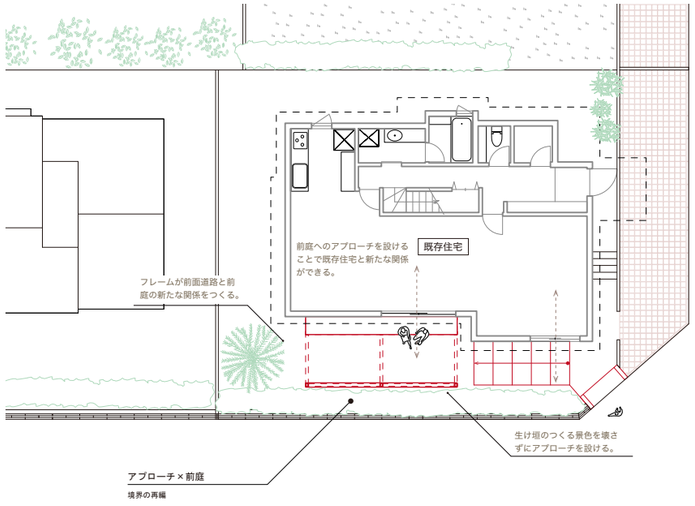
まちの連関図

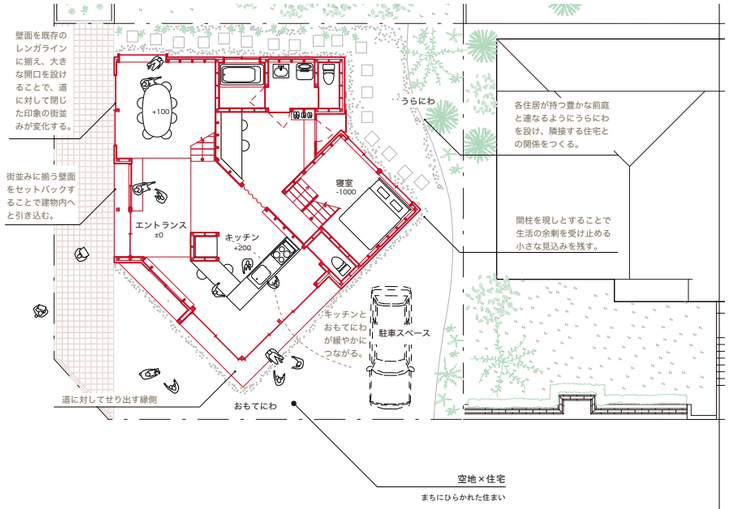
まちにひらかれた住まいを中心に敷地びらきを行う

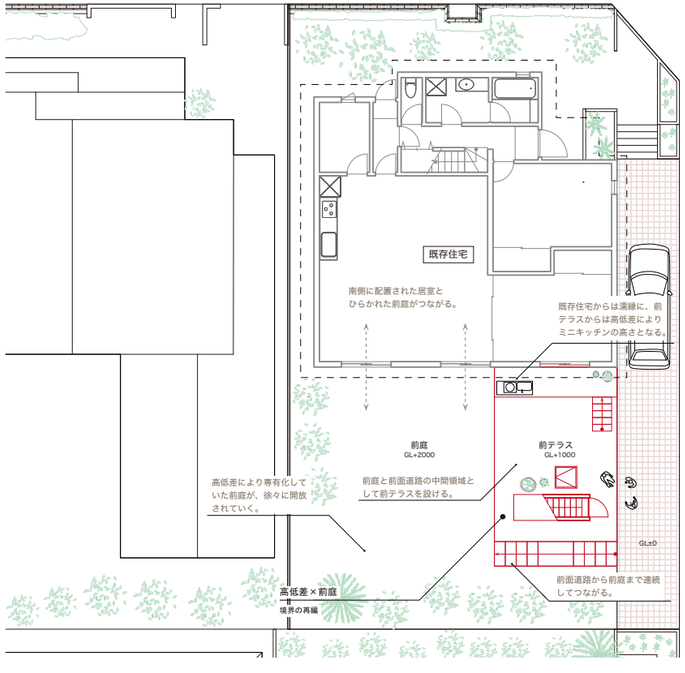
道に対してひらかれた空間をもつ

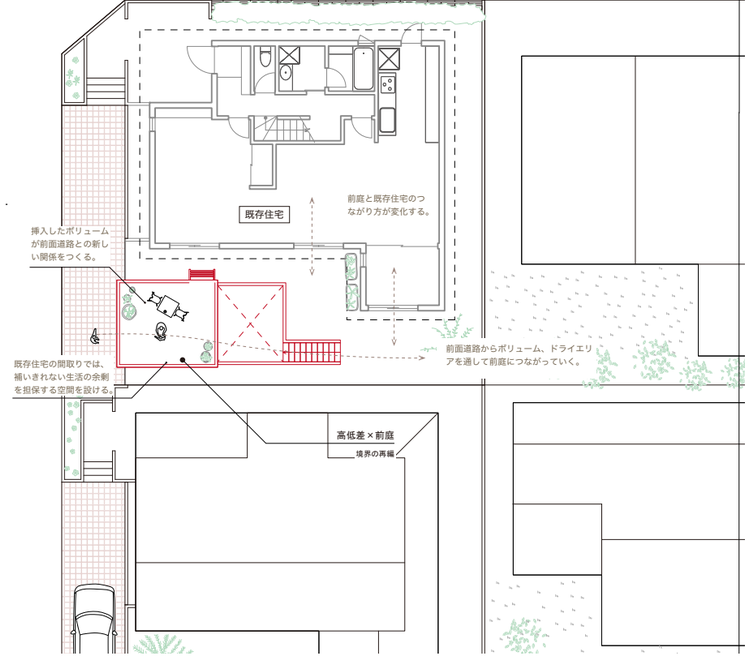
南北方向の街並み

東西方向の街並み









道からエントランスをみる

道から下屋をみる

隣地からうらにわをみる

まちにひらかれた２階の広間

● 優秀賞

下山 美月
Mizuki SHIMOYAMA
内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

中井 モダニズム的や歴史主義的という言葉を使われていたが、言葉の定義がわからない。
また、作品の特徴は竹腰健造特有のものではなくこの時代の一般的なものだったのではないか。

下山 モダニズムや歴史主義としての表現が見られることからそのような言葉を用いました。
傾向としては似ている部分もあると言えますが、クラシカルな部分を多く残した建築表現だったと言えます。

石田 同時期の建築家であるコルビュジエとは対照的に、窓の大きさに対して消極的だと見られる。消極的な窓の表現と格式性はどのように関連しているのか。

下山 窓が大きくなっていくことに着目するならば竹腰はモダニズムとは少し異なっているが、その他の装飾などの部分において近代的になっている。

戦後日本の建築家・竹腰健造の建築について
Analysis of architecture designed by Kenzo Takekoshi
-聖心女子大学キャンパス計画を中心として-
-Focusing on University of the Sacred Heart campus planning-

1.研究背景と目的

竹腰健造(1888-1981)は1888(明治21)年石川県金沢市生まれの建築家である。1912(大正元)年に東京帝国大学工科大学建築学科卒業後すぐにイギリスへ留学し、AA(アーキテクチュラル・アソシエーション)スクールで建築を学ぶ。1915(大正4)年にRIBA(ロイヤル・インスティチュート・オブ・ブリティッシュ・アーキテクト)を取得した日本人で数少ない建築家であり、日建設計の源流を築いた人物のひとりである。1917(大正6)年に住友の営繕課に入社し、各地の銀行建築や住友ビルなどの建設に関与しながらも、1933(昭和8)年に長谷部鋭吉と共に独立し「長谷部竹腰建築事務所」を設立する。設計活動は長谷部が中心であり、事務所の経営を竹腰が担当していたため、経営者としての面が印象的だが、彼は関西を中心に多くの作品の設計や建設に携わり、それらの作品の現存も確認できることから、戦後日本の建築界の発展に欠かせない存在であったといえる。

そこで本研究では、彼の建築活動を見直し、作品や著書、論考などの分析を通して、建築家としての竹腰健造について考察することを目的とする。また彼の作風の変化を、図面や仕様書などの資料を入手できた聖心女子大学キャンパス計画に注目し、戦後最初に行った事例として分析を行う。

2.言説からみる竹腰の建築観

1956(昭和31)年2月に大阪倶楽部で行われた近代建築に関する講演会で、竹腰は欧米からの新しい文化や建築に不安を感じながらも新しい技術や材料、意匠表現が展開され始めていた戦後数年の状況について、「果たして、それでよいかという問題が起ってきております」と新しい建築を模倣している現状を疑問視し、「建築というものは、国情、習慣、風土、国民の経済力によって違うはづ」、「日本的にもう一度よく研究し、消化し、同化して取り入れることが必要であります。(中略)そこで初めて新建築様式というのができる」と述べ、日本に適した方法での新様式の導入を模索し、めざしていたことがわかる。そしてその後の1962(昭和37)年「建築随想」では、住友時代や独立後の経験と発展していく建築界の中で変化した建築に対する考え方について述べている。まず、「今日の建物は無機体から有機体に変ってきている」と、機能主義の普及による建築の変化を感じていることが窺える。過去に評価されても時代に合わなければ変化すべきであり、これは建築に限らず様々な文化で共通する「近代の思潮であり、建築だけがその思潮から遊離することはできない」とも述べている。このようにモダニズムの流行の中で、時代に合わせ新しい建築の思想を受け入れることの必要性を感じていることが窺える。以上をまとめると、新様式を日本の建築に取り入れる際、単に模倣するのではなく、日本に適した方法をめざすべきであることを主張していることがわかる。この日本に適した方法とは、住友時代の経験が多く語られていることから、戦前期の経験に基づくもので、住友時代にめざしていた建築そのものの格式や品格、質といったものを失うことなく、新様式の考えを取り入れていくことを意味していたものと考えられる。

3.外観意匠分析からみる作品の特徴

作品集や雑誌記事などより収集した外観意匠分析の対象とする56件の作品について、作風に関して言説でも述べているように、欧米の新様式の単なる模倣ではなく、その表現には戦前と戦後で変化がみられることから、①窓形状②柱表現③装飾性④外装仕上げの4つの建築の部位に着目し、外観意匠の特徴をまとめる。さらに、竹腰の建築は歴史主義の建築と機能重視の建築と、その意匠には大きく2つの特徴がみられる。これらを含む5つの項目より、時代的な意匠の変遷を明らかにする。

これらの分析より、竹腰の作品は銀行建築や住友関連のビルなど伝統や格式を示すような歴史主義的なデザインから、学校やオフィスビルなどの機能性を重視した中でのシンプルなデザインへという全体的な変化の流れが窺える。さらに機能性を重視した中でも教会や能楽堂、社寺関連の施設においてはその伝統性や品格を考慮した上で、簡略化した歴史主義的要素を設けることでそれらを示していたと考えられる。彼の設計は歴史主義のデザインや要素と当時新しかったモダニズムの要素とが意図的に混ざり合い、その調和が独自のデザインとなっていると考えられる。

4.聖心女子大学について

聖心女子大学は、聖心会(カトリック女子修道会)を信仰し、1801年パリ・アミアンに最初の聖心学院が創設された。日本には1908(明治11)年5月に三光町(現在の港区白金)に財団法人聖心女子学院が設立される。戦後には文科省の新たな教育方針をきっかけに認可を受け、1948(昭和23)年に新制女子大学のひとつとして聖心女子大学が設立された。この背景には民主主義や女性の地位向上のため女子教育を重要視し力を入れていたGHQの影響が大きく、聖心女子大学の設立、移転に伴う新キャンパス計画は、マッカーサーがその基金を集めていたほど、中心にはGHQや聖心会のマザーの存在があった。そのため聖心のマザーたちとの英語でのコミュニケーションが求められ、英語が堪能だった竹腰が公職追放の身であるタイミングの中、計画、設計、監理の全てを担う大学顧問となる。

5.聖心女子大学キャンパス計画と建築的特徴

キャンパス整備計画は、1949(昭和24)年に始まり全5期にわたって約10年間の建築工事が行われた。1949(昭和24)年5月に作成された鳥瞰図をみると、当初は曳家した後の旧久邇宮本館(現在のクニハウス)も含めて、1号館、2号館、講堂、聖堂といった校舎群は全体的に回廊性を持つ計画であったが、実際には行われず計画が変更されている。また、1949(昭和24)年と1950(昭和25)年の計画とでは聖堂と講堂の位置関係が入れ替わっており、何らかの理由で変更された計画が当初の計画へと戻り、変更が重ねられたことがわかる。この計画変更に関して特に明言されていないが、カトリック系大学である聖心女子大学にとって、聖堂は最も格式の高い大学のシンボルであるため、正門からのアプローチで最初に目に入る現在の講堂の位置へと一度変更されたが、建物の格式性が重要と考えていた竹腰は、シンボルである聖堂を中心に配置するべきという考えのもと、改めて配置が見直されたと推測できる。

図 1949(昭和24)年に作成された鳥瞰図
全体に回廊性をもつ校舎群の配置計画であったことがわかる

建築的な特徴は、縦長窓が用いられる点や柱が強調されていること、石造のようにみせるデザインから歴史主義的な意匠が非常に多くみられるが、それぞれシンプルな表現であり、歴史主義の要素を意図的に残しながら調和させている点が挙げられる。正門からアプローチを抜けるとまず目に入る講堂や、聖心のシンボルであり大学内で最も格の高い聖堂は、特にこの特徴が顕著である。言説や作品の分析を通して、竹腰は住友時代の経験などから西洋的な歴史主義や建物のスケール感を強調するようなデザインを用いることが、建築の格式性を表現する方法と考えているとみうけられる。そんな中、時代性に沿ったデザインを意識して近代化を目指したのが聖心女子大学の計画であったといえる。また、格式性を示すために歴史主義的な要素を設けていることが多い聖堂(礼拝堂)建築も、次第に簡略化され、限られた要素のみが残るなど、近代化されていく様子がわかる。

6.まとめ

竹腰は戦後のモダニズムの流行の中で新様式の動きを認識し,前向きに取り入れつつ、大財閥住友の技師や日本建築協会会長を務めた経験から、建築のデザインが変化してもその建築に求められる格式や品位、質を表現するという考えを一貫して持ち続けていたと考えられる。また、オフィスや学校の校舎といった機能重視の建築にはモダニズム的な表現をし、聖堂や演劇場などの伝統を重んじ格式を示す建築には歴史主義的な要素を設けるなかで、その表現は簡略化された。聖心女子大学はモダニズム的な校舎と、歴史主義的な表現が多く用いられたキャンパスのシンボル的な位置付けの聖堂からその特徴が窺える。以降の作品からは、さらに歴史的主義的な要素の装飾性に簡略化がみられることから、聖心女子大学は竹腰の近代化表現への初期の代表作品といえる。

新しい文化や建築に対し決して模倣はせず、モダニズム的な近代化表現の中に格式性を示す歴史主義的表現を要素として意図的に表す、それらの調和が竹腰健造の建築の特徴であるといえる。

修士論文

◎ 都市が醸し出す愉しさ 批判的地域主義の考えを軸に庁舎を中心とした公共空間の価値の再定義	亀岡 貴彦
防火帯建築を含む街区の再生による国際コミュニティ施設の提案 横浜市中区福富町西側エリアを対象として	中村 圭那
多様な解釈を誘発あるいは許容するオブジェクト	米山 昂佑
墓地の歴史的価値を活かした寺院美術館の提案 現代の都市における寺院のランドマーク性-東京都新宿区を対象として-	飯田 康二郎
ふるさとの再編 震災以後の地域コミュニティの再生と風景の継承	掛川 真乃子
ブリコラージュ・シティ 農業と水産業もできる、2050年の京浜臨海部における都市構想	齊藤 健太
◎ 建築の内外の関係を再編する 連続的な境界をもつ持続可能な日常空間の提案	佐塚 将太
◎ 戦後日本の建築家・竹腰建造の建築について 聖心女子大学キャンパス計画を中心として	下山 美月
内神田のビル ペンシルビルの特徴から導く、職住一体の暮らしの場の提案	鈴木 啓生
朧げな境界 横浜・谷戸地域に残された自然と街の境界のデザイン	塚本 裕士
未利用地を介して繋がりを持つ住宅の研究 -郊外住宅地の隣地境界を再編する-	永盛 栞
郊外住宅地のスポンジ化に対する分散型コミュニティの形成 -郊外住宅地の空き地・空き家の活用提案-	原 巧
記憶の継承 -としまえん跡地の再活用計画-	古本 将大
四合院風エンターテインメント空間デザイン 地元住民の日常生活の豊かさを目指す	白 露
◎ 緑の再考 東アジアの暮らしから学ぶ	前田 沙希
◎ 敷地びらきによる多様な住まい方を受け入れる郊外住宅地の再構築 家びらきを行う住宅と周辺環境の関係	向 咲重
戦後以降の住まいの変遷とこれからの住まい 使用者・形態・暮らし方からみる住まいの研究と提案	横山 優莉菜
中国における若年層の暮らしの在り方 深セン市桂廟新村を対象としたシェアリング型複合施設の提案	梁 訊
★ 防災建築街区造成法下における建築事例の外形構成の変遷	渡辺 悠介

★ディプロマ賞　◎優秀賞

卒業研究

楢原 杏奈
谷本 優斗
嶋谷 勇希
鈴木 碧衣
伊藤 伸一郎
髙田 晃

卒業設計　ゲスト審査員

鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所

森山 ちはる
Chiharu MORIYAMA

日本大学生産工学部建築学科
デザインコース非常勤講師

六角 美瑠
Miru ROKKAKU

六角工房分室ミルアトリエ
東京大学生産技術研究所特任助教

●ディプロマ賞

楢原 杏奈
Anna NARAHARA
曽我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

花で包み込む都市
A flowery city

かつての花街の賑わいを現代の都市に再構築

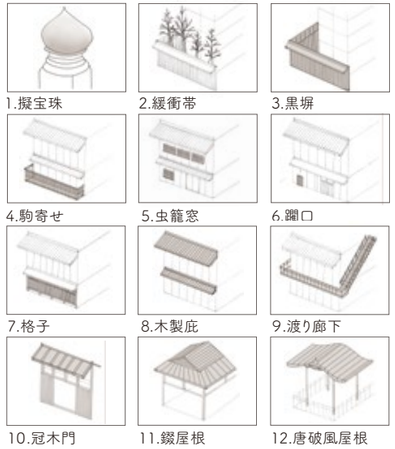
Reconstructing the bustle of the former Hanamachi into a modern city.

鈴木 一層・二層の建物とは違った面白さを感じますが、ここまで高層にしたのは理由がありますか？

楢原 都市の現状として、ビルのような箱の中に収まってしまっている人々の活動は、地上からは全く感じ取ることができません。高層部の用途も街として立体的に表れるよう、高層ビルと同じくらいの高さに設定しました。また、内部と外部の人々が触れる機会が増えるよう、あえて窓やドアなどの建具は設けませんでした。

森山 櫓（やぐら）のような物で表現していますが、楢原さんはこのような昔ながらの建物が好きなのですか？

楢原 好きという訳ではないですが、昔ながらの良さと現代の都市の特徴を組み合わせることで、今までにない楽しい都市ができる気がしました。リアリティがあるものでは無いですが、自分が想像する楽しい都市の姿はぶらさず、振り切りました。

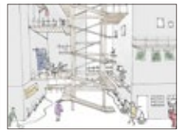


隣接するビルの活用①

横浜を見渡す展望台②

利用しやすいコワーキングスペース⑤

船つき場から直接建物に入る⑥


川の方まで人を引き込む⑨

ビル同士の共有スペース⑩

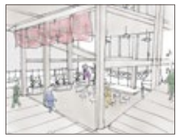
塔一断面図

塔二断面図

塔三断面図

客室の期待を高める緩衝帯③

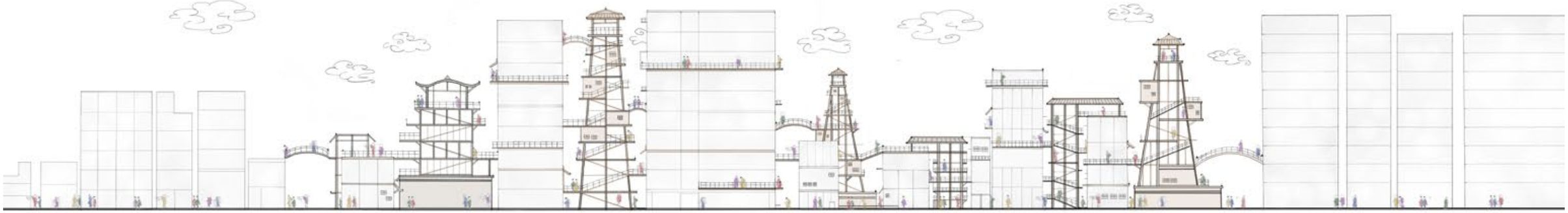
黒塀が壁の役割を果たす④


川沿いの開放的なホール⑦

通り道から中の活動が溢れる⑧

ビル壁面を活用⑪

屋根が伸び、屋上にも場を作り出す⑫


長手断面図

●優秀賞

谷本 優斗
Yuto TANIMOTO
曽我部・吉岡研究室
SOGABE・YOSHIOKA lab.

人間のためでもある建築

Architecture not only for humans

生物多様性の再編を軸とした建築と人との ふるまいの再構築

Reconstruction of behavior of architecture and people with the reorganization of the biodiversity

六角 プログラムが集会所という漠然としたものより何か用途が決まっている方が面白かったんじゃないか。また壮大な計画なのに敷地が小さいと感じるため、もっと広がりのある、ダイナミックな計画にしてもよかったのではないか。

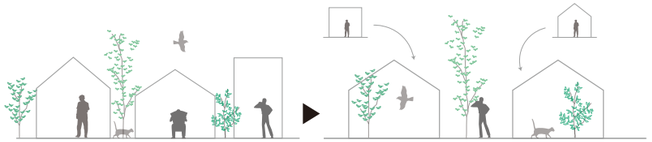
谷本 プログラムに関しては、現代の均質な都市空間では、目的に抑圧されたような関係の希薄さを感じています。そのため、好きな場所で好きな活動を見つけることを大切にしようと考えたので、空間が何かしらの活動を誘発するような期待も込めた計画としています。

鈴木 断面図があまり見ないような魅力的な形だと感じたのですが、この構成はどのようにして考えたのでしょうか。

谷本 まずは、生物の習性からつくり出した形態を空間化しました。その空間たちを生物の集まりやすい場所や習性を基に配置計画を行い、全体のつながりやバランスなどを考えながら構成していきました。

鈴木 生物が主体になりながらも建築のエレメントで構成されていることが面白くとても不思議に感じました。

人間は神様が宿ると言われた自然物の周りを聖なる場と定め、それらを守るために建築を作った。それら聖なる場の周りで人間は、文化的行為、行事を行う場として多様な行為を受け入れ、人々の拠り所となっていた。



人間空間の隙間に生物が入り込む　　生物主体の建築の余剰に人間が入り込む

アブラゼミ

コンテナのようなストラクチャーを地中から連続させることで、建築と自然が立体的に絡まる空間。多角の平面形に開いた開口からは、街の様々な風景を眺めることができる。

シオヤアブ

層を貫く吹き抜け空間の内壁に鏡面仕上げを施す。地下にいても空や外部のランドスケープを映し出す。

キシノウエトタテクモ

土壁と棚を取り付けることで経年変化によって崩れた土と棚が一体化し、植物や生物の生息空間を立体的に連続させる。

ミスジマイマイ

熱容量の高いコンクリートは温度を知らせる伝達材。断面が斜めに切り取られ外の風景を額のように切り取る。

ミナミヌマエビ

蛇籠による親水空間は凸凹のある歩きにくい場であるが、本来あるべき地面を感じることができる。

ミミズ

土壌を連続させる下部では、天井高が徐々に低くなるが、普段気づかない地面レベルの生態系などを知るきっかけになる。

モンシロチョウ

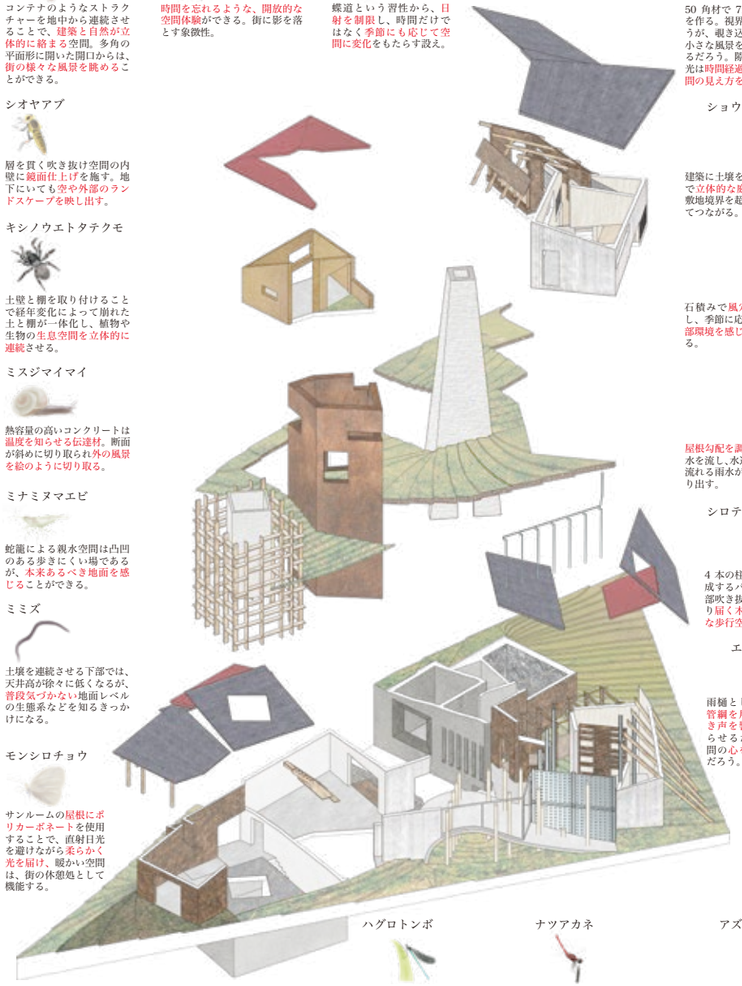
サンルームの屋根にポリカーボネートを使用することで、直射日光を避けながら柔らかく光を届け、暖かい空間は、街の休憩処として機能する。

ナナホシテントウ

時間を忘れるような、開放的な空間体験ができる。街に影を落とす象徴性。

アゲハチョウ

蝶道という習性から、日射を制限し、時間だけではなく季節にも応じて空間に変化をもたらす設え。



ハグロトンボ

アーチ状の壁にトンボの止まり木となるよう金棒を設え、また内部で動線空間とする。上る手間があるが階段とは異なる風景に気づける。

ナツアカネ

乱立する柱は、空間を遮り邪魔に感じるかもしれないが、湾曲した床と共に、気分で好きな体勢・活動を受け入れる。

アズマヒキガエル

床レベルを持ち上げることで多湿空間を生む自然豊かな中庭。壁に囲まれ見つけにくいかもしれないが、中ではオアシスのような豊かな自然が人間の心を癒してくれる。

ミツバチ

50 角材で 7mm 間隔の隙間を作る。視界は遮られてしまうが、覗き込むと制限された小さな風景を映し出してくれるだろう。隙間から入り込む光は時間経過によって内部空間の見え方を変化させる。

ショウリョウバッタ

建築に土壌を巻きつけることで立体的な庭として開かれ、敷地境界を超えた街の庭としてつながる。

カナヘビ

石積みで風穴の原理を利用し、季節に応じなんとなく外部環境を感じさせる装置となる。

アキアカネ

屋根勾配を調節することで雨水を流し、水辺の創出を促す。流れる雨水が新たな境界を作り出す。

シロテンハナムグリ

4 本の柱、2 本の梁で構成するパーゴラには、上部吹き抜けから植物を通り届く木漏れ日が象徴的な歩行空間を演出する。

エンマコオロギ

雨樋として穴の開いた管鋼を用いることで鳴き声を響かせ季節を知らせるだけでなく、人間の心を癒してくれるだろう。

●優秀賞

嶋谷勇希
Yuki SHIMATANI
石田・田野研究室
ISHIDA・TANO lab.

百貨都市
Department City

無個性都市のアイデンティティを確立する商業空間
The Department store establishing the identity in Non-Identity City

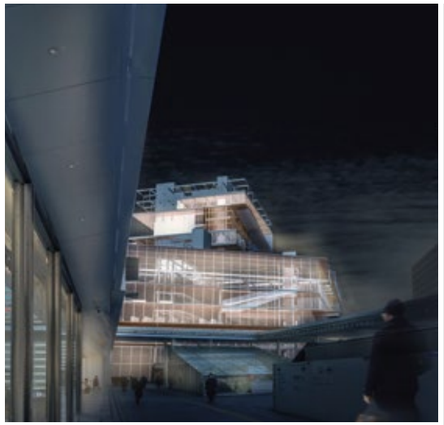
森山 都市の多様性を表現したいのに、スラブが立っているという点が、この建築と合っているのか疑問に思いました。

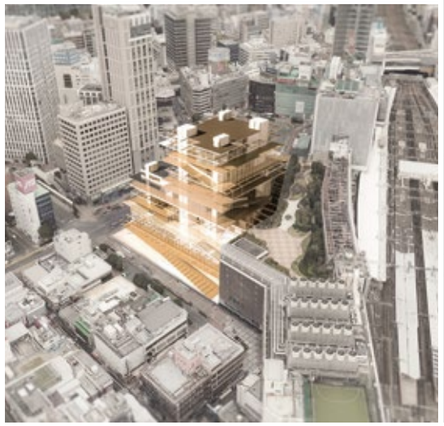
嶋谷 あえてスラブとしてのボリュームが立っていることで、ディストリクト内部のパブリックスペースの形状が際立つと考えています。

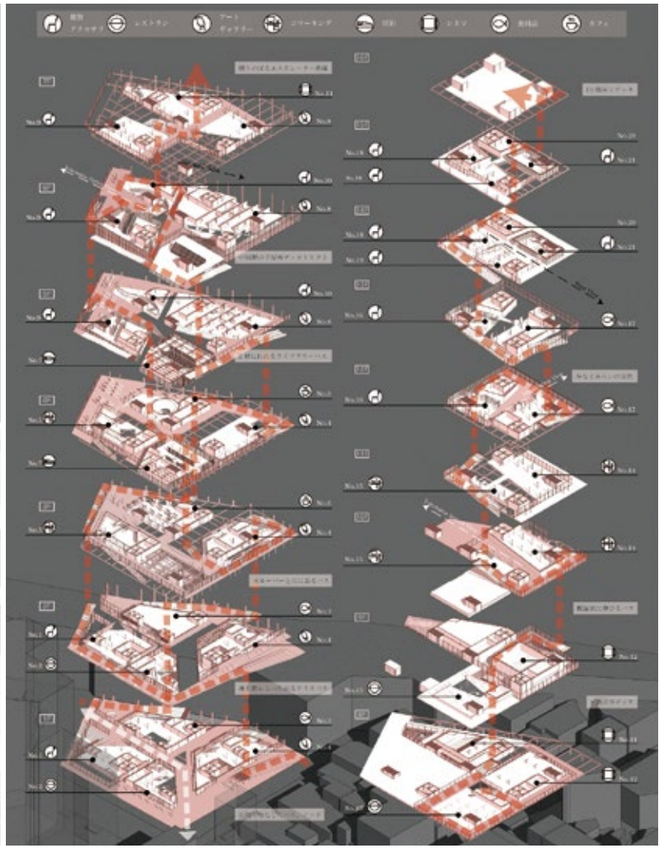
鈴木 建築の理論があって、まずはやってみようとしているのが野心的ですよね。ディストリクトとは、部屋となっているのですか。空間となっているのですか。

嶋谷 部屋のようにまとまりがある空間となっています。各ディストリクトは、外皮によってまとまりを持っています。

鈴木 町の中だと街区というのは歩いていればわかるが、建築の中であったときにこれを感じ取れるのか疑問に感じた。







●優秀賞

鈴木 碧衣
Aoi SUZUKI
山家・上野研究室
YAMAGA・UENO lab.

更衣する建築
Changing Architecture's clothes

クリエイターたちの集う裏原宿のアトリエ兼店舗の提案
Atelier and shop in Uraharajyuku for creators

六角 建築自体が服を着ているイメージが面白いです。商品をディスプレイする場所が環境を取り込む装置となっており、それがファッションとどう呼応していくかを表現しつつ、その装置が身体と関わろうとする試みをしているのが魅力的です。それらをどう可変化させていくかの仕組みがもう一つ入ると良かったです。

鈴木(丈) 時代に対応するという思いが面白いです。それが建築と本当は遠い存在にあるが、それを近づけようとする試みにパワーを感じました。

鈴木(碧) 衣服と建築がどう結びつくのかはスタディ段階で難しかったです。裏原宿は流行のスパンが３ヶ月で移り変わりますが、そこで建築が置いてけぼりにされている気がしました。

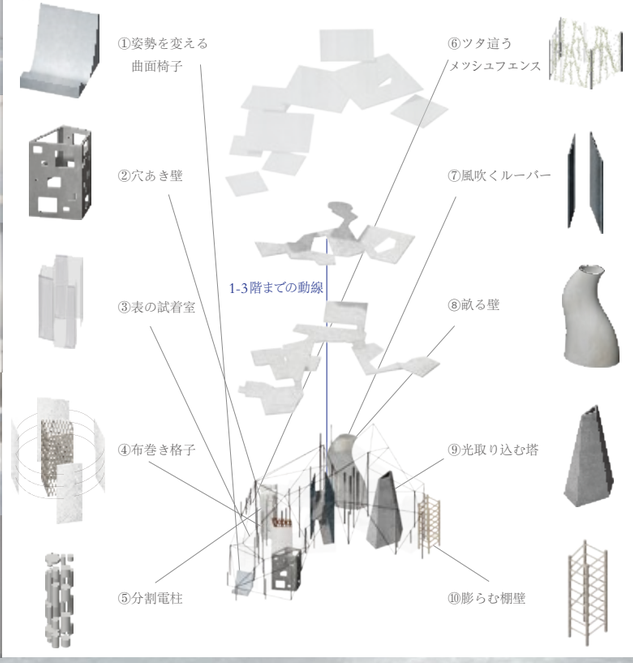
鈴木(丈) それは建築の本質的な部分であると思います。また、身体的なアイディアが新鮮ですが、もしかしたら身体的な部分が変わってないかもしれません。変わる部分と変わらない部分を明確化すると良かったです。

裏原宿における“変化する”要素

2つの手法によって建築の「着替え」を行うアトリエ兼店舗を提案する。ファッションクリエイターを筆頭に様々なクリエイターがアトリエで製作を行い、作品の販売・展示を行う。

①裏原宿の動的要素による変化
形態のレイヤーを通して、街で見つけた動的な要素を空間に落とし込むことで、訪れる度に知覚的に異なる空間体験をする事が可能となる。

形態構成



木板を取り付け、作業用ボードとして活用し、ポスターや図面なども建築の装飾として生きる。自由に落書きすることもできるので、黒板のような役割も持つ。日差しも遮り作業しやすい。

天井からもテクスチャを吊り下げることができる。簾を垂れ下げ、作業場に境界を作る。完全に仕切られず、簾を介して声や雰囲気を感じ取ることができる。

アトリエでは染めた布を吊るして乾かしたりする。作品制作過程を見ることができ、ギャラリーとなる。

●優秀賞

伊藤 伸一郎
Shinichiro ITO

中井研究室
NAKAI lab.

時間を内包する持続的デザイン手法を用いたリサイクル建材管理人の住宅
Recycling material manager's house with sustainable design

戦後住宅作品における空所の形態と手法からみた増改築の変遷
Composition and continuity of renovated houses by elements and blank space forms

六角 増築される時に下屋や庇といった部分やテラスなど外部に出る要素など、既存の建物とのつなぎで金属の透けるようなマテリアルがみられますが、パッチワーク的なマテリアルとして既存建物と増築された空間が内部とリンクされつつも外とつながるというのは効果として現れているんですか？

伊藤 マテリアルとして外につながることはそこまで考えていませんでしたが、周辺よりマテリアルが構成されるので環境とつながっていく可能性はあるかなと思います。

六角 そういった意味では、周辺の環境とひきあっているという部分があるのですね。そういったものが表現としてより見えてくるとよいですね。

東側住戸２Ｆテラス（左上）
東側家具倉庫前（左下）
東側倉庫内スロープ（右上）
東側植栽倉庫前（右下）
西側お祓い前倉庫

増改築は空いている所（以下、空所）に行われる。空所は住所や町の持続性にとって重要といえ、既存住宅に持続的に減築・増築を行い空所を含みこむ建築を提案する。リサイクル建材管理人の住宅は、町の空所と建物を再構築するための拠点となり、大磯町の持つ豊かな時間のコンテクストを紡いでいく。

●ディプロマ賞

髙田 晃
Kou TAKADA
内田・須崎研究室
UCHIDA・SUZAKI lab.

国登録有形文化財の登録抹消事例の実態に関する研究

Research about erase case of registrated tangible cultural propertis

—202例の抹消理由の分析—

- Analysis of reasons for 202 cases -

石田 今回調べるにあたり、所有者の部類はどのようにしたのですか？
個人の所有の文化財と企業の所有の文化財とで分けて調査はしなかったのですか？

髙田 今回調査した中には、個人所有、企業所有の文化財が混在していますが、特に分けてはいません。理由としては、個人所有の建物が多いことと、単に企業所有と言っても事業規模の小さな企業も多々あり、そのような観点で分けたとしても結果に大きな支障は無いと考えたためです。

曽我部 実際に維持管理が大変な実態を見ている中で、1万件に対して、200件というのは文化財登録制度は善戦しているという印象です。今後もより良い方向に持っていけるといいですね。

1．研究背景・目的

文化財登録制度は平成 8 年に制定された制度であり、築 50 年を経過した建造物を広く管理し、記録･活用を促すことを目的としている。また、それによって登録された文化財を登録有形文化財（以後単に「登録文化財」と記す）という [1]。令和 3 年 元日 現在 12,443 件が登録されている [2]。本制度の設立背景に、バブル期、開発により近現代建築が適切に評価される間もなく消失したことが挙げられる [3]。そのため、築 50 年を経過した建物を、文化財として昇華させ、価値を持たせることで文化財の消失を防ぐことを期待するものである。本制度の特色の一つとして、国宝や重要文化財とは異なる緩やかな規制が挙げられ、例として内部・外部 (1/4 以内に限る) の改装が自由に行える等、活用を促進する内容となっている [4]。そのメリットを活かし様々な用途に活用が行われ、文化財保護に役立っている。しかし、登録される文化財は管理の不備もあり時には抹消事例も発生平成 12 年に初めて文化財の解体により登録が抹消される例がみられ、その後もほぼ毎年一定の抹消事例が出ている [5]。抹消された登録文化財は文化庁の『解体等による登録抹消』としてリスト化されている。しかし、解体に至った理由は示されておらず、今後の文化財を保護していくための資料として情報の蓄積がなされていない。本研究では、抹消理由を明確にすることを目的とする。

2．研究方法

研究対象として、先述の文化庁公表資料に掲載された令和元年 12 月 5 日時点の末梢事例 202 棟を扱うこととした。なお本研究では、同一敷地内に「主屋」と「蔵」のように 2 棟以上の登録文化財が存在している事例に関して、抹消理由を語る上で差し支えないことから、便宜上 1 件とし、全 202 棟を全 118 件へ変換の上研究を進める。

次に、登録文化財の抹消に至った経緯を把握するため、各市町村に対し聞き取り調査を行った。方法として、電話による聞き取りの後、メール等の文書で確認を行った。補足資料として、所有者への聞き取りや新聞を用いた。その結果、全 118 件のうち 106 件の抹消理由を把握することができた。

解体された登録文化財の一例

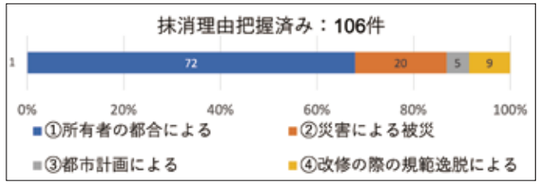
図1　室谷家住宅[5]（平成19年解体）
神戸市、昭和8年竣工ウィリアム･ヴォーリズによる設計。

図2　江崎べっ甲[6]（令和2年解体）
長崎市、明治31年竣工。

3．抹消理由の分類

調査の結果、抹消理由を把握できた 106 件に関して、以下の図表 1 の通り 4 つに分類した。抹消に影響した理由ごとに次の 4 つに大きく分類した。①「所有者の都合により解体された事例」：72 件、②「災害が引き金となり解体された事例」：20 件、③「都市計画により解体された事例」：5 件、④「改修の際に規範を逸脱した事例」：9 件

表1　抹消理由の内訳



次に、これらの事例ごとに内容を詳しくみていく。

4．所有者の都合で解体された事例

所有者の都合で解体された事例は、諸理由により建物の解体を行ったため、登録が抹消されたものである。解体に至った理由の内訳として、共通した要素を持つ事例ごとに以下 3 つに分類した。

①-A「土地売却・返却に伴って解体された事例」29 件は所有者が土地を売却・返却するために建物を解体した例である。売却等の動機として、所有企業の廃業に伴った事例が 8 件あった。

①-B「建物の維持が困難となった事例」34 件は、主にシロアリの食害や、一部分の崩壊が起きるなど、登録文化財が老朽化したために修繕を行わずに解体したものである。特に蔵や門、宗教建築など、居室ではない建物が多く、12 件ほどみられた。

①- C「所有者が文化財解体の上で土地活用を行った事例」9 件では、企業が、文化財解体の上建替えや新たな事業用地とした事例が 6 件ある一方、主屋等の重要な文化財を残しつつ付属建物を壊し、自身の目的と文化財の保全を両立している例が 3 件あった。

5．災害が引き金となり解体された事例

災害が引き金となった 20 件の事例は、抹消が避けがたいものといえる。ある例では、地震により構造に致命的な損傷を受けたが、組積造のために建築基準法上復原は不可能とされた。一方、調査の回答から、被災した文化財の中でも、損傷が比較的軽度であり、復原が可能であった事例は、少なくとも 5 件あると考えられた。それらは被災以外にも複合的な要因があるもので、同一敷地内の他文化財の補修に費用をまわすため取捨選択を行い、解体した事例や、所有者が恐怖を感じ、強く解体を希望した事例のほか、被災前から老朽化が進行していた事例。文化財を引き継ぐ人がいないため、今後使用しなくなると考えた事例等があり、被災をきっかけに所有者が解体に踏み切った様子がみられた。

6．都市計画により解体された事例

都市計画により解体された登録文化財の内訳は、道路拡幅工事により解体された事例 4 件、市町村主導の再開発によるもの 1 件である。道路拡幅による 3 件は、建物の評価額分しか出なかったため、築年数の古い登録文化財では移転費用を賄えなかったため解体を決断したことを確認した。

7．改修の際に規範を逸脱した事例

本項目に分類した事例は、改修を行った際に文化財の規範を逸脱したため、文化財とみなすことができないとされ、登録が抹消されたものである。つまり、抹消された現在も何らかの形で建物が残っている事例である。

しかし、実際に改修を行った際に、使えない部材が多くあり、過半以上の新材を用いた改修を行ったため、文化庁内の規定により抹消された。ほかに柱・梁を残した古民家改修の例や、改修の際に元のディテールとは異なった改修を行ったり、大きく減築を施したものもあった。

8．結びに代えて

令和元年 12 月 5 日時点の登録抹消事例 118 件のうち抹消経緯の把握できた 106 件を、抹消理由から 4 つのタイプに分けた。

それら 4 つのタイプの中で、所有者の事情による解体は 72 件、災害の影響による事例は 20 件、都市計画により解体された事例が 5 件、建物の改修・復原に伴い抹消された事例が 9 件あった。106 件のうち、所有者の都合により解体された事例が 72 件と 7 割近くを占めている。本項目に分類した文化財の解体理由は、経済的要因によるものが大きいといえる。土地の売却を行った事例を筆頭に、建物が維持困難となった事例でも、修繕を行えなかったために解体したといえる。また、このことは、登録文化財制度では、個人での建物の維持管理に限界があることを示しているといえる。この 2 つの事例を併せれば全体の 8 割を超えることから、従来の保存保護制度を補完する新たなシステムづくりを早急に普及させる必要があると考えられる。

9．謝辞

本論文を書くにあたりご協力いただいた、文化庁担当者、並びに全国の市町村文化財担当者に対し深く御礼申し上げます。

註 1）文化庁『登録有形文化財建造物制度の御案内』p2, 2020.3　2）文化庁「文化財指定等の件数」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/shitei.html
2021.1.1 閲覧　3) 堀 勇良（1999）「文化財登録制度の可能性」『歴史ある建物の活かし方』学芸出版社 4）文化庁「解体等による登録抹消」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/yukei_kenzobutsu/massho/kaitai.html2021.1.12 閲覧 5）文化庁『総覧登録有形文化財5000』2005,p113 より引用。6）5）に同じ。p137 より引用。

鈴木 丈晴
Takeharu SUZUKI

東京都生まれ
1998年 東京大学工学部建築学科卒業
2000年 同大学院修了(安藤忠雄研究室)
2000年～2010年 安藤忠雄建築研究所
2010年～ 京都造形芸術大学非常勤講師
2011年～ 芝浦工業大学非常勤講師
2012年 鈴木丈晴アトリエ一級建築士事務所設立
2013年～ 国士舘大学非常勤講師

主な受賞・選抜
1997年 アルカシア学生コンペ日本代表
1998年 青森県立美術館コンペ優秀賞
2001年 住宅のル・コルビュジエ展(安藤忠雄研究室)
2010年 空間デザインコンペティション入選
2011年 大阪市木津川遊歩道デザインコンペ優秀賞
2012 年 七ヶ浜中学校プロポーザル最終５案　等

2020年の神奈川大学卒業制作講評会に初めて参加しました。オンライン授業が続いていたこともあって、熱意ある模型が並ぶ姿はあらためていいなと感じました。卒業設計は、テーマ＋設計＋表現の総合だと思います。初見で見る側からすると、作品はまず表現として、次に設計、最後にテーマとして現れてきます。これは例えるなら３重の箱を外から見るような感覚です。外側の箱にあたる表現は、存在が気にならないくらい美しいと良いと思います。一番外側が見えないくらいクリアなら、作品は設計そのものであるように感じられます。同時に美しい表現は、作品にポジティブな雰囲気を与えます。この表現の雰囲気越しに見る設計は、制約（スケール・重力・機能・耐候性）と造形（空間・実体・要素）、巧みさ（秩序・コンセプト）によって組み立てられます。組み立てられた設計からは、さらに内側にあるテーマとの（物理的な建築は敷地との）相互作用によって意味が生まれます。設計が持つ意味の妥当性は、論理や記憶や価値観によって判断されます。そうした後に、作品が意味するものや意味すべきものを設計者に問います。この一連の作品との交流のどこかで、設計者の構想力の一撃が加わった時に、「驚き」が生まれます。楢原案は、「建築による都市の編集」の造形的に説得力あるシミュレーションでした。谷本案は、自然共生のテーマと脱人間中心主義との緊張感ある２面性があると思います。伊藤案は、複雑系を思わせる再帰的な設計・建設のループの中に、DIYの感覚があります。嶋谷案は建築でケヴィン・リンチの「都市のイメージ」を実現しようとする野心を感じます。鈴木案は建築に自己更新する都市のエネルギーを夢見ながら、身体との関わりを持つことが興味深いと思いました。

森山 ちはる
Chiharu MORIYAMA

東京都生まれ
2003年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
2005年 東京工業大学大学院理工学研究科建築工学科修了(坂本研究室)
2005年～2011年 伊東豊雄建築設計事務所
2012年～ 日本大学生産工学部建築学科デザインコース非常勤講師
2014年 アトリエHMC設立
2018年 森山ちはる建築設計事務所設立

建築作品
やまゆりそう、伊東豊雄　建築｜新しいリアル　展、
SUMIKAパビリオン by 東京ガス、La parque de la Gavia、
1°コンドミニアム、HOUSE　W、
国立台湾大学社会学部棟、まなびの森保育園　町屋、
ヤオコー川越美術館・三栖右嗣記念館　等

神奈川大学建築デザインコースの卒業設計にゲスト審査員として呼んで頂き初めて参加しました。さすが優秀作品講評会ともあってどの作品のパネルも模型もきちんと作りこまれ、発表全体から伝わってきたエネルギーは、誰もが特別な生活を強いられたこの一年間の不安を払拭してくれるものでした。後輩に手伝ってもらうことも難しかっただろうと想像すると、皆本当によく頑張ったと思います。

内容は、未来を展望する大きな開発プロジェクトがある一方で、近年日本の方向性を表すような既存敷地の状況を活かしながら少しずつ建築を行うプロジェクトまで、主題や規模も幅広く多様な提案があり、指導の過程において建築の多様な側面について深く学生たちと対話された先生方のご尽力を感じました。

評価された作品の共通点は、提案としての合理性と、各提案者の描く建築空間とが一体となった作品であった事です。良いとされている既視の概念や建築スタイルに完結せず、自身の身体性と客観性のある判断を頼りに設計を進められた証だと思います。

評価された複数の提案において何処かノスタルジックな様相が見られた点は不思議です。これは、私達審査員側が共感できる身体性の限界を示しているのかもしれませんが、一方で、これらの案が、提案者と共に更に進化できる伸び代を示していると思います。卒業設計は、大学課程での一つの結晶ではありますが、完成ではありません。学生の皆さんには、今後の建築家人生で、まだ見たことのないもの、自分だけに可能な建築デザインを、更に探究し創造を続けて頂きたいです。

六角 美瑠
Miru ROKKAKU

東京都生まれ
2001年 筑波大学芸術専門学群建築デザイン卒業
2003年 東京藝術大学建築科大学院修了
2003年 六角鬼丈計画工房(六角工房)所属
2005年～ 六角工房分室ミルアトリエ開設
2005年～2010年 東京大学工学系研究科博士課程在籍
2006年～2009年 東京藝術大学建築科教育研究助手
2014年 東京大学工学系研究科建築専攻博士号取得
2015年～2017年 東京大学先端科学技術研究センター特任助教
2017年～ 東京大学生産技術研究所特任助教
2018年～2020年 芝浦工業大学特任准教授
2021年～ 神奈川大学教授

建築作品
住宅ORU、住宅浅間観荘、広州大学城中心スタジアム 等

今年の卒制は、「このような都市風景が出現したらなかなか面白い！」と、とても痛快な感じを受けた。楢原さんのビルの間に櫓が組みこまれた情景は、まさに祭りの舞台が都市に埋め込まれたような感じで、日が落ちて燈が灯った情景を想像して思わずニヤッとしてしまった。嶋谷くんの都市風景の断片を一つの建物に再形成した案も構築のプロセスはとてもユニークだ。虫の観察や衣服のイメージから空間を発想し立ち上げた作品は、器としての空間に独創性があり、光や風などの環境が織り込まれ、シークエンスとしても魅力的に組み立てられていた。それらは模型を覗き込む度にさまざまな物語を想起させた。今年は伊藤くんの材料の再生からの再構築する提案や鈴木さんの布を扱った提案など、マテリアルを意識した作品も多く模型もリアルな素材表現のものが多くみられたことも面白く印象的であった。

修士論文は、より具体的な視点をテーマに、地域や住まいを活性化するようなアイデアをリアリティーのあるプログラムを想定し、建築提案として示している制作に共感を覚えた。向さんの「家開き」というテーマも、住宅地が表出したアクティビティーにより再生されていくような展開や仕掛けもなかなか効果的に感じられた。前田さんの「暮らしの環境的手法」の分析と、そのアイデアを既存施設と地域や活動に連関しながら設計した提案には、さまざまな創意工夫が織り込まれ、その斬新な生活スタイルに可能性を感じた。

総じて、卒制も修論もテーマ設定とそのストーリーに独創性が感じられ、個性的な建築表現として形に提示されていたことが良かったと思う。

内田 青蔵
Seizo UCHIDA

今年は、コロナ禍にあって卒業研究や卒業設計の指導が対面でなかなかできないというこれまでにない状況であった。そうした制約を受けた状況にも関わらず、それぞれが努力し、卒業論文や卒業設計を行い、その成果を着実にまとめ、発表を行ったことについては、評価したいと思う。そもそも発表の仕方に関しても、教員側も初めてのことで、臨機応変にその場その場で最善の方法を考え、行ったつもりである。学生たちの対応に感謝したいと思う。

さて、卒業研究を担当したひとりとして、その状況を振り返ると、やはり、建物調査の実施や関連情報を集めたり、また、関係者からヒアリングしたりといったことは、必要ながらも実行できなかった。そうした情報収集を他の方法で補うといったこともなかなか難しく、その意味では、学生も消化不良の状況にあったようにも思うし、このことは卒業設計においても同様であったように思う。

ただ、一方で、こうしたコロナ禍の中で、開き直り、この時期ゆえに考えるべき研究テーマや提案なども多数あったのではないかと思う。言い換えれば、世の中の当たり前の状況が突然変異し、生活を行いながら新しい生活様式に急遽変えざるを得ない現状を直視してほしかったと思う。制約を受けた生活を嘆くのは簡単だが、こうした状況の中でこそ行える意味ある研究テーマや新しいコンセプトがあったようにも思う。こうした現状を深く考え、あるいはまた、こうした状況を楽しむ研究や設計も見たかったように思う。

石田 敏明
Toshiaki ISHIDA

今年度はコロナ禍での研究と発表であった。1年間を通して研究が研究室で資料収集や対面での指導ができない中、ほとんどオンラインで行われたと推察でき、その成果について危惧されたが、その想いは払拭された。研究はテーマに沿って自己の内面と向き合い、逡巡しながら結論を導き論文として、また設計作品として、最終的にその成果を他者に向かって発表するものである。そう考えれば、皮肉にもこの1年間はむしろ自身で考える時間が増え、結果的には論理的にまとまりの良いものが多く、特に論文の出来は良かったと思う。

卒業設計に関しては、近年、環境問題や少子高齢化、空き家などの社会問題等々、比較的身近なテーマを扱った傾向が多く見られる中、日常的に流通しているモノから時間を媒介にしてまちとの接点を見出そうとしたもの、死者や昆虫の生態を通して異世界との接続を試みたもの、建築理論の再解釈や非日常的な空間を持ち込むことでのまちの活性化の提案などチャレンジ的で意欲的な作品が高い評価できた。ディプロマ賞を獲得した「花で包み込む都市」は一見するとテーマパーク的でありキワモノであるが、均質的な都市空間を異物を挿入することで異化作用を起こそうとした試みは評価していい。オンラインから対面での模型を使ったプレゼンテーションは説得力があり、改めて模型力を認識した。論文では国登録有形文化財の抹消事例の研究や茶室の開口部に関する研究が収集資料に裏付けられた考察は興味深く、高く評価できた。一方、修士研究ではフィールド調査、文献調査から得られた情報を分析し、それを根拠に作品として表現している。

都市や日常的な出来事から行為を誘発しようとする着眼点は評価できるが、提案と場所の関係にもっと深く切り込んだ方が良かったと思う。全体的に網羅的な印象があり、力強さや熱っぽさがやや伝わってこなかったのは、今後の課題であろうか。

修士論文では、竹腰健造の研究や防災建築街区の外形の研究は時間をかけて、資料収集と丁寧な分析を行った成果として高く評価できる。社会進出する前のこうした経験を契機に、諸君の新しい視点での建築的取り組みと活躍に期待したい。

山家 京子
Kyoko YAMAGA

2020年度はZoomに明け暮れた1年だった。授業とともに、卒業研究、修士論文の指導も前期を中心にほとんどZoomで行った。本来、研究指導は対面が望ましく、Zoomはその代替手段といった感じが強い。建築デザイン教育においてよく指摘されるように、スケール感や模型を手に取りながらのチェックができないこともちろん大きいのだが、ああでもないこうでもないといった、一見無駄に思えるやりとりができないのが意外と辛かった。そうしたやり取りはその場の空気を共有して初めて成立するものなのかもしれない。一方、画面共有でのチェックは、学生に考えをまとめて表現させる利点もあり、それはよかったように思う。

また、卒業研究等の発表会もおおかたZoomで行われた。デザインコースでは、卒業設計本審査会、卒業論文と修士論文の発表会がZoom、優秀卒業設計発表会は発表者1名と教員の対面＋Zoomで行われた。本審査会で課した動画による発表は、ライブ感には欠けたものの、意図がコンパクトに伝えられる良い方法だと感じた。

さて、このような形式は卒業研究のテーマや精度、あるいは優秀作品の選考に何か影響を及ぼしたのだろうか。内容に関しては、例年と比べて遜色ない仕上がりだったように思う。ただ、選考にあたっては、例年に比べて模型よりプレゼンテーションボードの出来に左右されたところはあったかもしれない。

学生にとっては、Zoomを介してのやり取り云々よりも、年間を通して自由に製図室を使用できる環境、後輩たちとの共同作業がなかったのが一番辛かったはずである。

最後に、個人的に気になった卒業設計として、谷本さんの「人間のためでもある建築」を挙げておく。何と言ってもタイトルが良い。本人の意図は「地域に生息する生物のための建築が、人間のためでもある」ことなのだが、「人間のためでもある」は、AIを巡る議論から提示され、構造主義やハラリの言説を思い起こさせる「人間至上主義への疑義に通じる言葉でもある」。

曽我部 昌史
Masashi SOGABE

突然のコロナ禍で、初期の指導から講評会までがオンラインとなった異例の年度である。実物のスケッチや模型を元にスケール感を把握しながらのやり取りができないところが歯痒くもあったが、具体的な設計方針が絞られてからは想像以上にスムーズかつ密度のあるエスキスチェックが進められたように思う。いろいろと制限されたなかでの、敷地や事例の調査にはこれまでとは異なる工夫が必要だったと思われるが、そうした調査が不足していると感じられたものは多くなかった。

いつもポスターセッションで行っている卒業設計本審査は、教員たちが製図室に集まり、実物の図面をみながら行った。学生たちの発表と講評はオンラインである。オンラインでの指導の関係からか、全体的にまとまりのある提案が揃ったように思う。例年よりも底上げされた。一方で、圧倒的なエネルギーが溢れるような特出したものもなかった。これは、ここ数年の傾向である。優秀作品講評会では、発表者と審査員が製図室に集まり、模型などを前にして進めた。2021度より着任される常勤、非常勤の先生方にゲスト審査員として参加していただいたが、評価できるところを丁寧に読み解きながらのコメントが多く、学生たちにはこの先の自信につながる場面も多かったのではないだろうか。個人的にも学ぶところが少なくなかった。

修士論文発表会は優秀作品講評会と同様の形式で進めた。関心の方向や提案のタイプが、例年よりも多様であったように思う。学校で互いの提案を目にすることがなく、影響を受けにくかったのかもしれない。それぞれの関心が深められていた。ほとんどの提案が、リノベーションやリノベーションを含む計画だったり、既存の敷地の状況を前提とした改変の計画だった。昨今の社会状況を反映しているともいえる。中には、既存の建物や街の様子についての調査検討が表層的な水準で留まっているものもみられた。コロナ禍による制限が影響したのかもしれないが、既存の建物や環境の生かし方では、より踏み込んだ発想が必要である。

中井 邦夫
Kunio NAKAI

コロナ禍の影響で、建築学科のいわば伝統文化ともいえる、後輩たちを巻き込んでの総力戦もできないなか、学生たちは例年と比べても遜色ない成果を挙げたと思う。また昨年度までに比べると、プログラムに頼りすぎることなく建築自体の魅力への関心や思考の萌芽を感じた。以下では、本誌で紹介されているもの以外で個人的に印象に残ったものについて触れておく。

①卒業設計…井口：丁寧な設計には好感をもった。もう少し大きな建築的構想が欲しい気がした。金原：木造架構の模型は美しかった。スケールがもう少しコントロールされていてもよかった。坂木：木造架構や内部空間のデザインには構成力を感じた。宿泊スペースにもう少し丁寧な配慮があってもいい気はした。林眞太朗：時間軸を設計に導入するチャレンジは評価できる。もう少し展開が欲しい気がした。山﨑：高齢者と子供の居場所をフラットなスラブとらせん状空間との絡み合いで構成した点は興味深かった。城所：切妻屋根のヴァリエーションで様々な空間を創り出す手法は巧み。全体のもう少し大きなストーリーがあれば。林淳平：地形のような独特な造形にこだわりと思いを感じた。もっと過激でいいと感じた。

②卒業論文…今年は歴史系の内田・須崎研6編のほか、中井研1編（他、設計B梗概3編）のみで、もう少しバラエティがあるとよいと思った。林幹太：銭湯建築の外観、山田：伊勢佐木町通の街並み、村上：こま参道の研究が印象に残った。

③修士論文…飯田：寺院を活用した博物館、下山：竹腰健造の聖心女子大キャンパス、鈴木：内神田のビルに関する研究、制作が興味深かった。

卒業論文

旧　横須賀海仁会病院の現存図面資料を竣工時の平面計画について	伊賀 一旗
横浜の震災復興における外国人向け事業について	岡田 僚斗
明治期から関東大震災までの伊勢佐木町通の街並みに関する考察 －絵葉書を主資料として－	山田 尚
山間の斜面地における商店街の空間構成 －伊勢原市大山こま参道を例として－	村上 麻衣
★ 国登録有形文化財の登録抹消事例の実態に関する研究 －202例の抹消理由の分析－	髙田 晃
関東に現存する銭湯建築の外観についての一考察 －関東大震災後にみられる宮造りと破風の関係－	林 幹太
国宝・重要文化財の茶室からみる開口部に関する考察 －連子・下地窓の縦横比と設けられる位置に関して－	吉田 梨々香

卒業設計［設計A］

South Meeting Point ～センター南の新しい商業施設設計の提案～	菅沼 真広
断絶する美徳 －情報都市渋谷におけるアートセンターの提案－	秋山 慧太
○ 紡ぐためのいろは －山谷いろは商店街における地域包括拠点の提案－	井口 翔太
地域とつながる －地域コミュニティ活性化を促す複合施設の提案－	稲場 悠大
連なる空間 －住民と商店街が改めて川と関わる空間－	鵜沢 尚史
人と町を繋ぐ宿	大島 拓実
○ 空箱 －カラーばこ－ －廃校舎活用による地域複合施設の提案－	桶谷 彩乃
祈りの形 －三春台地域を例とする教会の新しい祈りの提案－	小澤 美月
歴史を繋ぐ働きの場 －コロナによるオンライン化を活かしたオフィスを主とする新しい郊外の在り方－	木嶌 崚貴
地域をつなぐ拠り所 －地域市民の居場所として機能し、交流を促す施設の提案－	北見 明寛
○ あふれる広場、つながる畑 －生産緑地における6次産業を通した多世代交流の場の提案－	金原 佳佑
みちに溢れる －商店街の裏側空間で考える暮らしの場－	日下 紗菜
風景と生活をつなぐ －綱島の3つの地域性に着目した土手沿いにある建築の提案－	酒井 優人
○ 連続する場 －鎌倉の観光拠点となるゲストハウスの提案－	坂木 真一郎
心の拠り所 －神社周辺の環境を生かした自然に溶け込む地域交流施設の提案－	菅野 麻衣子
◎ 更衣する建築 －クリエイターたちの集う裏原宿のアトリエ兼店舗の提案－	鈴木 碧衣
ヨウヘキと対話するイエ －ヨウヘキを彩る住宅の思考と融和－	平 遼太
つながりの宿 －宿の機能を分断させた回遊性のある宿の提案－	高柳 勇斗
○ 第二の人生を謳歌できるまち －善行団地における高齢者を中心とした生活圏の提案－	立田 大喜
連なる屋根 －沼津駅から三島駅間の高架下活用の提案－	中山 統太
Empathize with Others －祝祭を生む都市の興行空間の提案－	長林 能樹
○ 生残る痕跡 －品川浦に残る増改築の形態を継承した溜まり場の提案－	林 眞太朗
○ 多世代交流を促す集合住宅 知識の道	福士 詩織
自然交流再生計画 －ランドスケープと癒しと賑わいの創出－	二見 陸
循環と構築 －食を通じたライフスタイルをテーマとする地域社会モデルの提案－	松村 美里
人柄を映すシェア空間 －ご近所付き合いを生む集合住宅の提案－	三谷 隆介
子供の夢を守る集合住宅	連 金航
自然と日常を繋ぐ橋 －世代を超えた親水空間の提案－	飯塚 ちひろ
○ 死者との対話 －都心における墓地空間とランドスケープの提案－	石谷 慶
まちのなかのこどもたち －幼児教育の拠点となるこども園の提案－	上澤 佑太郎
段差で作るマチの居間 －商店街に住み、商店街の一部となり得る暮らし方の提案－	遠藤 麻理奈
○ 気づきの小屋 －神奈川県秦野市でのハイキングコースと休憩所の提案－	城所 真緒
Camp In Village －広がる知識と繋がりの輪－	草間 稜太
壅塞の森の開放 －瀬谷市民の森における森の道と活動拠点の提案－	小玉 裕佑
癒しの場 －江ノ島における宿泊施設の提案－	今野 翔也
山と建築 －高尾山復興計画－	酒井 隆也
のぼりぐち －駅前開発を通じた景観形成型建築の提案－	佐藤 滉起
◎ 百貨都市 －無個性都市におけるアイデンティティを確立する商業空間－	嶋谷 勇希
長期的かつ新たなコミュニティのきっかけ －土地に価値を感じる空間の再思考－	鈴木 力
壁を超えた新たな関係の構築 －横田基地から考える境界線都市－	髙橋 菖
◎ 人間のためでもある建築 －生物多様性の再編を軸とした建築と人とのふるまいの再構築－	谷本 優斗
垣間見 －9世帯が暮らすシェアハウス－	塚田 乃ノ子

★ディプロマ賞　◎優秀賞　○卒業設計優秀作品発表会発表者

卒業設計［設計A］

モビリティがつくる人の輪 ー趣味を共有する場を持つ図書館の提案ー	土肥 燎平
共遊のサードプレイス ー保護者と子供を拠点とする公園施設とランドスケープの提案ー	半井 雄汰
★花で包み込む都市 ーかつての花街の賑わいを現存の都市へと再構築ー	楢原 杏奈
まちを繋ぐ ー中山駅舎および駅前広場の再構築ー	丹羽 航平
○まちの書架を持つ有機的集合住宅	林 淳平
石造建築との調和 ー那須塩原市における商業施設の提案ー	人見 凌
吹き抜けでつながる ーあざみ野駅におけるサードプレイスの提案ー	藤川 京
曖昧な境界 ー郊外住宅地における軒下空間を利用した宅地計画と住宅群の提案ー	山崎 伽菜
交流の誕生 ー出会いを生み出すコミュニティ施設の提案ー	若林 瑶将

卒業設計［設計B］

◎時間を内包する持続的デザイン手法を用いたリサイクル建材管理人の住宅 ー戦後住宅作品における空所の形態と手法からみた増改築の変遷ー	伊藤 伸一郎
銀座の建物における立面構成	中澤 実那
○子供が巡る高齢者住宅 内外空間と立面の開口部からみた住宅の開放性	山崎 優衣

設計A: 建築物あるいは都市計画など、各自の独自の視点による設計。テーマを各自が自由に設定。

設計B: 都市計画・開発計画などについての計画書、または建築や都市に関する特定のテーマについての調査分析報告、および設計図面の作成。

★ディプロマ賞　◎優秀賞　○卒業設計優秀作品発表会発表者

学部設計課題 優秀作品

建築デザインⅢ
建築デザインⅡ
建築デザインⅠ
設計製図Ⅱ
設計製図Ⅰ

非常勤講師

鈴木 信弘
Nobuhiro SUZUKI
鈴木アトリエ一級建築士事務所

川辺 直哉
Naoya KAWABE
川辺直哉建築設計事務所

岡村 晶義
Akiyoshi OKAMURA
一級建築士事務所アトリエ鯨

井原 佳代
Kayo IHARA
ihrmk一級建築士事務所

木島 千嘉
Chika KIJIMA
木島千嘉建築設計事務所

佐々木 龍郎
Tatsuro SASAKI
佐々木設計事務所

アリソン 理恵
Rie ALLISON
ara

八島 正年
Masatoshi YASHIMA
八島建築設計事務所

渡瀬 正記
Masanori WATASE
一級建築士事務所設計室

担当

曽我部 昌史（教授）、吉岡 寛之（助教）、岡村 晶義（非常勤講師、アトリエ鯨）、
佐々木 龍郎（非常勤講師、佐々木設計事務所）、渡瀬 正記（非常勤講師、設計室）
Masashi SOGABE (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant professor), Akiyoshi OKAMURA (Guest Lecturer, Atelier KUJIRA), Tatsuro SASAKI (Guest Lecturer, SASAKI ARCHITECTS & ASSOCIATES), Masanori WATASE (Guest Lecturer, an office)

加藤 佑規（M1、TA）、坂本 理久（M1、TA）、井口 翔太（B4、SA）、谷本 優斗（B4、SA）、林 淳平（B4、SA）
Yuki KATO (M1, Teaching Assistant), Riku SAKAMOTO (M1, Teaching Assistant), Shota IGUCHI (B4,Student Assistant), Yuto TANIMOTO (B4,Student Assistant), Junpei HAYASHI (B4,Student Assistant)

第一課題　30人が暮らし30人が泊まれる、この先の暮らしの場

共に暮らすことで自分の好みにあった豊かな時間が生み出される、そういう住空間を提案すること。

この建物は、住まいの場所とこの場所での暮らしを特徴付けるサービスの場所とで構成され、住まいの場所は、賃貸住宅部分と宿泊施設部分にわけられる。共通のライフスタイルや必要とするサービスにより特徴付けられる 30 人の住まいがあり、その暮らしに関連した共用スペースやサービス系施設が特有の雰囲気を生み出し、その雰囲気が宿泊客や地域の人たちにアピールする。単に、賃貸住宅、宿泊施設、サービス関連施設とが固まってあるものではなく、それぞれが有機的に関係を持つことで、何らかの特徴的な雰囲気を備えた居場所が生み出されるような計画を構想しなければならない。

関内・関外エリアにおいて、歴史的背景や現状の周辺状況についての調査をもとに敷地を選定し、計画を行うこと。

※ 参考敷地（敷地は関内エリアから自由に選定する）

【設計条件】
- 敷地：神奈川県横浜市中区太田町5丁目
- 用途地域：商業地域
- 敷地面積：約1,034.3㎡
- 延床面積：3,500㎡～4,500㎡（地下を設ける場合は1層まで）
- 道路斜線制限、高さ制限は厳守

第二課題　街のインフォメーションセンター

地域に暮らす人たちの居場所（地域の居場所）と、観光などで訪れる人たちの拠点的な場（来訪者の拠点）のコンプレックスである。「地域の居場所」では、地域調査をもとに課題や需要を抽出した上で、どのような場をつくるかを各人が構想すること。この先の公民館のあるべき姿を考えることにもなるだろう。「来訪者の拠点」はいわば観光案内所だが、事例調査などをもとに今日的な役割を踏まえながら用途をまとめる必要がある。「地域の居場所」と「来訪者の拠点」が単に併設されているのではなく、相互補完的に計画することで、より多様で豊かな活動の受け皿となるよう検討し提案にまとめること。

敷地は、地下鉄駅、船着場、幹線道路に面する交通の結節点にある。それらとの関係を動線として解きながら、建物内のいろいろな場とのつながりかたを検討する必要がある。利用者、時間帯などにも意識をしながらまとめる必要がある。

【設計条件】
- 敷地：東京都江東区清澄3丁目
- 用途地域：準工業地域、商業地域
- 敷地面積：約2,500㎡
- 延床面積：4,000㎡～6,000㎡（地上部分は3層以上とする）
- 地下階を設け、地下鉄駅とつなぐこと

非常勤講師　経歴

岡村 晶義
Akiyoshi　OKAMURA

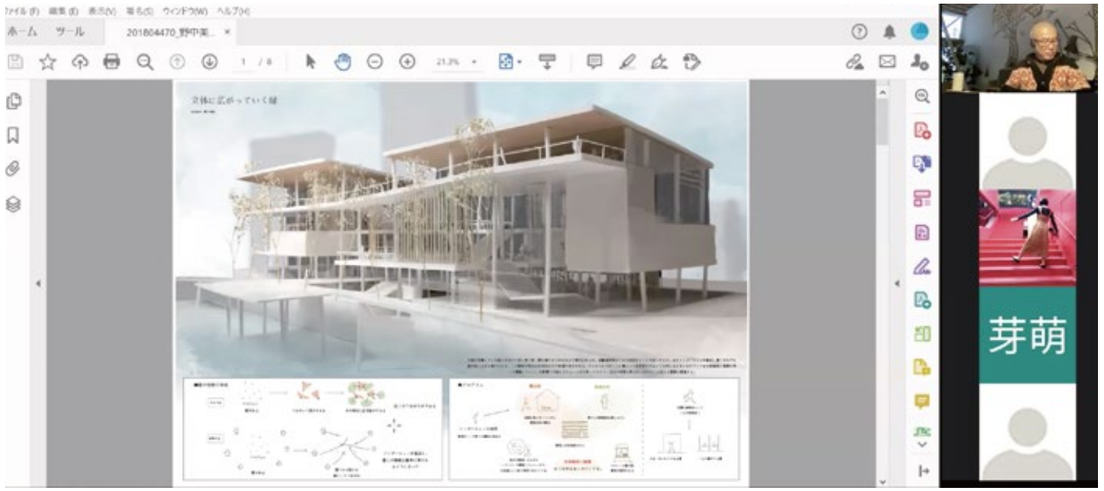
1954年生まれ、早稲田大学産業技術専修学校（現早稲田大学芸術学校）卒業、teamzooアトリエモビル及び象設計集団を経て独立、アトリエ鯨を設立、東京理科大学非常勤講師及び法政大学兼任講師を経て現在に至る。日本建築学会作品選奨、土木学会デザイン賞など受賞

佐々木 龍郎
Tatsuro　SASAKI

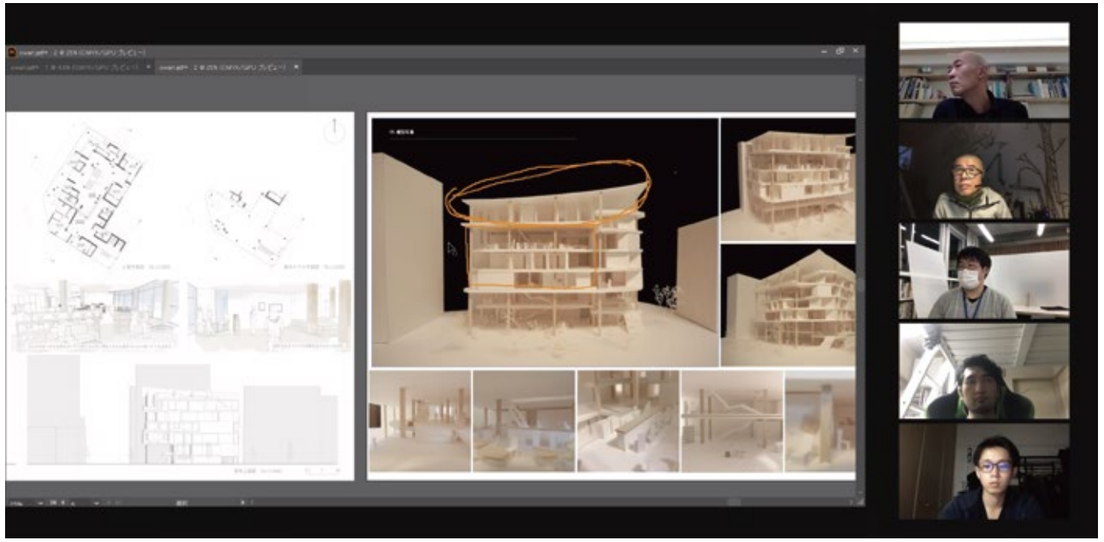
1964年生まれ、1987年東京都立大学工学部建築学科卒業、1989年同大学院修士課程修了、工学修士、1992年同博士課程単位取得満期退学、1992年(株)デザインスタジオ建築設計室、1994年株式会社佐々木設計事務所入社、現在同代表取締役

渡瀬 正記
Masanori　WATASE

1968年生まれ、1992年東京工業大学工学部建築学科卒業、1992年妹島和世建築設計事務所勤務、1993年～1997年青木淳建築計画事務所勤務、1998年一級建築士事務所設計室設立



zoomで画面共有を用いた発表



共有画面にコメントをつけるなどをしたエスキスの様子

野中 美奈
Mina NONAKA

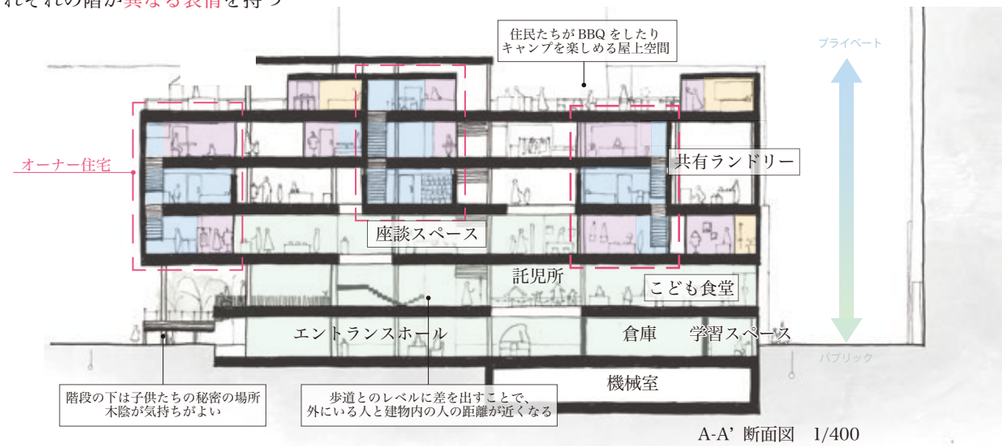
上下に移りゆく暮らし
Living that moves up and down

住民の暮らしが溢れだす屋上

住民の暮らしが詰まった共有キッチン

十人十色のお店が広がる共有空間

それぞれの階が異なる表情を持つ



A-A' 断面図 1/400

30人が暮らし30人が泊まれる、この先の暮らしの場

宮島 里帆
Riho MIYAJIMA

はじまりのきっかけ
The trigger for the beginning

旅が好きな人たちと、旅の自慢話と旅行雑誌にかこまれてあたらしい体験のはじまりとなる旅のきっかけ探し。

次の旅やコミュニティが広がっていく、はじまりのきっかけを見つける場所をめざした。

それぞれの暮らし方

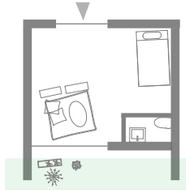
住民 01

普段は会社員。
年数回の長期休暇で旅行に行くのが好き。

入り口のガラス張りの外リビング空間が気軽な交流を生む

住民 02

どこでも仕事ができるため頻繁に旅行に
出かけ、家を空けることが多い。

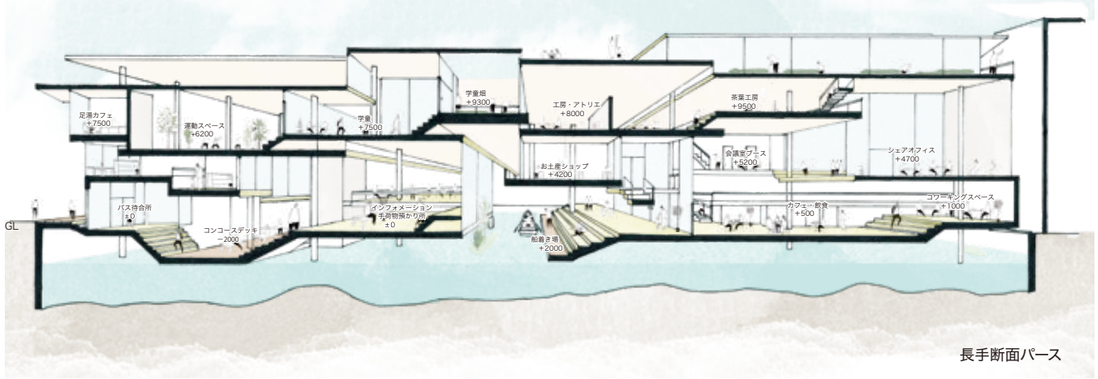


最低限の広さの居室と共用の外テラスがちょうどいい空間になる

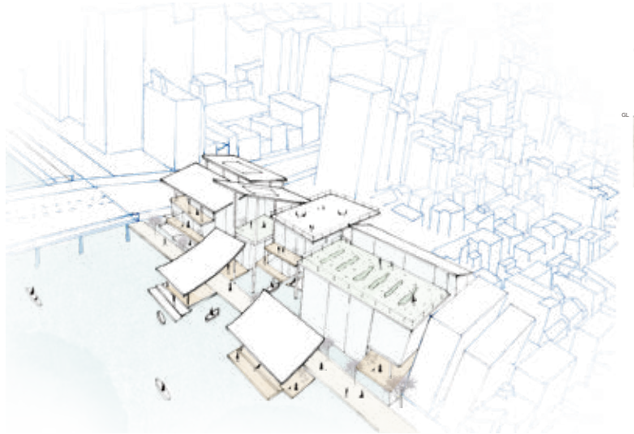
伊東 珠見
Tamami ITO

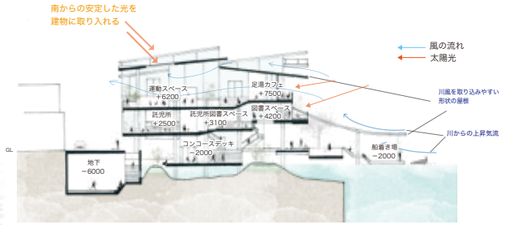
川風が抜ける
The river breeze comes out

清澄白河の街には様々な目的を持った人が入り混じり、豊かな水資源と落ち着いた風土に包まれている。
様々な目的の人々が新たなつながりを自然に持てるように導き、街のシンボルでもある小名木川の川風を緑化された施設に取り入れ、
更に清澄白河の街に流れていく、自然も人も拠点となる施設を提案する。



長手断面パース



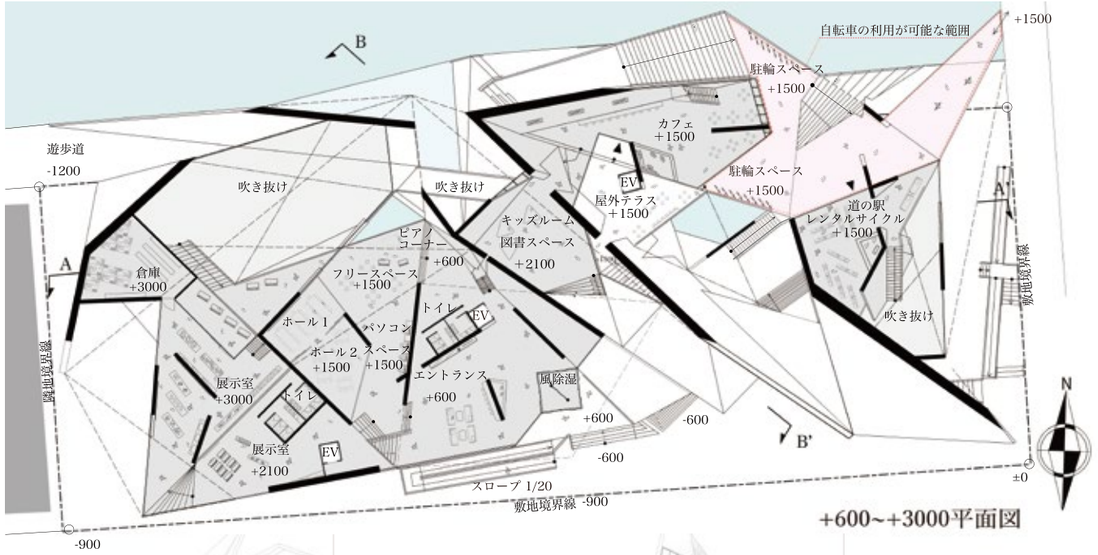


短手断面図

船着き場パース

穂屋下 直輝
Naoki HOYASHITA

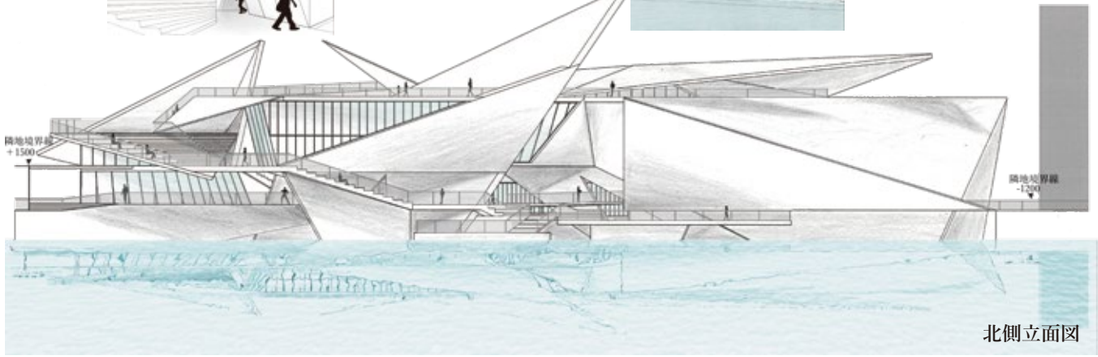
垣間見える表裏
Get a brief glimpse of front and back



+600~+3000平面図

駐輪スペースを建築内部に設けることで自転車利用者を建築内に引き込む。

川に面するスラブはGL-2400でこの川の最大水位は-2200になるため、水位が高い時は子供の遊び場や休憩スペースとして使用できる。



北側立面図

担当

石田 敏明（教授）、曽我部 昌史（教授）、田野 耕平（助教）、
木島 千嘉（非常勤講師、木島千嘉建築設計事務所）、八島 正年（非常勤講師、八島建築設計事務所）
Toshiaki ISHIDA (Professor), Masashi SOGABE (Professor), Kohei TANO (Assistant Professor),
Chika KIJIMA (Guest Lecturer, Kijima architect and associates), Masatoshi YASHIMA (Guest Lecturer, Yashima architect and associates)

古城 偉央理（M1、TA）、山本 麻貴（M1、TA）、石谷 慶（B4、SA）、嶋谷 勇希（B4、SA）、桶谷 彩乃（B4、SA）
Iori KOJO (M1, Teaching Assistant), Maki YAMAMOTO (M1, Teaching Assistant), Kei ISHITANI (B4, Student Assistant),
Yuki SHIMATANI (B4, Student Assistant), Ayano OKETANI (B4, Student Assistant)

第一課題　斜面地を生かしたポケットパークとレストハウスの設計

敷地は白楽駅前西口にあるドトールコーヒーと静岡銀行のある場所である。現在は平坦地に造成されているが元々は東南の斜面地であった。敷地形状を元の斜面地に戻し、駅前のポケットパークとレストハウスを設計せよ。駅前という場所性や、背後にある住宅地や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを提案すること。

【設計条件】
- 敷地：神奈川県横浜市神奈川区白楽124
- 用途地域：商業地域
- 敷地面積：約855㎡
- 道路斜線制限、高さ制限は厳守

第二課題　六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

白楽駅前に広場と一体となった積層型のシネマコンプレックスの計画である。渋谷のシネマライズ閉館に代表されるようにミニシアターは徐々にその姿を消しつつあり、映画を鑑賞する環境や映画鑑賞前後の空間体験は均質化しつつある。本課題では気持ちの高まりや余韻を受け止める空間を計画すること。駅前の場所性や商店街との補完関係を考慮し、計画する建築が地域にとってどのような役割を果たすことができるのかを広場を含めて積極的に提案すること。また周辺環境（計画地北側には集合住宅がある）にも十分に配慮すること。地域の核となる建築のデザインを要求している。

【設計条件】
- 敷地：神奈川県横浜市神奈川区白楽124
- 用途地域：商業地域
- 敷地面積：約855㎡
- 延床面積：1,800㎡～2,200㎡（地下を設ける場合は2層まで）
- 道路斜線制限、高さ制限は厳守

非常勤講師　経歴

木島 千嘉
Chika KIJIMA

1966年生まれ、1989年早稲田大学理工学部建築学科卒業、1991年東京工業大学大学院修士課程修了、1991年(株)日建設計入社、1999年O.F.D.A associates所属、2001年木島千嘉建築設計事務所設立

八島 正年
Masatoshi YASHIMA

1968年生まれ、1993年東京藝術大学美術学部建築科卒業、1995年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了、1998年八島正年＋高瀬夕子建築設計事務所共同設立、2002年八島建築設計事務所に改称

並木 友香
Yuka NAMIKI

屋根が生み出すアクティビティ
Activities created by the roof

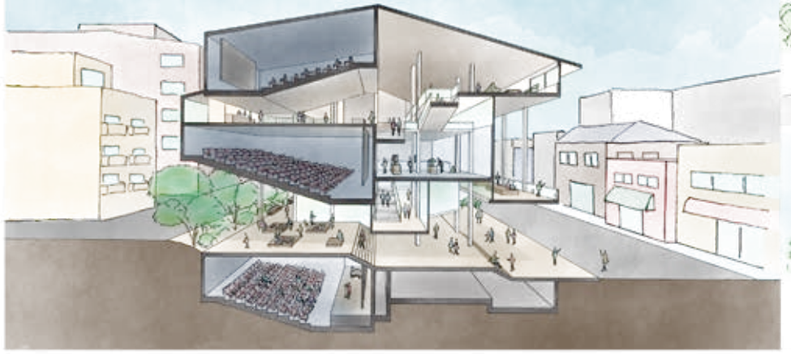
堀内 葉菜
Hana HORIUCHI

傘を重ねて
Umbrellas on top of each other

兼田 聖人
Masato KANEDA

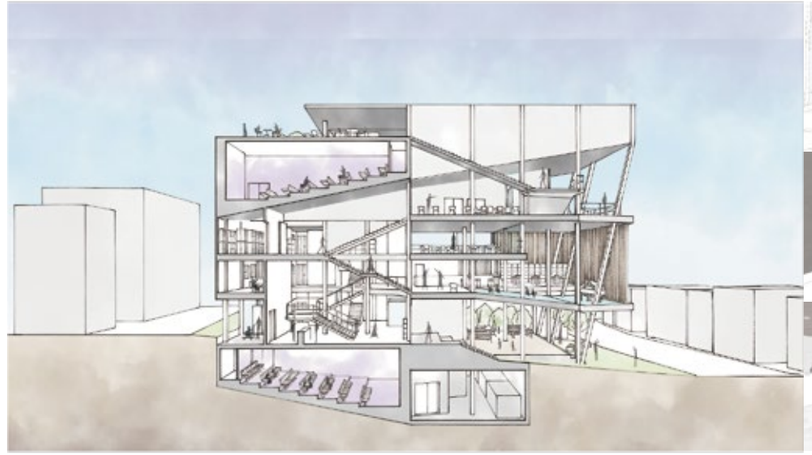
余韻
Afterglow

非日常的な空間。
それは多くの人にとっての娯楽となりうる場。
完結せずに残る風情や味わいを感じる、「余韻」を楽しむシネマコンプレックスの提案。



町山 李桜
Rio MACHIYAMA

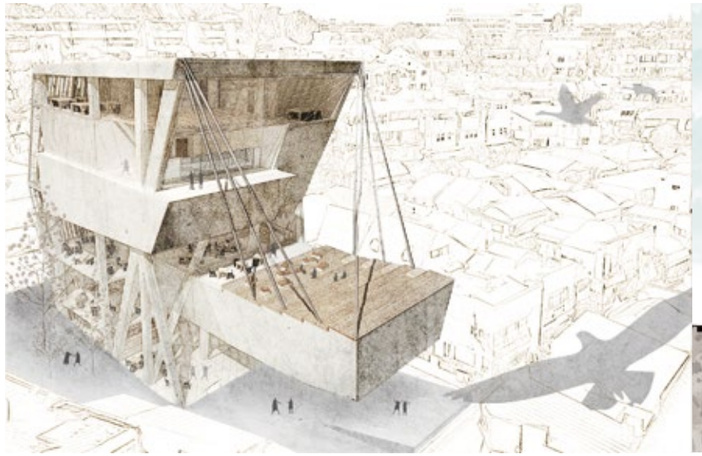
街を架ける
To become a bridge in the town

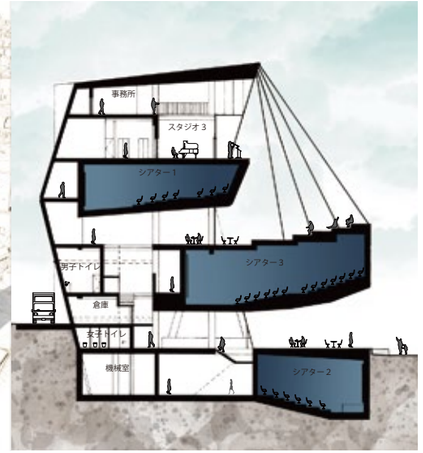


六角橋ミニシアターコンプレックスと広場

西村 和将
Kazumasa NISHIMURA

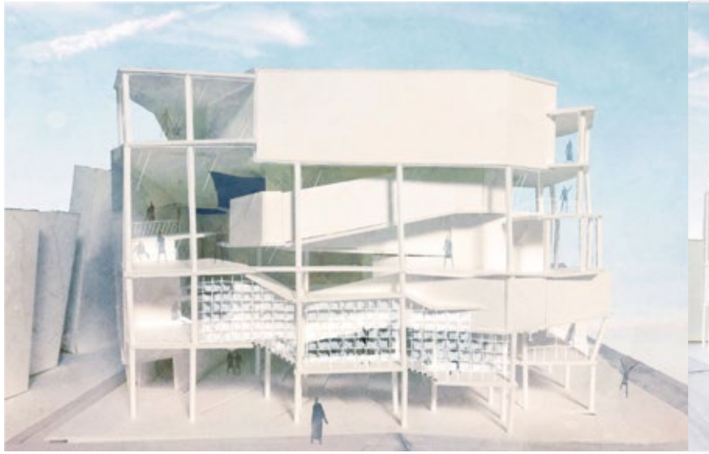
浮遊し繋がり、感じる非日常
Floating, connecting and feeling extraordinary





石井 瞭亮
Ryosuke ISHII

さかのぼる螺旋
Spiral "going back" and "climbing hill"



担当

山家 京子（教授）、石田 敏明（教授）、吉岡 寛之（助教）、 田野 耕平（助教）、
アリソン 理恵（非常勤講師、ara）、川辺 直哉（非常勤講師、川辺直哉建築設計事務所）

Kyoko YAMAGA (Professor), Toshiaki ISHIDA (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Kohei TANO (Assistant Professor), Rie ALLISON (Guest Lecturer, ara), Naoya KAWABE (Guest Lecturer, NAOYA KAWABE ARCHITECTS)

古城 偉央理（M1、TA）、徳山 碩峰（M1、TA）、三浦 悠介（M1、TA）、山本 麻貴（M1、TA）鈴木 碧衣（B4、SA）、林 眞太朗（B4、SA）

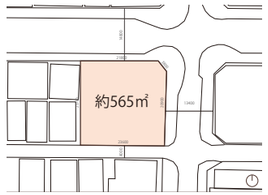
Iori KOJO (M1, Teaching Assistant), Hiromine TOKUYAMA (M1, Teaching Assistant), Yusuke MIURA (M1, Teaching Assistant), Maki YAMAMOTO (M1, Teaching Assistant), Aoi SUZUKI (B4, Student Assistant), Shintaro HAYASHI (B4, Student Assistant)

第一課題　関内に建つオフィス

横浜市関内地区にオフィスを計画せよ。

近年、まちに開く建築が話題となっています。住宅の一部を交流の場やまちかど図書室とする「住み開き」、集合住宅の共用施設を居住者だけでなく地域にも開放する、小学校に地域施設を併設する、など。これらはこれまでコミュニティ施設が担ってきた機能を、それ以外の施設が地域と部分的にシェアすることで、自らの機能をより充実させるものです。コミュニティ活性化を図るとともに、それぞれの生活の豊かさにもつながる方向性と言えます。

一方、オフィスはセキュリティの観点から、入り口にゲートを設けるなど、どちらかというと閉じていく傾向にあります。しかし、オフィスもまた開くことによって、イノベーションを起こすことが期待されています。ここでは、空間的にもプログラム的にも、社会、地域に対して開かれたオフィスの提案を求めます。



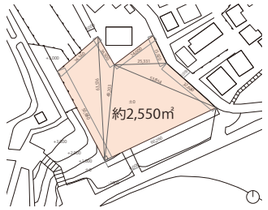
【設計条件】
- 敷地：神奈川県横浜市中区住吉町3丁目
- 敷地面積：約565㎡
- 建ぺい率：80%
- 容積率：700%

第二課題　公園の一角に建つ地域の図書館

岸根公園に面する敷地に地域図書館を計画せよ。

図書館は「知識資源の管理と新しい知識創造の場」である。インターネットの普及を背景に本との関わりが変わりつつある現代において、書籍の保管・管理と閲覧という図書館の基本的機能を満たしつつ、図書館の今後の在り方について考えること。

一方、地域図書館は中央図書館等大規模図書館を縮小した施設ではなく、コミュニティ施設としての機能が求められている。コミュニティ施設は、住民が自発的な意思により行う地域独自の活動を支援するとともに、住民同士の交流を促進する場である。周辺の都市空間構成を読みとり、岸根公園との空間的つながりを意識し、地域の人たちが本に親しみながら、地域交流を図る「地域の図書館」を計画しなさい。



【設計条件】
- 敷地：神奈川県横浜市港北区岸根町725
- 敷地面積：約2,550㎡
- 建ぺい率：60%
- 容積率：100%

非常勤講師 経歴

アリソン 理恵
Rie ALLISON

1982年生まれ、2005年東京工業大学工学部建築学科卒業、2009年NMBW(オーストラリア)にてインターンシップ、2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学、2011年～2014年一級建築士事務所ルートエー勤務、2014年～2015年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務、2015年一級建築士事務所teco設立、2018年teco株式会社に改組、2019年ara設立

川辺 直哉
Naoya KAWABE

1970年神奈川県生まれ、1994年東京理科大学工学部建築学科卒業、1996年東京芸術大学大学院修士課程修了、1997～2001年、石田敏明建築設計事務所、2002年川辺直哉建築設計事務所設立、現在東京理科大学、東京電機大学にて非常勤講師

小野 美咲
Misaki ONO

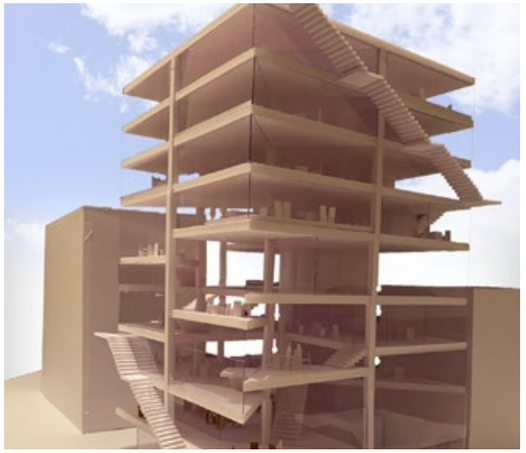
柱と柱の間
between the pillars

山元 幸花
Sachika YAMAMOTO

面
plate

三井田 昂太
Kota MIIDA

グルグル
Around the Floor

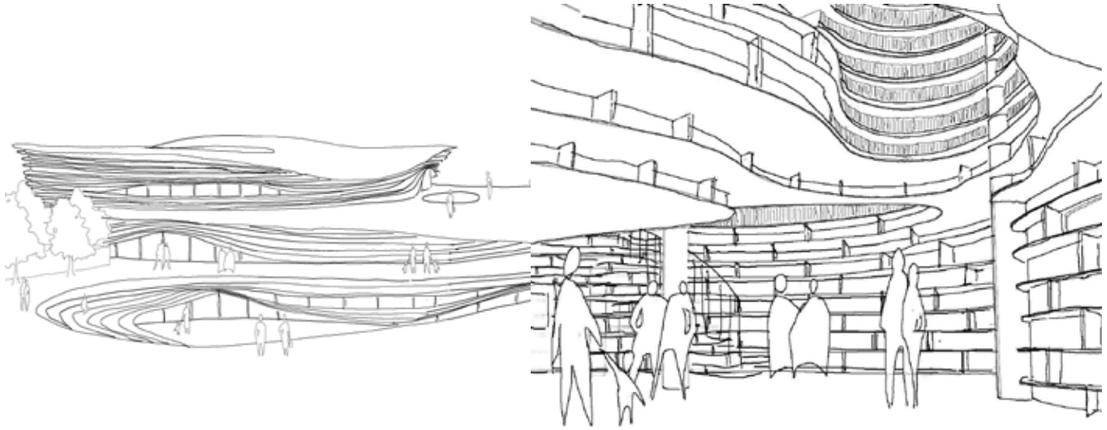


久世 文
Aya KUSE

BOX OF ARCS
box of arcs

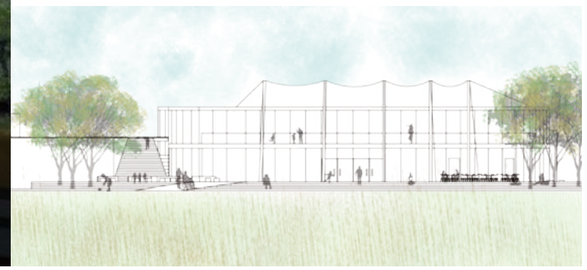
森田 泰正
Taisei MORITA

THE BOOKSHELF
the bookshelf



梅澤 達紀
Tatsuki UMEZAWA

coexist
coexist



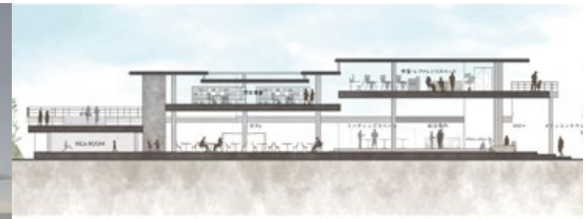
公園の一角に建つ地域の図書館

紺野 瑠偉
Rui KONNO

白の杜
white forest

影山 紗希
Saki KAGEYAMA

relationship
relationship



担当

中井 邦夫（教授）、吉岡 寛之（助教）、
上野 正也（助教）、須崎 文代（助教）、
鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、
井原 佳代（非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所）

Kunio NAKAI (Professor), Hiroyuki YOSHIOKA (Assistant Professor), Masaya UENO (Assistant Professor), Fumiyo SUZAKI (Assistant Profesor), Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier), Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

飯田 康二朗（M2、TA）、渡辺 悠介（M2、TA）、簾内 俊希（M1、TA）、
池原 なつ子（M1、TA）、山崎 結衣（B4、SA）、中澤 実那（B4、SA）

Kojiro IIDA (M2, Teaching Assistant), Yusuke WATANABE (M2, Teaching Assistant), Natsuko IKEHARA (M1, Teaching Assistant), Toshiki SUNOUCHI (M1, Teaching Assistant), Yui YAMAZAKI (B4, Student Assistant), Mina NAKAZAWA (B4, Student Assistant)

授業内容

1）トレース課題１
「住吉の長屋」（設計：安藤 忠雄）
（鉛筆書き 1/100）
2）模型製作課題
「住吉の長屋」（模型 1/100）
3）第１課題（下記参照）
4）トレース課題２
「神奈川大学６号館」（設計：RIA）
5）第２課題（下記参照）

第１課題　地域とつながる集合住宅

住宅地内の敷地に、様々な世代の居住者が、ともに住む集合住宅を設計する。敷地は、四周が道路に面する三角形の区画であり、公園のそばに立地し、商店街にも近い。地域との関連性を意識して、敷地周辺の条件を最大限に活かしながら、この場所に住む様々なタイプの世帯それぞれの生活像を具体的にイメージすると同時に、そうした個性の異なる複数の居住者が住む集合住宅ならではの楽しい提案・空間を求める。

【設計条件】
敷地：神奈川区西神奈川3-9-16
地域：市街化区域、第一種住居地域、防火地域：準防火地域
構造形式：鉄筋コンクリート・壁式構造
敷地面積：567.3㎡、建ぺい率：70%、容積率：200%

第２課題　神大ミュージアム

神奈川大学１８号館および２１号館の敷地に、神奈川大学が所蔵する収蔵品（文献史料、記録史料など）を企画、常設展示する展示室やインフォメーション・センターを含むミュージアムを設計する。敷地は、大学と住宅地との境界部に位置する緩やかな傾斜をもった角地であり、大学キャンパス・マスタープランにおいて、１６号館と共に大学の「ゲート・ゾーン」と位置づけられており、大学の対外的な顔となる空間となることが期待されている。多様な活動を含み込む可能性を最大限引き出す提案を求める。

【設計条件】
敷地：神奈川区六角橋3丁目
地域：第二種中高層住居専用地域、防火地域：準防火地域
構造形式：鉄筋コンクリート・ラーメン構造
敷地面積：1333.8㎡、建ぺい率：70%（法定は60%）、
容積率：150%

地域とつながる集合住宅

梅澤 達紀
Tatsuki UMEZAWA
記憶
Memory

山元 幸花
Sachika YAMAMOTO
立方体
cube

森田 泰正
Taisei MORITA
緑のつながる集合住宅
Relations by the green

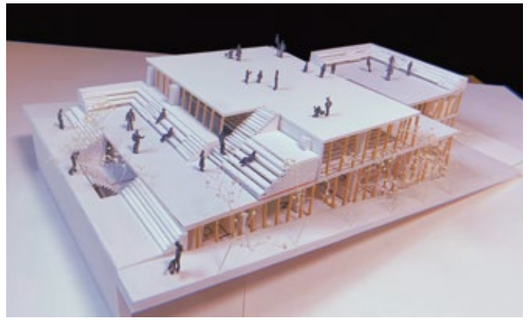
神大ミュージアム

五十嵐 希美
Nozomi IGARASHI
沿う
follow

影山 紗希
Saki KAGEYAMA
回遊
excursion

久世 文
Aya KUSE
空の高い神大ミュージアム
Kanagawa Skyline Museum

紺野 瑠偉
Rui KONNO
Inside Out
Inside Out



相澤 萌
Moe AIZAWA
見え隠れする神大ミュージアム
The Hidden Kanagawa University Museum

小野 美咲
Misaki ONO
地上と地下
Above ground and underground

担当

中井 邦夫（教授）、上野 正也（助教）、
須崎 文代（助教）、田野 耕平（助教）、
鈴木 信弘（非常勤講師、鈴木アトリエ）、
井原 佳代（非常勤講師、ihrmk一級建築士事務所）

Kunio NAKAI (Professor), Masaya UENO (Assistant professor),
Fumiyo SUZAKI (Assistant professor), Kohei TANO (Assistant professor),
Nobuhiro SUZUKI (Guest Lecturer, Suzuki Atelier) ,
Kayo IHARA (Guest Lecturer, ihrmk Architects)

中村 圭那（M2、TA）、渡辺 悠介（M2、TA）、池原 なつ子（M1、TA）、
簾内 俊希（M1、TA）、小澤 美月（B4、SA）、伊藤 伸一郎（B4、SA）

Keina NAKAMURA (M2, Teaching Assistant), Yusuke WATANABE (M2, Teaching Assistant), Natsuko IKEHARA (M1, Teaching Assistant), Toshiki SUNOUCHI (M1, Teaching Assistant), Mizuki OZAWA (B4, Student Assistant), Shinichiro ITO (B4, Student Assistant)

授業内容

1）トレース課題１：「線の練習」
2）トレース課題２：「最小限住宅」（設計：ル・コルビュジエ）
　　意匠図（鉛筆描き、1/50、1/100）
3）模型製作課題１：「ドミノ・システム」
　　（白模型、1/50）
4）トレース課題３：「水道道の家」（設計：鈴木 信弘）
　　意匠図（鉛筆書き、1/50）
5）模型製作課題２：「水道道の家」（模型、1/50）
6）設計課題　　：（下記参照）
7）模型製作課題３：屋久島の家（設計：堀部 安嗣）
　　（軸組模型、1/50）
8）読書感想文課題：「住宅論」（著者：篠原一男）

設計課題　光・風・自然を感じるセカンドハウス

河口湖に浮かぶ「鵜の島」に、セカンドハウスを設計してください。既成の考え方やスタイルにとらわれない、この島の環境を活かした、日常生活から離れたセカンドハウスならではの、自由な発想の空間による新鮮なライフスタイルの提案を期待します。

【設計条件】
・原則として木造とし、柱・梁の配置など、架構を具体的に表現すること。
・延床面積は、65 ㎡前後とし、外部空間は自由に設定してください。
・配置は島全体から好きな場所を選んでください。

【敷地情報】
計画敷地は、河口湖に浮かぶ、木々に覆われた高低差が激しい無人島「鵜の島」。
面積：0.028㎢、標高：859m

大石 純麗
Sumire OISHI
うの島 de Camping
Camp in Unoshima

遠藤 天也
Takaya ENDO
光と風の家
House of light and wind

阿部 凌大
Ryota ABE
自然との戯れ―富士山と夜空を望む―
Play with nature-overlooking Mt. Fuji and the night sky

村松 希瑞奈
Kizuna MURAMATSU
眺める家
House for view

春川 桃子
Momoko HARUKAWA
Wood-Like House
Wood-Like House

高橋 昇太郎
Shotaro TAKAHASHI
景色の違いを愉しむ家
A house that enjoys the difference in scenery

建築デザインⅢ

二つの複合建築の課題である。いずれも、プログラムを組み立てるところから手がけ、複雑な構成の検討をし、構造や動線を立体的に解く必要がある。似た傾向の作品が比較的少なかったことや一定レベル以上の提案が増えたことは、オンラインでの授業の成果かもしれない。

第一課題では、各人が関内周辺で敷地を選定し、この先の暮らし方の多様化に対して意識し、新たな建築空間の構想へとつなげる必要がある。野中さんは広い視点での検討を丁寧に解き、新たな物語をつくるように空間を立ち上げた。「開けた空間」を中心的なアイデアとしつつ、階毎にその性格を変えた。宮島さんは初めて会った人々の交流に目を向け、低層部のつくり、共用部や個室の設えでの工夫を具体的に提案した。

第二課題では、地下鉄駅出入口、遊歩道のある水路等との関わり、展示、待合所など多様な場の関係のつけ方が鍵となる。伊東さんは水路を敷地内に大きく取り込み、風が抜け太陽光を取り込む構成を、場と場の関係を丁寧にコントロールすることでリアリティのあるものとした。穂屋下くんは、流動的な空間の繋がり、場所ごとの視線のコントロール、独特の外観などを、三角形のスラブを立体的に組み合わせることで実現した。（曽我部 昌史）

建築デザインⅡ

今年度は新型コロナ禍の拡大により全回、リモート授業を余儀なくされた。リモート授業は教員も学生も初めての試みであり、その準備と授業運営、教育成果に少なからず不安のあるスタートであった。そのため例年、用途と規模の異なる2課題（複合用途）を要求していたが、今回は一つの敷地に限定して、まちの周辺環境と敷地形状を読み解き、比較的提案に自由度のあるランドスケープを主としたプレ課題と用途を限定した本課題の連続したデザイン思考を求めた。

プレ課題と本課題を通して、まちとのつながりと建築の規模と使われ方及び計画的視点、人の集まり方と動きなどを建築に反映できているかについて評価した。全体的には、出題側の意図を汲み取った提案が多く、成果は十分達成できていたと思う。2つの課題で上位の作品は駅前の2面道路の場所性、敷地形状（斜面地）をそれぞれの読み取りを反映した内容であり、デザインの意図が十分に伝わるプレゼンテーションであった。ミニシアターコンプレックスは映画館という非日常的な閉じたボックスと商店街とつながる開放的かつ日常的な生活との組み合わせ方の提案と異種用途の計画的かつ空間構成の解法が優劣を分けた。実体としての模型をチェックできなかったのは残念だったが、今回のリモート授業を通してイメージした空間を限られた伝達ツールで第3者に伝えるかを学んだのは一つの成果であったと思う。（石田 敏明）

建築デザインⅠ

本科目は、小・中規模施設の設計課題を通して、建築を成立させる計画的な基礎を学ぶとともに、自らが設定したテーマを建築化する方法の修得を目標としている。本年度は2つの課題でいずれも建築のプログラム及び空間構成において、周辺環境との関わりを意識したデザインを促している。

「第Ⅰ課題：関内に建つオフィス」は関内に8層程度の本社ビルを計画する課題である。立体表現でスラブ勝ちに映る構成にあって、周囲との緩衝領域を小野さんは木質壁を柱間に埋め込み、山元さんはソリッドな壁で区切り、三井田さんは動線を配置することで独自なものとしている。久世さんは曲線を使いながら美しく仕上げた。「第Ⅱ課題：公園に面して建つ地域図書館」では、図書館の建築計画を丁寧に解きながら、かなりのヴォリュームを占める開架図書室をどう扱うかが鍵となるのだが、今回の優秀案はいずれも周囲との関係が丁寧に解かれている。A+案は共通して半地下の構成で、森田さんは書架を構造体に利用した有機的な建築、紺野さんは特徴ある部分をうまく繋げており、いずれも力量を感じさせる秀作である。梅澤さん、影山さんは公園側に厚みのある魅力的な空間を作り上げた点が評価された。（山家 京子）

設計製図Ⅱ

本授業は、建築学科生全員を対象とする最後の製図系必修科目であり、主にRC造中規模建築を課題としている。設計課題では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。ただし今期はコロナ禍の影響ですべてオンライン授業となったため、様々な点で難しい対応が必要となった。例年と比較した2020年度の履修状況の傾向としては、1）「秀」と「優」の人数が多かったこと（特に「優」）、2）「不可」評価が少なかったこと、3）平均点が例年に比べ高かったこと、が挙げられる。対面での指導ができなかったなかで、本誌に紹介されている優秀作品群を含め、例年と比べても遜色のない優れた作品が多かった。オンライン授業の利点もあったため、今後の授業運営に活かしていければと考える。（中井 邦夫）

設計製図Ⅰ

本授業は、建築学科生全員対象の製図系必修科目であり、主に木造小規模建築を課題としている。空間演習と設計課題では、150名余りの履修生を6ユニットに分けて指導し、中間と最終で全体講評会を行っている。ただし今期はコロナ禍の影響で後半の数回を除いてオンライン授業となったため、様々な点で難しい対応が必要となった。2020年度の履修状況の傾向としては、1）全体平均点はさほど変わらないものの、「良」が減り、「優」と「可」が増えたこと、2）昨年度まで減少傾向にあった不合格率も若干増えたこと、が挙げられる。こうした成績の二極化傾向の原因は、1年生初の設計製図科目にも関わらずオンライン授業スタートとなったことで、学生たちのモチベーションに例年以上に差が生じてしまったことも一因と考えられる。（中井 邦夫）

木の家設計グランプリ

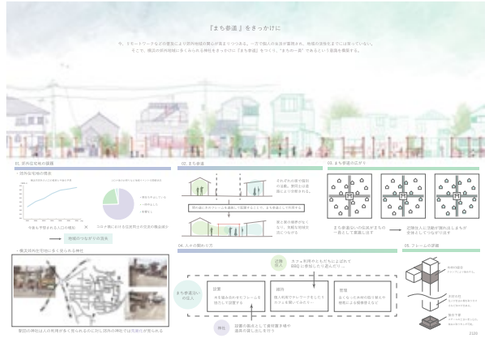
大地に寄り添う家　［株式会社はなおか 賞］
谷本 優斗、林 眞太朗、井口 翔太

無常を楽しむ家　［モリノイエ軽井沢 賞］
－回転壁で自然に対する身の置き方を更新し続ける暮らし－
三浦 悠介

「木の家設計グランプリ2020」において、谷本優斗さん（当時曽我部・吉岡研究室学部4年）井口翔太さん（当時曽我部・吉岡研究室学部4年）林眞太朗さん（当時山家・上野研究室学部4年）が株式会社はなおか賞を受賞し、三浦悠介さん（当時山家研究室修士1年）がモリノイエ軽井沢賞を受賞しました。

はまっこ郊外暮らしコンペティション

『まち参道』をきっかけに　［横浜市立大学 賞］
石井 瞭亮、木下 昌紀、野中 美奈、宮島 里帆



「はまっこ郊外暮らしコンペティション」において、石井瞭亮さん（当時曽我部・吉岡研究室学部3年）木下昌紀さん（当時曽我部・吉岡研究室学部3年）野中美奈さん（当時曽我部・吉岡研究室学部3年）宮島里帆さん（当時曽我部・吉岡研究室学部3年）が横浜市立大学賞を受賞しました。

第4回 Woody コンテスト　［佳作］

家族を繋ぐ縁側 －茶畑に囲まれた豊かな暮らし－
鈴木 碧衣、北島 海土

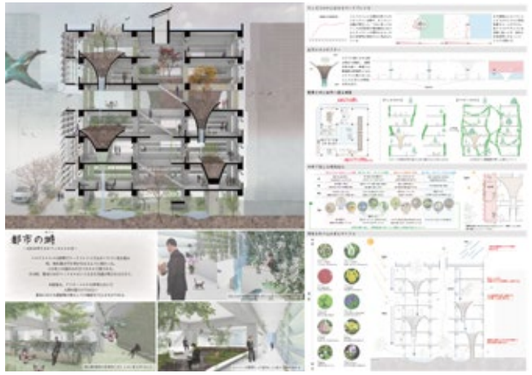
「第4回 Woodyコンテスト」において、鈴木碧衣さん（当時山家・上野研究室学部4年）が京都芸術大学の北島海土さんと共に佳作を受賞しました。

アフターコロナの世界コンペティション

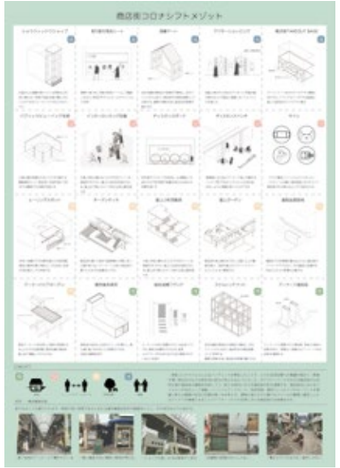
直接会って会話をする　［五十嵐太郎 賞］
林 淳平、上澤 佑太郎、楢原 杏奈、北見 明寛、酒井 隆也

円でつながる小学校　［長崎由紀子 賞］
酒井 優人、金原 佳佑、坂木 真一郎、大島 拓実、連金 航

都市の塒　［鷲田めるろ 賞］［水野祐 賞］
－流転回帰するオフィスビルの姿－
井口 翔太、稲場 悠大、木嶌 崚貴、小玉 裕佑、谷本 優斗



商店街コロナシフトメソッド　［五十嵐太郎 賞］
三浦 亜也奈、佐塚 将太、原 巧、蔡 恪非、解 添禹



「アフターコロナの世界」コンペティションにおいて、曽我部・吉岡研究室の当時修士2年、修士1年、学部4年の学生による4作品が審査員各賞を受賞しました。

2020 年度支部共通事業日本建築学会設計競技 「外との新しいつながりをもった住まい」 ［関東支部入選］

郊外エイド – 硬直した郊外住宅地を切り開くための「建て繕い」による処方箋 –

齊藤 健太、鈴木 啓生

2020年度支部共通事業日本建築学会設計競技「外との新しいつながりをもった住まい」において、鈴木啓生さん（当時曽我部研究室修士２年）齊藤健太さん（当時石田研究室修士２年）が関東支部に入選されました。

せんだいデザインリーグ 2021 卒業設計日本一決定戦 ［100 選］

百貨都市

– 無個性都市のアイデンティティを確立する百貨店の提案 –

嶋谷 勇希

「せんだいデザインリーグ2021卒業設計日本一決定戦」において、嶋谷勇希さん（当時石田・田野研究室学部4年）が100選（27位）に選出されました。

赤レンガ卒業設計展 2021 ［80 選］

人間のためでもある建築

谷本 優斗

「赤レンガ卒業設計展2021」において、谷本優斗さん（当時曽我部・吉岡研究室学部4年）が 80選に選出されました。

第 32 回 JIA 神奈川・卒業設計コンクール 更衣する建築 ［10 選］

– クリエイターたちの集う裏原宿のアトリエ兼店舗の提案 –

鈴木 碧衣

「第32回 JIA神奈川・卒業設計コンクール」において、鈴木碧衣さん（当時山家・上野研究室学部4年）が10選に選出されました。

建築新人戦 2020 ［100 選］

自然に集う

野中 美奈

「建築新人戦2020」において、野中美奈さん（当時曽我部・吉岡研究室学部3年）が 100選に選出されました。

建築計画研究室

中井 邦夫 | Kunio NAKAI
教授

[担当授業] 建築計画A、設計製図Ⅰ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-67A

鈴木 成也 | Naruya SUZUKI
助手

[担当授業] 設計製図Ⅰ、建築デザインⅡ 他
[部屋番号] 8-67

台東区浅草文化観光センターコンペ入選案（2009年）

富久町の家（2013年）

建築史研究室

内田 青蔵 | Seizo UCHIDA
教授

[担当授業] 日本近代建築史、建築のデザイン 他
[部屋番号] 8-510

須崎 文代 | Fumiyo SUZAKI
助教

[担当授業] 設計製図Ⅰ・Ⅱ、建築グラフィックス 他
[部屋番号] 8-510

日本近代建築史より、辰野金吾設計の日本銀行本館（左）とベルギー銀行（右）の比較

上海の街歩きの様子

都市デザイン研究室

曽我部 昌史 | Masashi SOGABE
教授

[担当授業] 都市デザイン論、建築デザインⅡ・Ⅲ 他
[部屋番号] 8-61

吉岡 寛之 | Hiroyuki YOSHIOKA
助教

[担当授業] 設計製図Ⅱ、建築デザインⅠ・Ⅲ 他
[部屋番号] 8-61

赤松地区防災拠点（徳島県/2017）

来島海峡サービスエリア仮店舗（愛媛県/2018）

建築デザイン研究室

六角 美瑠 | Miru ROKKAKU
教授

[担当授業] 建築設計論、建築デザインⅡ 他
[部屋番号] 8-68A

ORU 外観（栃木県/2003）

Seaforce 内観（東京都/2019）

都市計画研究室

山家 京子 | Kyoko YAMAGA
教授

[担当授業] 都市計画、建築デザインⅠ 他
[部屋番号] 8-66A

上野 正也 | Masaya UENO
助教

[担当授業] 設計製図Ⅰ・Ⅱ 他
[部屋番号] 8-66A

十日市場駅勢圏におけるまちづくり：たからもの探しワークショップの様子（2018年）

弘明寺商店街でのインスタレーション制作（2018年）

神奈川大学工学部建築学科・大学院工学研究科建築学専攻　沿革

1928　米田吉盛が「横浜学院」創設（旧横浜市中区桜木町）
1929　専門学校令により「横浜専門学校」設立認可
1930　六角橋に移転、横浜キャンパス開設（5月15日 創立記念日）
1949　学制改革により「神奈川大学」設置
1952　神奈川大学整備拡張計画（設計：山口文象/RIA）
1965　神奈川大学工学部建築学科創設（初代学科長：谷口忠教授、定員80名）
　　８号館（建築学科研究室、製図室）竣工
1967　12号館（建築学科総合実験棟）竣工
1971　大学院工学研究科建築学専攻博士前期(修士)課程設置
1973　かんな会（建築学科同窓会）設立
1985　建築学科創設20周年　記念誌発刊
1990　大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程設置
1994　建築学科にシステムコースとデザインコースの2コース制導入
1998　横浜キャンパス再開発開始（2002年完了）
2005　RAKU（デザインコース年鑑）vol.1発刊
2006　建築学科に建築環境コース、建築構造コース、建築デザインコースの3コース制導入
　　第1回東アジア大学建築学術交流セミナー（以後毎年開催）
　　日本建築学会120周年記念大会を神奈川大学で開催
2008　神奈川大学創立80周年、「学校法人神奈川大学将来構想」公表
2015　建築学科創設50周年　記念誌発刊
2022　建築学部開設予定

8号館

建築学科・専攻関連の主な学術交流協定校　＊派遣交換留学有り（U:全学、E:部局間））

アジア：同済大学（中国、1982～）、武漢理工大学（中国、1982～）、成均館大学校（韓国、2002～）、
国立台湾科技大学（台湾、＊E 2005～）、モンクット王工科大学トンブリー校（タイ、＊E 2019～）

欧州：デンマーク王立芸術アカデミー建築大学（デンマーク、2010～）、国立モンペリエ高等建築大学（フランス、＊E 2013～）、
バスク大学（スペイン、＊U 2017～）、ルツェルン応用科学芸術大学工学・建築学部（スイス、＊U 2017～）、
チェコ工科大学（チェコ、＊U 2018～）、カールスルーエ応用科学大学（ドイツ、＊U 2018～）、
ケルン工科大学（ドイツ、＊U 2018～）

その他：タスマニア大学（オーストラリア、＊U 2011～）、南フロリダ大学（アメリカ、＊E 2020～）

RAKU バックナンバー

vol.1

vol.2

vol.3

vol.4

vol.5

vol.6
「室伏次郎研究室」

vol.7
「白濱謙一先生 追悼特集」

vol.8
「山口文象/RIAの神奈川大学総合計画」

vol.9
「大学との連携による六角橋商店街のまちづくり」

vol.10
「東アジア建築都市学術交流セミナー」

vol.11
「西和夫先生 追悼特集」

vol.12
「重村力の足跡」

vol.13
「JINDAI KENCHIKU の記憶」

vol.14
「私たちのキャンパスの建築」

vol.15
「廃材標本 学生による
セルフリノベーションの軌跡」

vol.16
「まちのように住む 国際学生寮・
栗田谷アカデメイア」

RAKUは、神奈川大学工学部建築学科建築デザインコースで2005年から発行しています。第6号以降は、毎号多彩なテーマの特集を組み、大学院生主体の取材と制作により、単なる学生作品紹介誌を超えた建築誌としても楽しめるように企画しています。第15号からは編集者の二階さちえ氏を起用し、第12号からご担当頂いているデザイナーのqp氏とともに、さらにパワーアップしました。読んで眺めてお楽しみください。　（建築デザインコース主任 中井邦夫）

学生編集委員
制作代表　林淳平
制作副代表　石谷慶
特集班　小澤美月(代表)、井口翔太、日下紗菜、菅野麻衣子、立田大喜、半井雄汰、竹本真、遠藤啓吾、古城偉央理、坂本理久(制作協力)
建築探訪班　髙田晃(代表)、城所真緒、中澤実那、楢原杏奈、二見陸、三谷隆介、
[制作メンバー]
伊藤伸一郎、永髙裕太、木嶌峻貴、酒井優人、嶋谷勇希、鈴木碧衣、鈴木力、谷本優斗、丹羽航平、林眞太朗、松村美里、王欣漠、岡田直樹、解添禹、蔡恪非、佐藤季也、簾内俊希、唐泓、三浦悠介、矢野新、李嘉文、連金航、金美善、加藤佑規、徳山碩峰、鈴木杏奈、池原なつ子、三浦亜也奈、山本麻貴

監修／中井邦夫、吉岡寛之、上野正也、須崎文代、鈴木成也
特集ページ編集／二階さちえ
デザイン／qp

「RAKU Vol.17」　発行／神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース
発行日／2021年8月31日　[横浜キャンパス]横浜市神奈川区六角橋3-27-1

REVIEW OF ARCHITECTURAL DESIGN COURSE,
KANAGAWA UNIVERSITY